

なにももの私たちを

神の愛

から引き離すことはできない(上巻)

八紙
マ手
ローヘ

吉祥寺キリスト教会

G・ベック

なにももの
私たちを

神の愛

から引き離すことはできない(上巻)

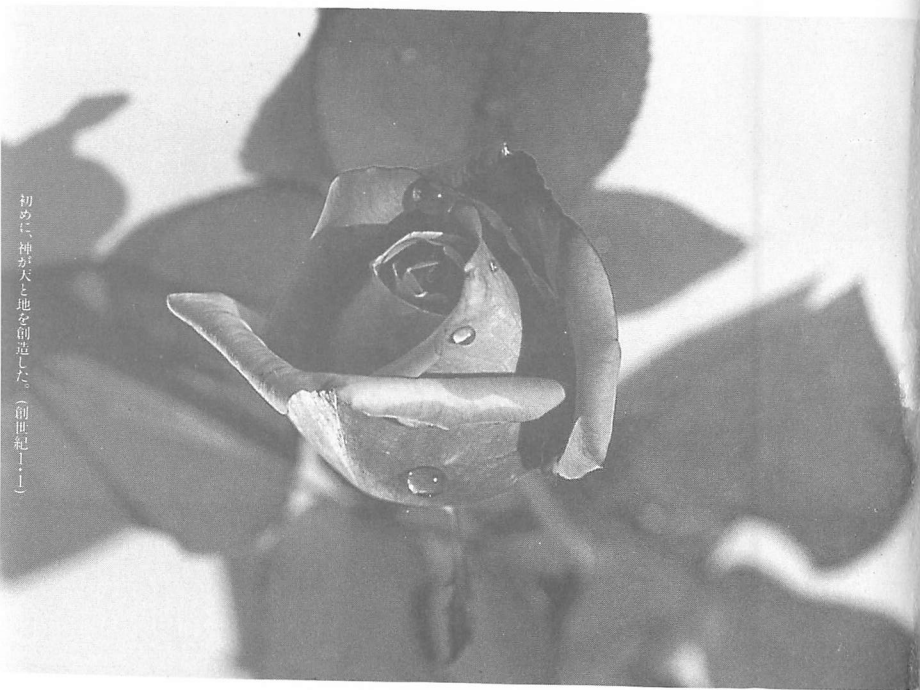
ローマ人への手紙

ゴットホルド・ベック著

ANTOLOGICA
CCIOLI
PALMIRE
N. ANGELI
1. DI GENOVA 1984



初めに、神が大地を創造した。(創世紀1・1)



しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、
これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。

(ローマ 8・37)

なにものも私たちを
神の愛
から引き離すことはできない（上巻）

吉祥寺キリスト集会
ゴットホルド・ベック著

林の悪



イエスは言われた。「あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。」（マタイ18・3）

まえがき

ゴットホルド・ベック

「主よ。多くの人々の心の内に働きかけてくださり、奇跡を行ない、人々を迷いからまことの救いへと立ち返らせてください。」

これが私たちの切なる祈り、また心からの叫びです。この本は、吉祥寺キリスト集会で毎週火曜日に持たれている「婦人の集い」での、ローマ人への手紙による連続メッセージをそのまま収録したのですが、これらのメッセージの目的も、まさにそれだったのです。

したがってこの本はいわゆる注釈書や解説書では決してありませんし、また参考書でもありません。研究発表でもありません。「真理を求め、知ろう」と切に望む方々のためのものなのです。主なる神は、人間の意志を非常に尊重され、人間に選択の自由意志を与えておられます。「救いを得ること」は「意志の決定」なのです。

だれでも神のみこころを行なおうと願うなら、その人には、この教えが神から出たものか、わたしが自分から語っているのかがわかります。

(ヨハネ 7・17)

渴く者は、来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。(黙示 22・17)

この本は、ローマ人への手紙の説明書ではありません。いうまでもなく、ローマ人への手紙に宣べられているメッセージは、比類のない福音です。誰もが万物の造り主によって義と認められ

ることができ、完全な永遠の救いを提供されていることを、主なる神ご自身が啓示してくださったのです。

私はこの本に、次のような革命的な題名を付けたいという気持ちを持っています。すなわち、「キリスト教に対する反対！」と。

なぜなら私たちは、現代のキリスト教のためには宣伝をしたくないからです。現代の組織されたキリスト教というものは、主なる神の望んでおられるようなものではなく、人間が作りあげた産物、一般的な宗教組織になりさがってしまっているからです。

万物の創造主は、人間が作った宗教とは何の関係もないお方です。神の目から見ると、人間が作りあげた宗教なるものは、子供の遊びのようなものであり、犯罪よりもひどいものであり、無意識のうちに神を冒瀆するものであり、そして真の救いを拒むものです。現代の多くの宗教は、うまみのある商売にすぎません。

「宗教」は、人間の罪の債務の問題を解決することができません。人間はみな悩んでいます。そして数えきれないほどの多くの人は、いわゆる宗教としてのキリスト教に対して反発します。いったいどうしてでしょうか？ 人は束縛されたくないからです。人は自由になりたいからです。生けるまことの神は、人間に向かって、次のように約束してくださっています。

もしわたしがあなたがたを自由にするなら、あなたがたは本当に自由なのです。

それでは人は、どのようにして自由になることができるのでしょうか？ 一つの宗教を持つことによってでしょうか？ 教会の会員になることによってでしょうか？ または洗礼を受けることによって、毎週礼拝に出席することによって、十分の一を献金することによってでしょうか？ 決してそうではありません。たしかにそれらによって、人は「宗教的」にはなるでしょう。しかしその結果は、自己満足、間違っただけの思い込み、そして盲目に陥ることになります。

あなたは、精神的な拠り所、すなわち生ける真の神を、永遠なる岩として必要としているのではないのでしょうか。

多くの教会は、文字通り「教える会」になってしまっています。そこでは、いわゆる「教え」が宣傳伝えられ、そうして人はその「教え」を良しとして認め教会の会員になれば「クリスチャン」になれる、つまり救われる、と信じ込んでしまっています。こういう風に洗脳された人は、惑わされています。この考え方は間違っています。なぜかというと、どんな人でも、単なる頭の知識を持つことによって救われることはないからです。

主イエスは、この地上におられたとき、多くのことを語られました。しかし、いろいろなことを語られたあとで、ただの一度も「どうですか、理解できましたか？ 大切なことが分かりましたか？ もう一回ゆっくりと説明しましょうか？」とお聞きになったことはなかったのです。どうしてでしょうか？ それは、大切なことではないからです。重要なのは、次のことだけです。「一つの教えを勉強して、理解し、肯定するようになるのではなく、聖書の中心であられる天と地の創造主を個人的に識り、その創造主と交わりを持つこと」です。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

(マタイ 11・28)

わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。

(ヨハネ 6・37)

この本の呼びかけも、同じです。どうか主イエスのみもとに来てください。主イエスのみもとに来て自分のわがままを認め告白する人は、主イエスを自分の救い主として知るようになります。そして次のように告白します。

「主イエスは、私を受け入れてくださった。

私の罪は、許されている。

みめぐみによつて、私は神の前に正しい者とされた。

何ものも、私を『神の愛』から引き離すことはできない」。

この本のメッセージを通して、一つの教えが宣べられ人を納得させるのではなく、「主イエスだけが中心になれる」ことができれば嬉しく思います。そうしてきっとあなたも、主のみめぐみによつてパウロがしたように告白することでしょう。

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によつて受けたのです。

(ガラテヤ 1・12)

しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。

(ピリピ 3・7、8)

目次

まえがき.....7

なにもも私たちを **神の愛** から引き離すことはできない (上巻)

第Ⅰ部 全人類の救いの必要性.....15

(ローマ人への手紙該当章と節)

1 導入部 (1)17

2 導入部 (2)33

3 異邦人の罪に対する神の怒り.....50

4 ユダヤ人の罪に対する神の怒り.....64

5 ユダヤ人に対する神の啓示.....80

6 誰ひとり神の前に義と認められない.....99

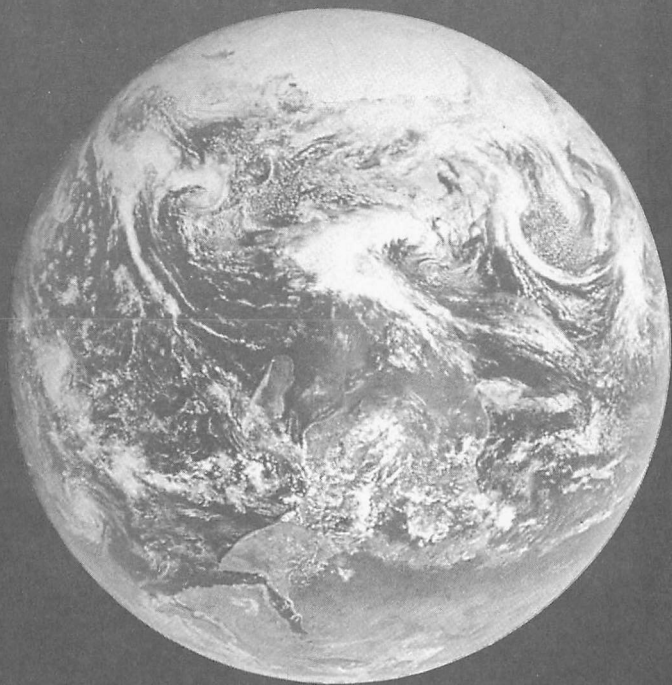
第Ⅱ部 提供された主の救い.....115

7 人間はいかにして神の前に義とされるか.....117

目 次

8	恵みによつて信者に与えられる神の義	3	27	130
9	信じるとはどういうことか	4	1	142
10	与えられた義の祝福と富(1)	5	1	156
11	与えられた義の祝福と富(2)	5	12	172
			21	
第Ⅲ部	新しい生活の歩み			187
12	キリスト者が罪に対して取る態度	6	1	189
13	キリスト者の新しい生活の歩み	7	1	202
14	人間のジレンマ	7	14	217
15	新しい生活の歩みのための力	8	1	229
16	私たちの救いのすばらしさ	8	11	240
17	生ける望み	8	18	258
18	至上の頌栄	8	31	272
			39	
基礎的なみことば				288
「実を結ぶ命」「光よあれ」のおすすめ				290
キリスト集会・家庭集会のご案内				300

神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。(ローマ8:31)



第Ⅰ部 全人類の救いの必要性

新約聖書ローマ人への手紙

1章1節から3章20節まで



野口広氏(早稲田大学理工学部教授)



斎藤清子さん(家庭集会・岡山県総社市)

ベック夫妻(右がこの本の著者ゴットホルド氏、
左は奥様のミンヘンさん)



主よ。あなたの御前には喜びが満ちています。(詩篇16・11)

1 導入部 (1)

ローマ人への手紙

1章1節から7節まで

I パウロの自己紹介

1 主のしもべ

2 召された使徒

3 福音を宣べ伝えるために選り分けられたこと

II 手紙の内容

1 福音

2 旧約聖書の成就

3 神の子イエス

a 肉によればダビデの子孫

b 霊によれば復活

III 受取り人

1 恵みと使徒の務め

2 信仰の従順

3 使徒の使命

導入部 (1)

多くの名著や古典がそうであるように、ローマ人への手紙も、多くの人によってすばらしいものだと言われますが、本当に注意深く読む人は、残念ながら極めて少ないようです。ローマ人への手紙は、キリスト者にとって最も包括的な教えが記された書であると言えます。有名な教父クリソストムスは、毎週二回ずつローマ人への手紙全体を読んだそうです。ドイツの宗教改革者ルターは、ローマ人への手紙こそ新約聖書の中心部分をなすものであり、最も純粹な形で福音を書き記したものである、と言っています。ローマ人への手紙は、一句一句暗記するべきものであり、靈の糧として味わうべき御言葉の書である、ということができましょう。ローマ人への手紙は、いくら読んでも尽きることがなく、いくら学んでもなおその深さが次々と開かれてくる書物です。ルターは、読めば読むほど味わいが深くなる、と言っています。

このローマ人への手紙を根本から学ぶことは、キリスト者一人一人にとって、どうしても欠くことのできないことです。ちょうどパウロに聖靈が臨んで働いたように、私たちも救いの事実についてはっきりとした知識をもつ必要があります。ここで誤解のないように申しあげておきたいことは、キリスト者になるためにローマ人への手紙を研究するのではなく、キリスト者の靈的な成長のためにローマ人への手紙を学ぶのだ、ということです。新約聖書の教えは、キリスト者のためであって、未信者にとっては、主イエスとの出会いこそ第一に要求されるものであることを忘れてはなりません。

ローマ人への手紙は、真理と偽りとを見分ける規準、あるいは標準となるものです。聖書全体の内容は、すべてこのローマ人への手紙の中に映し出されているといっても言いすぎではありません。

せん。旧約聖書の引用が多いことから、このことがわかります。全ての信仰の教え、たとえば律法、福音、罪と罰、キリストと神、信仰と義、良い業と勝利の生活、救いの完成に対する生き生きとした希望、これら全てのものが、ローマ人への手紙のなかに記されているのです。

冒頭の1章1―7節までは、ローマ人への手紙の導入部であって、ローマ人への手紙全体を要約して書かれています。今日はその1―7節までの序論を見てみたいと思います。

¹ 神の福音のために選²び分けられ、使徒として召されたキリスト・イエスのしもべパウロ、
——この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので、
御子³に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。⁵このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたすためなのです。
⁶ あなたがたも、それらの人々の中にあつて、イエス・キリストによって召された人々です。——このパウロから、ローマ⁷にいるすべての、神に愛されている人々、召された聖徒たちへ。私たちの父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安があなたがたの上にありますように。

(ローマ1・1―7)

パウロは、まず最初にローマにいる主にある兄弟姉妹に向つて、心からの挨拶を送っています。パウロの証しは、栄光に富みたまう神の子、主イエスであります。尊い救いの御業は、全人類の

ためになされました。この救いの事実を心から信頼して受け入れる人は、だれでも神の救いと義をすでに受けているのです。このすばらしい事実を知らせるために、パウロはこの手紙を書き送ったのです。

まず、パウロは次の三つのことを書き送っています。

I パウロは自己紹介をしています。

II この手紙の内容を簡単に記しています。

III この手紙の受け取り人のことについて書き記しています。

I パウロの自己紹介

まず自己紹介をするにあたり、パウロはさらに三つのことを述べています。

1 自分が「神のしもべ」あるいはもっと強く表現するなら神の奴隷である、と断言しています。

2 自分が「使徒として召され」遣わされたものであることを明らかにしています。

3 神の「福音を宣べ伝えるために選び分かれた」ことをも記しています。

以前のサウロは、イエスと出会って以来、イエスのしもべあるいは奴隷であることを表すために、パウロ、すなわち最も小さい者という名前を自ら好んで使いました。すなわちパウロとは、大いなる主の最も小さなしもべという意味です。パウロは、自分の名前が世界中に広まったにもかかわらず、自ら大いなる人間になりたいとは思いませんでした。イエスのしもべ、これこそパ

ウロの喜びであり、誉れであつたのです。パウロは、イエスの尊い血潮によって買いとられたゆえに、完全に主に従ふことだけが彼の喜びとなつたのです。主は自分を愛して、そのために御自身を捧げてくださった……この思いと感謝がいつもパウロの心を満たし続けたのです。そしてパウロもまた、主を限りなく愛し、主のために全てを捧げたのです。

あなたも、パウロと同じように主イエスのしもべとして、日々心から主を愛しておられるでしょうか。主のために全てを犠牲にすることが、あなたの喜びとなつていくでしょうか。

私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。キリストは、死んだ人にとつても、生きている人にとつても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。

（ローマ14・7―9）

最高の自由は、ただ主と結びついているときにのみ与えられるのです。パウロは、学者や賢人としてこの知恵の言葉を語つたのではなく、イエスのしもべとして自分の主、すなわち主人である主イエスの言葉を語つたのです。

第二に「使徒として召された」ことについて考えてみましょう。

いわゆる十二弟子、すなわちよみがえりの証人となつた使徒とは、特別に主の御生涯と御栄光に接した人々でした。これに対してパウロは、この地上では生前のイエスに接する機会を持つこ

とができませんでしたが、死からよみがえられ、高く引き上げられたイエスに接することができ、豊かに召されたのです。

イエスによって遣わされた者であるということは、何という光栄でしょうか。一国の大使になるということは、非常に名譽なことです。その人は豪華な家と車を与えられ、まことにすばらしい生活を保証されます。しかし、主イエスから遣わされた者の方が、比較にならないほどはるかに光栄であることを忘れてはなりません。

こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。

(Ⅱコリント5・20)

パウロの生涯の全ては、主の御心に従うことでした。パウロは使徒となり、彼を召された方の使節になりました。パウロは、高く引き上られて神の右の座に座しておられる方の最高の權威をもって語りました。私たちはローマ人への手紙を熟読するとき、このことを覚えましょう。

第三に、神の福音を宣べ伝えるために「特に選び分けられた」パウロについて考えてみましょう。

パウロの生涯の内容は、まさに主イエスの救いの福音そのものとなりました。福音は、罪人を解放し、自由な身とならせるゆえ、罪人を罪の奴隷から救い出すことができますのです。自分の罪が赦された者は、一つの課題を担うことになります。

けれども、生まれたときから私を選び分け、恵みをもって召してくださいださった方が、異邦人の間に御子を宣べ伝えさせるために、御子を私のうちに啓示することをよしとされたと

き……

(ガラテヤ 1・15～16)

救われた人は、まだ救われていない人を救いに導く義務と使命を担うのです。ですからその重荷、すなわち失われた魂を救いに導くという責任感を強く持たなければ、その人は根本的におかしいと言えるわけです。しかし、失われた魂を救いに導くためには、特に選り分けられることがどうしても必要です。この世的な一切のものから離れること、自分自身からさえも離れることが、そのためにはどうしても必要です。キリスト者はだれでも、主イエスによって召され選り分けられた使徒、使節であるはずです。各々その召しに応じて生活しなければなりません。

Ⅱ 手紙の内容

次に、2～4節に記されている手紙の内容の概略について見てみることにしましょう。

パウロは、神の喜びのおとずれ、すなわち福音を説明しています。それは喜びのおとずれでもあり、パウロが宣べ伝えた、心からわきあがってくる歓呼の叫びでもあります。そして、パウロが言っているように、これこそ旧約聖書で預言されたことの完成と成就にほかならないのです。

この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので、御子に関することです。

(ローマ 1・2)

したがって、ユダヤ人はこのことをあらかじめ知っていたわけです。しかし、イエスこそほか

ならぬ救い主であるということを担当に知っていた人は、ほとんどいませんでした。ただ、ザカリヤ、エリサベツ、ハンナ、シメオン、マリヤ、ヨセフ、羊飼いたち、博士たちだけがこのことを知っていたにすぎなかったのです。彼らは旧約聖書で預言されたことを正しく理解していたゆえに、この出来事が起ったときにこの事実を認めることができ、卑しいしもべのかたちをとってこの世にこられた主イエスを信じて受け入れることができたのです。旧約聖書全体の内容はイエス・キリストです。

定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。これは律法の下にある者を贖いだすためで、その結果、私たちが子としての身分を受けるようになるためです。

(ガラテヤ 4・4～5)

3節を見ると、これが御子に関する福音であることがわかります。すなわち福音とは、とりもなおさず御子イエス・キリストの人格にほかならないのです。また、パウロは御子がダビデの子孫として生まれたとも書いています。マタイ1章を見るとイエスの系図が出ていますが、それを見ればイエスが確かにダビデの子孫であることがわかります。また、黙示録22章16節を見ると、イエスがダビデの根、また子孫、輝く明けの明星であることがわかります。すなわちイエスは、約束されたダビデの子孫なのです。

ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。その

子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。

（ルカ 1・31～33）

イエスがダビデの子孫として生まれ、ダビデの王位を受け継ぐものであることから、イエスがイスラエルの王となる資格をもっていることは明らかです。イエスは天に引き上げられたあとで、再び私たちを迎えに空中まで降りてこられ、私たちイエスを信じる者も、主イエスと同じかたちに変えられるのです。さらにそのあとで、主イエスは目に見えるかたちで公に再臨なさり、全てを支配なさるのです。

人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。

（マタイ 25・31～32）

主イエスこそ、旧約聖書の成就であり、約束されたメシヤです。

4節には、イエスは「大能によって公に神の御子として示された方」だとあります。パウロはまずはじめに、イエスがダビデの子孫、すなわち人の子であると述べ、そのあとで「神の御子」であることを公にしているのです。

ナタナエルはイエスにむかって「先生、神の子よ」とさげびしました。ペテロもイエスこそ約束

されたメシヤ、神の子と言いました。ヨハネは私たちは神のひとり子の栄光を拝した、と言いました。主イエス御自身も私は神の子であると仰せられました。神御自身も、イエスこそ我が愛する子、また私の心になう者であると仰せになりました。

主イエスの中には、神の生ける力と聖い御霊が宿っていましたから、死に打ち勝つ力があつたのです。主イエスだけが、私はよみがえりです、いのちです、とすることができたのです。

ナインの若者を、主イエスは生きかえらせました。ヤイロの娘は、死からいのちへと移されました。ラザロも、墓と腐敗から立ち返ることができました。

イエスは言われました。

だれもわたしからいのちを取ったものはいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしにはそれを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。

(ヨハネ 10・18)

イエスは、神の子です。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(ヨハネ 3・16)

御子を持つ者はいのちを持っており、御子を持たない者はいのちを持っていません。

（イヨハネ5・12）

イエスは聖なる方です。なんとという栄光、なんとという聖なる光、なんとという聖霊の力が主イエスから出ていることでしょうか。イエスとは、人としての名前であり、キリストとは、約束されたメシヤの称号であり、我らの主とは、王としての尊厳を表す言葉であり、また死といのちに對して絶対的な權威をもち、教会のなかで中心的な座を占められるべきお方なのです。

人間として、また神の子羊として、イエスは救いを成就してくださいました。その救いの完成を証明するのは、復活にほかならないのです。今日イエスは、全てを支配しておられ、全ての權威を持つておられます。

それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。

それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。

（ピリピ2・9～11）

あなたも、このイエスを自分の主としておられますか。

Ⅲ 受取り人

最後に、ローマ人への手紙5〜7節で、この手紙を受け取る人たちについてパウロが書き記したことを見てみましょう。

すべてはイエスにより、イエスから出て、イエスに至るものですが、パウロと異邦人との関係、あるいは、パウロとローマにいるキリスト者との関係も、イエスにより、イエスから出て、イエスに至るものでした。パウロは、恵みと使徒の務めを受けた、と述べています。「恵み」とは、個人的な恩寵であり、イエスとの出会いによってあたえられた恵みです。「使徒の務め」とは、奉仕するために召されていることです。

このようにして、私は祭司長たちから権限と委任を受けて、ダマスコへ出かけて行きますと、その途中、正午ごろ、王よ、私は天からの光を見ました。それは太陽よりも明るく輝いて、私と同行者たちとの回りを照らしたのです。私たちはみな地に倒れましたが、そのとき声があつて、ヘブル語で私にこう言うのが聞こえました。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。とげのついた棒をけるのは、あなたにとつて痛いことだ。」私が「主よ。あなたはどなたですか。」と言いますと、主がこう言われました。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起き上つて、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現われたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現われて示そうとすることに、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。わたしは、この民と

異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあつて御国を受け継がせるためである。」こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行ないをするようにと宣べ伝えて来たのです。

（使徒26・12～20）

恵みと使徒の務めとは、1テサロニケ1章9節の言葉、すなわち「生けるまことの神に仕えるようになり」神に立ち返った、という言葉によって簡単に表現することができます。すでに得た恵み、あるいはすでに体験した恵みこそ、奉仕するための最大の装備です。絶えず奉仕するためには、絶えず恵みを受ける必要があります。パウロの使命は一体何だったのでしょうか。神を知らない人々が、パウロによって主イエスと出会う機会を与えられることでした。それだけでなく、信仰の従順、あるいは信頼の従順に至ることも、非常に大切なことです。「信仰の従順」とは、ひとりの人格、すなわち、イエスとしつかりと結びついていることを意味しています。もちろん、これは恵みによってなされるものですが、それと同時にキリスト者一人一人の意志の行為によっても決められるのです。

5節には、あらゆる国の人々の中に信仰の従順がもたらされることが書かれています。イエス

と出会って、救いを必要としない人は一人もいません。もちろん、あらゆる国の人をキリスト教化すること、教会の会員にすることが大切なのではなく、あらゆる国の人々のなかに信仰の従順があらわれることが大切なのです。

あなたも、すでに主イエスにとらえられ、明るみにだされ、主イエスのものとなられたでしょうか。

ローマには、すでに神の光と愛によって救われた人たちがいました。彼らはキリストによって召された人々の群れに属する者でした。すなわち、彼らは、ローマにおける召された証し人、そしてイエスの使節だったのです。パウロとローマにいるキリスト者達は、召された者だったのです。彼らは、自分の職業のほかにはひとつの使命を持っていました。彼らにとってこの使命こそ、生活の全てだったのです。キリスト者はだれでも同じ使命を持っています。私たちも、この使命をしっかりと持っているでしょうか。またあなたはこの使命に従順であり、そのためにすべてを捧げているでしょうか。いろいろな場にあつて、あなたの周囲にいる人々は、あなたが「イエスの使節」であると分かるでしょうか。そのためには、一分一秒といえどもおろそかにせず、主に忠実でなければなりません。

従順な子どもとなり、以前あなたがたが無知であったときのさまざまな欲望に従わず、あなたがたを召してくださった聖なる方にならつて、あなたがた自身も、あらゆる行ないにおいて聖なる者とされなさい。

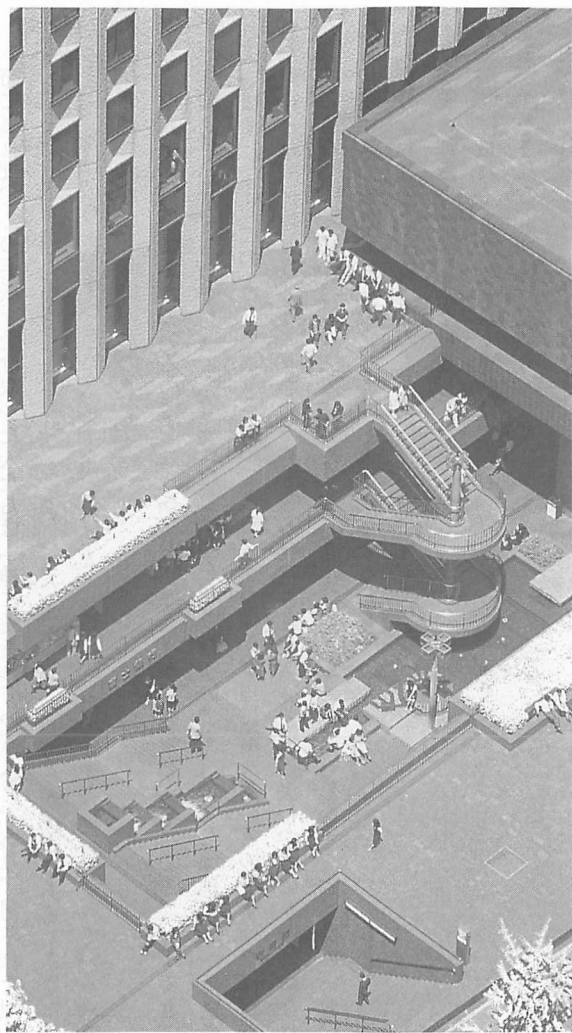
(Ⅰペテロ 1・14、15)

7 節によれば、この手紙を受け取った人たちは「神に愛されている人々であり、召された聖徒たち」でした。主イエスにあつて愛され、きよめられた人々でした。彼らが「主にある」人々だったゆえに、神は彼らを愛すべき人々、きよめられた人々と見られたのです。神に愛されている人々が滅びの都であるローマにいたのです。

どんな人々が神に愛されているのでしょうか。どんな人々が神の愛を本当に知ることができ、また体験的に知りえるのでしょうか。「私たちは罪を赦されています。私たちは神によって愛されています。」……このように言うことのできる人々だけが本当に富んでいるのです。では召された聖徒とは、一体どういう人々なのでしょう。召された聖徒とは、決してなにかかけはなれた人々でもなく、なにか特別な人々でもなく、日常生活のなかでいろいろな考えや行ないにおいて常に主イエスを自分のものとしている人です。すなわち、

- ・ 主が行なわれるように、ものごとを行ない、
- ・ 主が愛されるように、人々を愛し、
- ・ 主が助けられるように、人々を助け、
- ・ 主が沈黙されるように、沈黙し、
- ・ 主が語られるように、語る者です。

さらに、パウロは恵みと平安について書き記しています。恵みと平安とは、新しい生活の特徴です。あなたも主イエスの恵みと平安とを、すでに体験なさいましたでしょうか。恵みと平安と



が、あなたから出ているでしょうか。私たちが日々主の恵みと平安に対して心を開き、それらを豊かに受け取るならば、私たちはそれらを他の人々にも与えることができるのです。

2 導入部 (2)

ローマ人への手紙

1 章8節から17節まで

I ローマ人への手紙の著者パウロについて

1 主イエスのしもべ（主と信者の関係）

a 感謝すること

b 仕えていること

c 祈っていること

2 福音を宣べ伝える使徒

（信者と信者の関係）

II ローマにある主イエスの体である教会

III ローマ人への手紙の中で一番大切な点

1 福音とは何か

2 福音はいかに働くか

ことばは人となつて、私たちの間に住まわれた。
私たちはこの栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子
としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。（ヨハネ1:14）



今日は、引き続いてローマ人への手紙1章8-17節を、一緒に読んでみたいと思います。

まず第一に、あなたがたすべてのために、私はイエス・キリストによって私の神に感謝します。それは、あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。私が御子の福音を宣べ伝えつつ霊をもって仕えている神があかししてくださることですが、私はあなたがたのことを思わぬ時はなく、いつも祈りのたびごとに、神のみこころによって、何とかして、今度はついに道が開かれて、あなたがたのところに往けるようにと願っています。¹¹私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて、あなたがたを強くしたいからです。¹²というよりも、あなたがたの間において、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。

¹³兄弟たち。ぜひ知っておいていただきたい。私はあなたがたの中でも、ほかの国の人々の中で得たのと同じように、いくらかの実を得ようと思つて何度もあなたがたのところに往こうとしたのですが、今なお妨げられているのです。¹⁴私は、ギリシヤ人にも未開人にも、知識のある人にも知識のない人にも、返さなければならぬ負債を負っています。

¹⁵ですから、私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです。

¹⁶私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。¹⁷なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる。」と書いてあるとおりです。

(ローマ1・8-17)

この箇所は、次の三つに分けて考えることができます。

I ローマ人への手紙の作者であるパウロについてよりよく知ること。

II ローマにある教会のことについてよりよく知ること。

III ローマ人への手紙のなかで一番大切な点と思われることについて。

I 著者パウロについて

まず著者について考えてみると、パウロは「イエス・キリストのしもべ」であり「福音を宣べ伝えるための使徒」であることがわかります。

「イエス・キリストのしもべ」としては、次の三つのことがらがある特徴となるとパウロ自身言っています。すなわち、

1 感謝すること

2 仕えていること

3 祈っていること

です。そこでまずこの三つのことがらについて、少しばかり考えてみることにしましょう。

1 感謝すること

8節を見ると、パウロが神に「感謝」せざるを得ないと強く言っていることがわかります。なぜパウロは、豊かに祝福された人生を送ることができたのでしょうか。彼は神に感謝したからで

す。詩篇には、次のようにあります。

感謝のいけにえをささげる人は、わたしをあがめよう。その道を正しくする人に、わたしは神の救いを見せよう。

(詩篇 50・23)

「感謝」ということは、決してその人の恣意ではなく神の御心なのです。パウロは、神の大いなる力がローマにある教会のなかに強く働いていたことを心から喜びました。「それは、あなたがたの信仰が、全世界に言い伝えられているからです。」もちろん信仰だけでなく、信仰の現れがいたるところに見られたからです。

主のことばが、あなたがたのところから出てマケドニアとアカヤに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰はあらゆる所に伝わっているので、私たちは何も言わなくてよいほどです。

(1テサロニケ 1・8)

信仰の実とは、全く新しい歩み、従順な行ない、忠実な歩み、日常生活における実際的な愛の奉仕などです。キリスト者にとって大切なことは、信仰と信頼であり、後のことは、そこから自然に出てくるものです。罪の都ローマにおいて、キリスト者の群れは非常に大きな影響をおよぼしました。あなたも毎日あなたの務めている職場で、このような影響をおよぼしているでしょうか。また、主イエスへの自分を無にした奉仕というものが、あなたの生活の中にも、現われているでしょうか。

我がたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。

(詩篇 103・1)

イエスのしもべであるパウロは、感謝をした人間でした。あなたの生活の特徴は何でしょうか。

2 仕えていること

次に9節でパウロは「自分が御子の福音を宣べ伝えつつ、仕えている」と言っています。パウロは、主に仕えることが許されているということこそ最高の恵みであると言っています。

私にとっては、生きることがキリスト……です。

(ピリピ 1・21)

すなわちパウロにとって、生きることが主イエスに仕えることにはかならなかったのです。しかも主に仕えるということは、パウロにとってかたくるしい形式や義務ではなく、どうしてもそうせざるをえないというやむにやまれぬ思いから喜んでしていたことだったのです。

3 祈っていること

イエス・キリストのしもべパウロは、感謝し、そして仕えている人でしたが、第三に、また祈りの人でもあった、と聖書は言っています。「私はあなたがたのことを思わぬときはなく、いつも祈っている」と9節にあります。

私たちが使徒パウロの手紙を読むときに、主の御霊が本当に豊かに注がれていたことがわかりますが、その秘訣は、まさに祈ることにあつたのです。主イエスの愛が強くせまったために、使

徒パウロは祈らざるをえなかったのです。キリスト者の靈的な成長こそ、パウロの切に願ひ求めたものでした。パウロは決して自分のことだけを思うことなく、その心はいつも他のキリスト者のために熱く燃えていたのです。私たちも、ほかのキリスト者を深く愛するならば、それが毎日の深い祈りとなつてあらわれてくるはずで、パウロはまだ知らない人のためにも、絶えず祈り続けました。しかし、私たちの場合はどうか。知っているキリスト者のためにすら祈らないことがあるのではないだろうか。

パウロの奉仕は福音を広く宣べ伝えることでした。しかし、その中心をなしているものは、まさに祈り以外の何ものでもなかったのです。奉仕の中心は常に祈りです。私は最近ダービーという人の文章を読んで、非常に大きな感銘を受けました。それには次のように書かれています。

「神の御霊との結びつきなしに御言葉を語り、御言葉とかかわりあいを持つことほど危険なこととはありません。神との交わりなしに聖書の真理について語ることほど神からはなれることとはないと思います。まさにそこにこそ、もつとも恐ろしい危険が潜んでいるのです」。

そこで私たちもこのことを静かに考えてみようではありませんか。私たちは本当に主との交わりを持っているでしょうか。本当に御霊によつて導かれているでしょうか。確かに私たちは神との交わりなしに御言葉を語ったり、御言葉とかかわりあいを持つことができましょう。しかしそれは、つきつめれば悪魔に仕えることになるということを知らなければなりません。イエスのしもべであるパウロは、感謝の人であり、奉仕の人であり、祈りの人でありました。彼はキリスト者と親しく交わるためにローマへ行きたいと思ひました。しかしその場合にも、彼は自分の思ひ

や考えでそうしようとしたのではなく、御霊によってそのように導びかれたに違いありません。パウロは多くの願いを持っていました、その中心は自分の思いではなく、主の御心が行なわれ御名があがめられることでした。

いままで私たちは、イエスのしもべとしてのパウロについて一緒に考えてきました。パウロはしもべとして、徹頭徹尾、完全に主に拠り頼んでいたことがわかります。パウロは、主からあたえられた使命を果たし、主の御心を行いました。これこそまさに主とキリスト者との正しい関係にほかなりません。私たちの場合、主との関係は一体どうでしょうか。

次に、福音を宣べ伝える使徒としてのパウロについて、聖書から学んでみましょう。主から遣わされた使徒として、パウロは主からあたえられた使命を責任を持って担うものでした。つまりパウロは、ローマにいるキリスト者たちのためにもつねに責任をもち続けていました。これは、キリスト者がほかのキリスト者との間にも正しい関係がいかなるものかを示しています。特に9-15節までの間に、この責任のことについて書き記されています。

9 節 私は、「あなたがた」のことを思わぬときはなく、

10 節 いつも祈りのたびごとに、「あなたがた」のところに往くようにと願っています。

11 節 私は、「あなたがた」に会いたいと切に望むのは、「あなたがた」を強くしたいからです。

12 節 「あなたがた」の間にいて、ともに励ましを受けたいのです。

13 節 私は、「あなたがた」のところに往こうとしたのですが、

14 節 私は(全ての人々すなわち)「あなたがた」にも返さなければならぬ負債を負っています。

15節 「あなたがた」にも、ぜひ福音を伝えたいのです。

この御言葉からわかることは、パウロが全く知らない集会をも愛し、そのために真剣に祈ったということです。パウロは祈りによつて教会を建て、御言葉によつて強くしたいと願っていました。しかし、ローマにたどりつくまでには、囚われの身となつて送られるまで実に三年半の歳月を要したのです。パウロはローマに行こうとしてそれを妨げられたわけですが、その妨げたものが何であつたかはよくわかりません。たとえばテサロニケ人への手紙第一にある通り、悪魔がその妨げとなつたのかもしれませんが。

それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。このパウロは一度ならず二度までも心を決めたのです。しかし、サタンが私たちを妨げました。

(Ⅰテサロニケ2・18)

また、神の御霊もその道を止めることがあるのです。

それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によつて禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通つた。こうしてムシヤに面した所に來たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかつた。それでムシヤを通つて、トロアスに下つた。ある夜、パウロは幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が彼の前に立つて、「マケドニヤに渡つて来て、私たちを助けてください。」と懇願するのであつた。パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニヤへ出かけることにした。神が私たちを

招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したからである。

(使徒 16・6-10)

私たちが、全てを御霊の導きにゆだねる備えができており、切にそう望むならば、御霊の導きが非常にはつきりとわかるものです。

パウロは、主イエスと同じように刈り入れのときが熟すこと、すなわち失われた魂が心から主に立ち返ることを、常に心にとめていたのです。私たちは、私たちの周囲にいる人々、つまり、家族、友人、知人に対して本当に重荷を感じているでしょうか。

パウロは福音を宣べ伝える時に、ただ一つの救いの道以外には「滅びからのちに至る道」はないということを強く説きました。つまりそれは、主イエスを信じる信仰が本当に生き生きとした真剣なものである、ということです。ローマの役人であれ、牢屋の獄吏であれ、誉れ高きパリサイ人であれ、貧しい奴隷であれ、だれであっても、その人のために救いの道はただ一つ、すなわち、主イエスを信じる、ということ以外にないのです。今日、私たちはこの意味で当時と同じ状態にあります。有名な学者は貧しい靴磨きと同じように、老人は若者と同じように、男は女と同じように、形だけのクリスチャンは未信者と同じように、だれであろうが罪の赦しを必要としていることには変わりはないのです。

Ⅱ ローマにあるイエス・キリストのからだなる教会

まことの教会に属する者は、だれでも聖霊によって新しく生まれかわった者です。聖霊の働き

により、また共同生活を通して、あるいは同じ使命によって彼らは一つに結ばれていました。6
ゝ7節から明らかなのは、彼らが主イエスによって召された人々であり、神に愛されている人々
であり、召された聖徒たちであったということです。これらの人々は主の招きを正しく理解し、
それに従順に従い、信仰の従順に至った人々でした。この生活体験の結果は8節ゝ12節にはつき
りと記されています。8節には、いたるところで彼らの信仰が、全世界に言い伝えられていると
いうこと、そして12節には、パウロ自身彼らとの主にある交わりによって、ともに励ましを受け
たいと思ったことが書かれています。彼らはかつては失われた罪人であり、神の怒りのもとにい
た者であり、神から遠くはなれて全く望みのなかった者でした。ところがいまや、彼らは主イエ
スによって召され、神に愛され、神によって義とされた者となっているのです。そしてパウロは、
ここにこそ一つのしっかりとしたゆるぎない教会を建てたいと願ったのです。それは次の御言葉
によっても明らかです。

11節 「あなたがた」を強くしたい。

13節 いくらかの「実を得よう」と思った。

15節 ローマにいるあなたがたにも「ぜひ福音を伝えたい」のです。

福音を宣べ伝えるということは、とりもなおさず主イエスに栄光を帰するということです。

Ⅲ ローマ人の手紙のなかで一番大切な点

最後にローマ人への手紙のなかで一番大切なことを16ゝ17節から学ぶわけですが、その前に、

今まで学んできたことを簡単にまとめてみたいと思います。

まず1〜7節までから、手紙のテーマについて序論的に記されていることを学びました。つまりこれが神の福音、喜びのおとずれであるということです。そして福音とは、ひとりの人格すなわちイエス・キリストにほかなりません。

・イエスを見る者は、福音を見るのです。また、

・イエスを持つ者は、福音を持つのです。そして、

・イエスを宣べ伝える者は、福音を宣べ伝えるのです。

そのほかの福音は絶対にありえません。

パウロは、主イエスというお方がいかなる方であられたかを、はっきりと言っています。すなわち2節を見ると、イエスが「約束された方」であると記されていますが、このことを旧約聖書全体がはっきりと言っているわけです。次に、3節を見ると、約束された方が「生まれた」と記されていますが、このことは四福音書が明らかにしています。第三に4節を見ると、このイエスが御子として「示された方」であると記されていますが、このことは使徒の働きや多くの手紙と黙示録が明らかにしています。すなわち「イエス・キリストこそ聖書全体の中心」なのです。

次いで8〜15節までには、ローマ人への手紙の作者について主に記されています。ローマ人への手紙は、最も完全な聖書の教えです。もちろんこれはキリスト者のための教えです。キリスト者になるためには、決して多くの御言葉は必要ではありません。ただ幼児のような信仰がありさえすればそれで十分なのです。祝福のうちに入るためには、たったひとことの御言葉でも十分で

すが、祝福のうちに生きるためには、聖書全体が必要です。パウロは、ただ単に教会の土台を据えるために福音を宣べ伝えただけではなく、さらにその土台の上に教会を建てるため、すなわちキリスト者が成長するために福音をさらに深く教えたのです。

そこでパウロは、一年半ここに腰を据えて、彼らの間で神の言葉を教え続けた。

(使徒 18・11)

私が、三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けてきたことを、思い出してください。

(使徒 20・31)

こうしてパウロは、満二年の間……神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

(使徒 28・30、31)

これらの御言葉からわかることは、パウロがコリントにおいて、エペソにおいて、またローマにおいて神の御言葉を教えたということ、つまり教会を建てることに一生懸命であったということです。私たちは、ただ単にキリスト者になることで満足したり十分だと思ったりするのではなく、さらに霊的に成長することを要求されているのです。

さて、最後にローマ人への手紙の中で、一番大切な点について学んでみましょう。まず、次の

二つの問いについて考えてみたいと思います。

1 福音とは何か

2 福音はいかに働くか

1 福音とは何か

ローマと福音とは、性質の合わないものでした。ローマは当時国家権力、文化、富、教養の最高の都でした。福音は、十字架につけられた方の完全な勝利にほかなりません。ローマには何らの救いも福音ありませんでした。しかしパウロは、ローマに行こうとしたのです。「私は福音を恥と思いません。」とパウロは言ったのです。パウロはこの福音の中にどれほどの富と力が宿されているかをよく知っていました。私たちの場合はどうでしょうか。福音を恥と思うようなことがないでしょうか。それともパウロと同じように、福音を恥と知らないでしょうか。

人は、たとい全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。このような姦淫と罪の時代にあつて、わたしとわたしのことを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。

(マルコ 8・36-38)

また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、

最後である。わたしは、渴く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。勝利を得る者は、これらのものを相続する。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。しかし、おくびよう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拜む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。」

(黙示 21・6―8)

これは大変厳しい言葉です。ローマが福音を必要としているために、パウロはローマへ行こうとしたのです。福音とはあらゆる喜び、知恵、救いと力を表わすものにほかなりません。

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあつてはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。

(ガラテヤ 6・14)

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。

(Iコリント 1・18)

十字架の御業、これこそが福音であり、主イエスが救いの御業を成就してくださった喜びのおとずれであり、滅びゆく罪人をあがなうための犠牲の死にほかなりません。パウロは「福音が救

いを得させる神の力である。」とはつきり言っています。福音は、教えであるよりはむしろ神の力の現われです。そして福音そのものであるイエスこそ、私たちを救うことができ、また解放することができる唯一のお方なのです。

今日、この世に多く見られるものは破壊する力ですが、イエスそのものである福音は、「築き上げる力」です。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ3・16）

福音の救う力は、すべての人のために提供されております。ですから、一人一人は感謝して、福音であるイエスを受け入れさえすればよいのです。

信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。
(ヨハネ5・24)

信ずる者は、すなわちそれを切に望む者は、福音を体験するのです。

2 福音はいかに働くか

次に、福音はいかに働くか、すなわち福音が何をもたらすかについて考えてみましょう。

福音はまず第一に、神の前に有効である義、すなわち神御自身の義を現わしています。ローマ人への手紙の中には、義という言葉が何回も何回も出てきます。たとえば3章5、21、22、25、

26節、10章3節などです。神の義は、主イエスにおいて現わされました。私たちが主イエスを見るとき、ほかならぬ神の義を見ているわけです。聖書を通してすべての人に神の義が提供されているのです。神の義がイエスにおいて現わされただけであつたならば、それは大変恐しいことだつたでしょう。というのは、それによつて私たちの罪にけがれた本当の姿が明らかにされるだけだからです。しかし実際は、それを私たちが受け入れることができるように、神の賜物としてイエスにある神の義が提供されているのです。17節に「神の義は、信仰にはじまり、信仰に進ませる。」とある通りです。

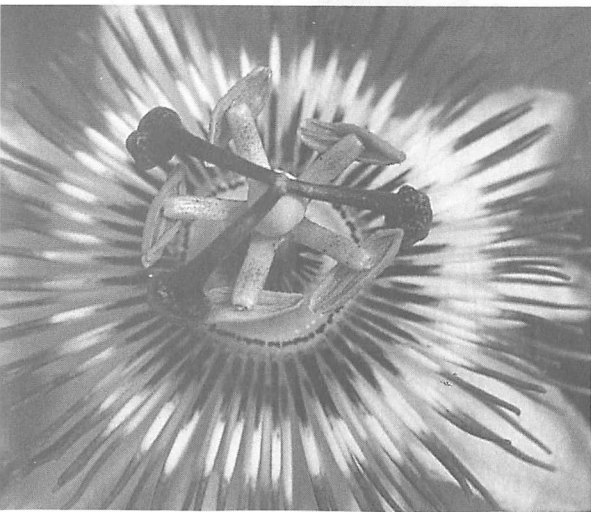
私たちは、イエスを信じることによつて神の義を得ることができます。信仰とは完全にイエス・キリストに信頼し、イエス・キリストを受け入れることです。イエス・キリストを意識的に受け入れることは信仰の始まりです。そのことによつて、私たちは神との新しい関係を持つことができるようになります。今まで知らなかった他人としての神が、信仰によつて「アバ、父よ。」と言ふことのできるお方になるのです。

しかし信仰が始まれば、そのあとで進むことが要求されるのは当然です。「信仰に進ませる」という御言葉は、その意味で使われています。聖書は、キリスト者の成長の段階をあらわすために、乳飲み児、幼子、若者、完全な大人という表現を用いています。

イエスは神の義であり、このことを私たちは日々新たに信仰によつて体験すべきです。ただし義とは、私たち人間の義ではなく、あくまでも神の義である以上、私たちは常に神の義である主イエスにより頼まなければならないのです。「信仰によつて生きる」とは、自分のことを少しも

考えず全く無になって、ただ、主のことを思い、主のために瞬間瞬間を生きるということを意味しているのです。

ですから、私(パウロ)としては、ローマにいるあなたたちにも、ぜひ福音を伝えたいのです。私は福音を恥とは思いません。(ローマ1:15、16)



3 異邦人の罪に対する神の怒り

ローマ人への手紙

1章18節から32節まで

- I 神は異邦人に何を与えるか
御自身の啓示Ⅱ永遠の福音
- II 神の啓示に対して異邦人は
いかに応えたか
 - 1 神に感謝せず
 - 2 神を偶像に取り替えた
 - 3 真理を偽りにかえた
- III 神を拒み続けた結果は何か
引き渡されたこと



不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたち似た物と代えてしまいました。(ローマ1:23)

今日は、ローマ人への手紙1章の18節から終りまでを学んでみることにしましょう。

1章18節から3章20節までのテーマは、「全人類の救いの必要性」とすることができると思います。異邦人だけではなく、ユダヤ人にも救いは必要です。神の義なる、聖なる怒りは、墮落した人類を焼き尽さずにはおきません。ローマ人への手紙のこの部分の特徴づける言葉は「義のない」、「罪だらけの」、「イエス、すなわち救い主がいない」、「人間自身の行ない」です。

今日学ぶ箇所である、1章18節〜32節は、「異邦人の罪に対する神の怒り」と題することができず。

¹⁸ というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。¹⁹ なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。

²⁰ 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によつて知られ、はつきりと認められるのであつて、彼らに弁解の余地はないのです。²¹ というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえつてその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなつたからです。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたち似た物と代えてしまいました。²⁴ それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。

それは、彼らが神の真理を偽りと取り代え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。

こう²⁶いうわけで、神は彼らを恥²⁷ずべき情欲に引き渡されました。すなわち、女は自然の用を不自然なものに代え、同じように、男も、女の自然の用を捨てて男どうしで情欲に燃え、男が男と恥²⁸ずべきことを行なうようになり、こうしてその誤りに対する当然の報い²⁹を自分の身に受けているのです。

また、彼らが神を知ろうとしがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。彼らは、あらゆる不義と悪とむさばりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、³⁰そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、³¹わきまえない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。

彼らは、³²そのようなことを行なえば、死罪に当たるといふ神の定めを知っていながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。

(ローマ 1・18-32)

18節以下には、神の怒りが啓示されている、と記されていますが、この内容が前に学んだ16-17節の、神の義が啓示されている、という御言葉と著しい対照をなしていることがわかります。

そこで、この18～32節までを、大きく三つに分けて考えてみましょう。

I 18～20節 神は異邦人に何をあたえたか。

II 21～25節 神の啓示に対して、異邦人はいかに応えたか。

III 26～32節 神を拒み続けた結果がいかなるものであったか。

I 神は異邦人に何をあたえたか

ひとことと言えば、神が異邦人に自らを啓示された、ということです。神が御自身を啓示されたということのゆえに、異邦人は神がいかなるお方であるかを知ることができるのです。つまり、被造物によって、神の永遠の力と神聖がはっきりと認められるのです。本来にまじめな人は、神の存在を認めざるをえないのです。神は、私たち人間の目には見えませんが、神の永遠の力と神聖は、「神の御業」によって見ることでできるのです。だれでも神が存在しているということは知っています。18節には、神の怒りという言葉がでています。神の怒りは、決して感情や情熱によって動かされるものではありません。人間が神の恵みという賜物を無視するときに、神も罪人を退けざるを得なくなります。これがとりもなおさず、神の怒りです。ですから、神は何度も繰り返しして「恵みの賜物を受け入れなさい、さもなければ神の裁きがくだる」と警告しておられるのです。

人間は、だれでも罪に対しては、神の怒りが下るということを知っています。ところがいまは

恵みの時であるゆえに、神の怒りは保留されています。神は罪を憎みますが、罪人は愛しておられます。救いは十字架で成就されました。この救いは、悔い改めて神に立ち返り、イエスを信ぜよ、という強い勧告とともに提供されているのです。

神のない状態こそ罪です。いのちの泉から離れていることが罪なのです。神から離れていること、つまり神のない状態は、不幸であり、また、裁きでもあるのです。この神のない状態から不法と不義が生じ、それらが真理をはばんでしまうのです。人間は、まず神との関係を第一に望もうとせず、自分勝手な道を歩もうとし、神の要求を無視して自分自身を神としてしまっているのです。

真理を知るということは非常に重大なことです。この真理を知るとは、同時に義務を課せられるものであるということを知らなければなりません。

そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。

(Ⅱテサロニケ1・8、9)

19節は、なぜ神の怒りの裁きがくだるのかについて説明しています。「神について知りうることは、神が明らかにされました」とあります。アダムやノアの時代には正しく保たれていた神の認識が、その後すぐに、罪によって失われてしまったのです。

では、いかにして神が啓示されたか、ということですが、それについては、20節が説明してい

ます。「神の永遠の力と神性は、被造物によって知られ、はつきりと認められるのであって……」とありますが、たとえば山の世界、星の世界、動物の世界、植物の世界などによって、神の創造と広大無辺な無限の力を知ることができるのです。このことは、いかなる人も否定しえない事実です。

ですから、まだイエスのことを知らない異邦人にも「弁解の余地はない」のです。だれでも、人間は創造主なる神に感謝を捧げる義務をもっているのです。異邦人の無神論は、神の存在が被造物によってはっきりと認知されるゆえに誤っていて弁解の余地がない、と神は言っておられます。また異邦人の偶像崇拜は、同じように人間の良心が唯一の神の存在を認めているゆえに、弁解の余地がないと神は言っておられます。被造物の存在や人間の良心というものが、神の存在を認めないわけにはゆかないのです。

Ⅱ 神の啓示に対して異邦人はいかに応えたか

だれでも人間は、神の存在、あるいは神がいかなるお方であるか、ということを知ろうと思えば知ることができます。ところが異邦人は神の啓示に対して堅く心を閉ざし、感謝もしなければ賛美することもしないのです。これはまさに、神を否定する決心をしてしまったことを意味しています。「異邦人の思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです」と21節にあります。神に感謝をしない者は高慢になり、心がおごり高ぶることをどうすることもできません。神に

対して幼子のように素直な態度を示さないならば、その人の思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなってしまうのです。

22節を見ると「彼らが愚かな者となつてしまった」ことがわかります。もちろん、彼らといえども人間的には立派な人もおり、名譽ある地位についている場合もあるでしょうが、神に感謝し、神を賛美しなければ、神の目には愚かな者にすぎません。異邦人の理解力と想ひは、神に感謝せず、賛美しなかつたゆゑに墮落してしまつたのです。

神を知ることがなければ、自分自身を本当の意味で正しく知ることはできません。人間は、神を拒むことによつて自己を偽る者となつてしまうのです。神なき人間は、たとへ人間的な尺度で見れば賢く思われても、本当はあわれな愚か者以外のなにもでもありません。

自分を知恵のある者と思つてゐる人を見ただろう。彼よりも、愚かな者のほうが、まだ望みがある。

(箴言 26・12)

23節を見ると、無知な者の心が暗くなつたゆゑに、その理解力も暗くなつたことがわかります。このことは、とくに世の中の多くの宗教界がよく表しています。つまり彼らは、神の御栄えを人間や獣などの形に似せた偶像に置きかえてしまつてゐるのです。

彼らは、ホレブで子牛を造り、鑄物の像を拝んだ。こうして彼らは彼らの栄光を、草を食らう雄牛の像にとりかえた。彼らは自分たちの救ひ主である神を忘れた。エジプトで大いなることをなさつた方を。

(詩篇 106・19-21)

人間は、自分が拝んでいるものに似たものとなります。神を礼拝すれば高められ、神に似たものとされます。死んだ偶像を拝めばその人の心は死んだものとなってしまいます。動物を拝めばその人は動物のようになり下ってしまいます。金や銀を拝めばその人の心も金や銀のように冷く固いものになってしまいます。私たちの心は一体何に向けられ、いかなる方に向けられているのでしょうか。

永遠にして崇高な目に見えない神は、決して目に見えるものの形には表すことができません。

異邦人は、目に見えない神を目に見える物の形に表し、それによって神ではなく偶像に仕える結果になってしまいました。

それでは異邦人は、神の啓示に対して何をしたのでしょうか。

1 彼らは神に感謝せず、賛美もしませんでした。

2 彼らは生ける神を偶像に取り替えてしまいました。

3 彼らは神の真理を偽りと取り替えてしまいました。

「彼らは造り主のかわりに、造られたものを拝み、これに仕えました」。これこそ、いわゆる「宗教」といわれるものの本質なのです。すなわち「目に見えないものを、目に見えるものにかえ」、「真理を偽りと取り替え」、「造り主を、造られたものにかえてしまう」のです。ですから、これらはもはや「神の啓示」ではなく、「人間が感じ考えるもの」以外の何ものでもありません。異邦人は、神の真理を偽りとしてしまっています。あらゆる宗教は、造り主の代わりに造られた物

を拝み、これに仕えています。神は被造物を通して異邦人に御自身を現わされました。彼らはそのつもりであれば神に感謝することができ、神を知ることによって神を賛美することもできたにもかかわらず、それを拒んだのですから、彼らに弁解の余地はないのです。

神を真剣に求めないこと、神の前にひざまずかないことは罪です。

Ⅲ 神を拒み続けた結果はなにか

異邦人の罪に対する神の怒りは、彼らを悪に引き渡されたことによって現わされました。24ノ28節を見ると「神が彼らを悪に引き渡された」ことがわかります。神が、人間を勝手にさせ、なすがままにまかせるということは、まことに恐るべき罰です。

それでわたしは、彼らをかたくな心のままに任せ、自分たちのおもんばかりのままに歩かせた。

(詩篇81・12)

これは、決して人間の望む自由ではなく、天罰です。被造物(偶像)をあがめるということは、異邦人的な不道德の結果生じるものです。彼らは造り主を拝まず、人間の肉の快樂の奴隷になってしまったのです。神が人間を罪に引き渡すと、人間は罪に沈んでしまうのです。異邦人は、自分が非常に賢いように思いこんでしまい、その結果神を信じることができなくなってしまうのです。彼らは、神を知りたいとは思いませんでした。彼らの無知な心は、このようにして暗くなっ

てしまったのです。

ここで引用されている罪は、神の罰にほかなりません。彼らが神をかたくなに拒み続けたため、神は彼らを罪に引き渡されたのです。

人間が、自分勝手なことをすれば、神もそれにまかせ、人間が心をかたくなにすれば、神もかたくなにならざるをえないのです。

神を捨ててゐる者は彼自身捨てられた者であり、神を拒む者は彼自身拒まれた者なのです。神から誉れを取り去る者は彼自身誉れを取り去られるのです。神に栄光を帰さない者は、動物よりも低くなり下ってしまうのです。(26―27節) 偶像崇拜は常に肉の行ない、肉の思いから出てくるものです。神と真理を拒む者は悪におもむきます。神に栄光を帰さない人たちは義と不義を見分ける力を失ってしまっているのです。(28―31節)

内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。
(マルコ7・21―23)

これこそ、人間の心と生活に対する神の判決です。これらのいくつかの罪を犯さなかった者であっても、それはただそのように守られたにすぎないのであって、人間はだれでもその内に罪の芽を宿しているのであり、罪の性質をもった罪人なのであって、それが表に出てくるか出てこないかの違いにすぎないのです。

誰でも、最初から大酒飲み、人殺し、あるいは姦淫を犯す者になろうと考えた人はいないはずです。しかし真剣に神を求めず、神を拒み続ける人は悪に引き渡され、その思いは低いものになり下ってしまうのです。

28～31節までには、いろいろな罪が記されています。ここではそのうちのいくつかを取り出して考えてみることにしましょう。

「不義」とは、神の側から見て正しくないものすべてを意味しています。もちろん神の戒めに對して不従順であることも不義であります。

「むさぼり」は、悪意や悪だくみと同じ種類のものです。むさぼりとは偶像崇拜にほかなりません。むさぼりを求める者は最後には結局なにも残らずにすべてを取られてしまうあわれな存在なのです。

「ねたみ」は、喰いつくす悪です。ねたみは人を不幸にし、喜びを奪い取るものです。ねたみは神に奉仕する力を駄目にしてしまいます。

「悪事をたくらむ者」は、始めから終りまで自分のことだけを考え自分の思いを通そうとする者です。今日、悪事をたくらむ者はなんと多いことでしょうか。

私は教会に対して少しばかり書き送ったのですが、彼らの中で頭になりたがっているデオテレペスが、私たちの言うことを聞きいれません。それで、私が行ったら、彼のしている行為を取りあげるつもりです。彼は意地悪い言葉で私たちをのしり、それでもあきたらずに、自分が兄弟たちを受け入れないばかりか、受け入れたいと思う人々の邪魔をし、

教会から追い出しているのです。

(Ⅲヨハネ9-10)

デオテレペスは支配欲に満ちた人だったため、使徒ヨハネの訓戒をも受け入れず、主も祝福することができなくなってしまうたのです。「高ぶる心」は、いかなる人間にも奥深いところに根ざしている、恐るべきものです。人間のあらゆる性質のなかで最後まで残るのは、この高ぶる心です。しかし高ぶる者は神が最も憎まれる者です。

「大言壮語する者」も、30節にあげられています。人間は高くうぬぼれて、自分を人より大きく見せたがるものです。そのような人は真理の意味を理解できなくなってしまうっており、自身をすら正しく評価することができなくなってしまうのです。

「わきまえのない者」の特徴は、神を恐れないことです。「神を恐れることは、知識のはじめである」。まことに神を恐れる者には、知恵と分別がありますが、主を恐れない者は無知な者になってしまうのです。無知は神に対する罪と債務から出てくるものです。賢くなりたいと切に望む者は、実際、賢くなることができます。

32節によると、人は神の定めを知っています。しかしそれにもかかわらず、人間は意識的に罪を犯してしまうために、動物よりも低い者になり下ってしまうのです。すなわち彼らはいつの間にか悪魔の道具になってしまい、ほかの人をも惑わすようになってしまうのです。

ですから、私たちの内側から出てくるものが、ほかの人々に対していかなる影響をおよぼすか、ということは非常に大切な問題です。

ここでもう一度、ここの箇所の主題についてふりかえてみましょう。

神は、異邦人に対して何を啓示されたか。造り主なる神は被造物を通して御自身を啓示なさいました。これこそすべての人に被造物を通して伝えられた「永遠の福音」です。多くの人はこの永遠の福音によって、神を礼拝するように導かれました。人は被造物によって神を知ることができる、と聖書は言っています。ヨブは被造物によって神を知るにいたった人間であり、それによって神を礼拝するものとなったのです。ヨブは神を恐れたゆえに、神はさらに多くのことを啓示することができたのです。

また私は、もうひとりの御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は、地上に住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。彼は大声で言った。「神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」

(黙示録 14・6、7)

永遠の福音とは、造り主なる神の福音です。この福音は、神が造られた被造物によって宣べ伝えられています。人間はだれでもこの福音を知ることができます。この永遠の福音は「一体イエスを知らなかった者はどうなるのか」という質問に対して答えています。この福音を聞いていない人はいないはずであり、したがってだれでもこの福音によって救われる機会があったわけです。その意味で、以前にイエス・キリストを知らなかった人であっても、被造物によって神の神聖を

認め、感謝して本当に神を恐れた人は救われるわけです。しかし注意すべきことは、その人が自分の気持ちから神に感謝した結果、救われるのではなく、彼の知らないところでイエス・キリストの十字架による救いが成就するゆえに救われるのです。つまり救いは決して人間の側から生じるのではなく、神の側から行われるのであり、その土台はイエス・キリストの十字架にほかならないのです。神は、御自身を啓示なさいましたが、異邦人は、神に感謝もせず、ほめたたえることもせず、賛美もしなかったため、神の怒りが彼らの上にある、とローマ人の手紙1章は言っております。

御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。
(ヨハネ 3・36)

私たちは、永遠のいのちをもっているか、神の怒りのもとにあるか、のどちらかです。

こういうわけで、いまはキリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。
(ローマ 8・1)

この確信をもっている者は、幸いです。

4 ユダヤ人の罪に対する神の怒り

ローマ人への手紙

2章1節から16節まで

- I さばくユダヤ人
- II 神の公平なさばき
- III 異邦人と律法



ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。(マタイ23:37-38)

写真はユダヤ民族の正統派の人々。エルサレムにて。

前回は、異邦人の罪に対する神の怒りという主題でローマ人への手紙から学びました。今回は引き続き、2章1～16節を学んでみたいと思います。この箇所 of 主題は「ユダヤ人の罪に対する神の怒り」です。

ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行なっているからです。私たちは、そのようなことを行なっている人々に下る神のさばきが正しいことを知っています。そのようなことをしている人々をさばきながら、自分で同じことをしている人よ。あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとも思っているのですか。それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。

神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。忍耐をもって善を行ない、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠のいのちを与え、党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。患難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、悪を行なうすべての者の上に下り、栄光と誉れと平和は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、善を行なうすべての者の上にあります。神にはえこひいきなどはないからです。

律法¹²なしに罪を犯した者はすべて、律法なしに滅び、律法の下にあって罪を犯した者はすべて、律法によってさばかれます。¹³それは、律法を聞く者が神の前に正しいのではなく、律法を行なう者が正しいと認められるからです。¹⁴——律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行ないをするばあいは、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。¹⁵彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。¹⁶——私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。

(ローマ2・1-16)

この16節までをさらに三つに分けて考えることができます。

I 1-5節 さばくユダヤ人

II 6-11節 神の公平なさばき

III 12-16節 異邦人と律法

今までに私たちは全人類に対する神の怒りについて学んできました。「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができない」と、3章23節には書かれています。

本来、神は御自身の御栄光のために人間をお造りになりました。ところがその人間が、神よりも悪魔に心をひかれるようになってから、罪人としての道を歩まざるをえなくなってしまったの

です。1章は、すべての人間、特に異邦人がいかにして「放蕩息子」の道を歩むようになったか、つまりいかにして異邦人の滅びの道を歩むようになったかを示しています。それに対して2章は、すべての人間、特にユダヤ人がいかにして「放蕩息子の兄」の道を歩むようになったか、つまりいかにして自分を義とするパリサイ的な道を歩むようになったかを示しています。

ユダヤ人は特別に神の恵みを受け、良いものを与えられたゆえに他の民族よりも優れているとうぬぼれてしまったのです。しかしこれに対して、パウロは厳しい言葉を放っています。すなわちユダヤ人といえども、根本的には異邦人と異なることはないという事実を認め、謙遜にならなければ、神の助けを受けることができないのです。パウロはこのことをこの箇所ですべて強調しています。そこで、先ほどの三つの点をさらによく学んでみましょう。

I さばくユダヤ人

1～5節までの内容は、「さばくユダヤ人」についてです。もちろんこれは私たち、人間ひとりひとりのことが対象にされているわけですが、特に人をさばきがちなユダヤ人が代表として取り上げられていると見るができます。1節と3節で、パウロはユダヤ人といえども根本的には異邦人と変わるところがない、と強調しています。「ユダヤ人よ。あなたも同じことを行っている」と記しています。

ですから、神の怒りとさばきが、異邦人に対してだけではなく、ユダヤ人に対しても向けられ

ているわけです。「神のさばき」という言葉は2節と5節で出てきます。多くのものを受けたということ、また多くのことを知ったということは、決して人をその責任から解放するものではなく、かえって反対に責任を重くするものであることを知らねばなりません。本来に新しく生まれかわっていないければ、うわべだけの敬虔や、頭だけの知識は何の役にもたたないのです。生まれつき持っている高慢な心や、人をさばく思いこそ、ユダヤ人が救いに至るための大きな妨げとなっているのです。概して人間というものは、他人を見た場合には、あの人はこういう点が悪い、このようにすべきであるということを手をすぐに考えるのですが、こと自分のことになると、全く盲目である場合が多いのです。

そもそも人間は、何が正しく何が正しくないか、ということを知っているはずなのですが、自分の犯した罪を偽ったり、罪を他人に転嫁したり、他の人をさばいたりしているのが実情です。それというのも、悪魔によって惑わされているからだと言っています。「私たちは、そのようなことを行なっている人々に下る神のさばきが正しいことを知っています。」と2節にあります。

大切なことは、表面的に表れてくる行ないよりは、むしろその行ないをするときの心の状態がいかなるものであるかということであり、このことを神は常に見ておられるのです。

もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。

神は、真実な心を要求しておられます。人々をさばくことによって、神のさばきを免かれることはできないと3節は言っています。

こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら、行なわないなら、それはその人の罪です。
(ヤコブ4・17)

あなたがたがよく見て知っているとおり、不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者——これが偶像礼拝者です。——こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。むなしいことばに、だまされてはいけません。こういう行ないのゆえに、神の怒りは不従順な子らに下るのです。ですから、かれらの仲間になつてはいけません。

(エペソ5・5―7)

肉の行ないは明白であつて、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。

(ガラテヤ5・19―21)

2章4節には、神の慈愛と、忍耐と、寛容が記してあります。ここで「慈愛」とは、上から与

えられた光、賜物、そして与えられたものすべてを意味しています。神の「忍耐」とは、私たちが神に対して犯し続けてきたそむきの罪を耐え忍ぶことです。神の「寛容」とは、延ばされている神の恵みのときを意味しています。問題はこのような神の慈愛と忍耐と寛容に対して、私たち人間がいかなる態度を取るかということです。すなわち、これらのものを無視するか、それとも本当に心から悔い改めるかのいずれかです。

神の御予定は、私たちが立ち返って新しく生まれかわるように私たちを悔い改めに導くことです。悔い改めとは、この点やあの点において見かたや考えかたあるいは行ないが変わることを意味するのではなく、心の思いが全く新しく変えられることを意味しているのです。この変えられた思いは、必然的に罪、この世、人間、神に対する態度の中に現れてきます。

・ 自分自身に対しては、自我を捨て、

・ 神に対しては、全く信頼しきって自からを捧げ、

・ 他人に対しては、謙遜な愛に満ちた、自分を無にした行ないこそ、悔い改めの現れです。

そして神は、イスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えるために、このイエスを君とし、
救い主として、御自分の右に上げられました。
(使徒 5・31)

人々はこれを聞いて沈黙し、「それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ。」と言って、神をほめたたえた。
(使徒 11・18)

悔い改めた者は、罪を認め、告白し、罪から離れ、神の救う力、贖いの恵みにあずかることができるのです。

5節によると、怠惰な、悔い改めたくない心、かたくなさは、神の御怒りを自分のために積み上げてしまうことになります。神の慈愛を拒んだ場合には、来たるべき神のさばきを正しく真剣に理解することができなくなります。また、かたくなさと受け入れられない状態、悔い改めたくない心が入りこんでしまいます。しかしこのような心は、愚かであり自分をあざむくことです。なぜならば、罰が下されさばきが近づいているからです。

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者は、あわれみを受ける。

(箴言 28・13)

Ⅱ 神の公平なさばき

これから学ぶ部分では、救いではなく「さばき」が問題となっていることに注意してください。神は決してえこひいきなどはなさらず、その人の業に應じてさばきをなさるのです。

こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。わたしに向って、「主よ、主よ。」と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。「主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって

悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。」しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。「わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。」

(マタイ7・20-23)

人の子は父の栄光を帯びて、御使いたちとともに、やがて来ようとしているのです。その時には、おのおのその行ないに應じて報いをします。

(マタイ16・27)

義なる神の前にあつては、ユダヤ人も異邦人も同じように責任を問われています。そして、ともに罪ある者と定められています。義とされるには二つの種類があります。第一に、義とされるのは、自分の人間的な行ないや努力によるのではなく、ただ信仰によって義とされるということです。ローマ人への手紙3章28節には「人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。」とあります。

第二に、さばきの時、その行ないに應じて義とされることです。さばきの時に、その人の信仰の行ないに應じて、新しいのちの実が結ばれているかどうか、ためされるのです。

なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあつてした行為に應じて報いを受けることになるからです。(Ⅱコリント5・10)

キリスト者であっても、このさばきの時に報いを受けられない可能性があります。パウロは、

ガラテヤ人への手紙の中で、信者たちが、「そんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。」と1章6節に書いています。また、エペソ5章6節には、「むなしいことばに、だまされてはいけません。」という御言葉がありますが、このことは、だまされる可能性が存在していることを示しています。

それと同じように、信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは死んだものです。人は、行ないによって、義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかるでしょう。

(ヤコブ2・17、24)

見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。

(黙示22・12)

7節によれば、義なる者は栄光と誉れと不滅のもの、永遠のいのちを与えられます。

「御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。

(Iヨハネ5・12～13)

この地上では、私たちはまだ完全には与えられてはいませんが、やがてかの日には、主の約束

なさったものをごとく頂くことが許されているのです。

「忍耐をもって求める」というのは、自分の力で行なう、ということとは正反對のことを意味しています。すなわち、それがとりもなおさず神の力のあらわれであり、この力によれば、すべての困難が克服されるのです。黙示録20章11～15節には、さばきの白い御座について書き記されています。そして、このローマ人への手紙2章ではさばきの原則がのべられているのです。

9節を見ると、患難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシヤ人など、悪を行なうすべての者の上に下ることが記されています。それに対して、10節では、栄光と誉れと平和は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人など、善を行なうすべての者の上にあります。

8節を見ると、真理に従うことを好まない者は、偽りと罪に従わなければなりません、とあります。しかし、罪に従うことは、死に至ることを知らなければなりません。神は、結んだ実に応じてとりあつかわれます。神は、外側の装いなどでたまされることは決してありません。

Ⅲ 異邦人と律法

ユダヤ人は律法を誇りますが、異邦人といえども律法を知らないわけではありません。問題は律法を聞くことではなく、それを行なうことなのです。ここで前に考えた問題、すなわち神は異邦人に何をお与えになったか、という質問をもう一度思い出してください。この箇所にはそれに対する二つの答えが提示されています。「心の中の律法」と「良心」です。だれでもよいこと

と悪いことの区別を知っています。これはすなわち、心に書かれている律法によるのです。この律法によれば、人はだれでも神に従い、罪を退けるべきであることを知っています。良心とは、いわばこの律法に従って私たちの行ないをはかる裁判官のようなものです。

このことを裁判にたとえてもう少しわかりやすく表現してみましょう。私たちの良心が裁判官であり、心に書かれている律法が法典です。あることを肯定するか否定するかと自問自答することとは、証人として互いに責めあったり、また弁明しあったりすることです。

ユダヤ人も、異邦人も、この律法に基いてさばかれるのです。なぜなら異邦人の場合には、「自分自身が、自分に対する律法」だからです。良心は律法を行なったかどうかを吟味します。

16節には、「神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。」と書かれています。

ですから、人はだれでも次の三つのことを知っているはずで

1 神がおられること

2 何が良いことで、何が悪いことであるかを知っていること

3 自分の行ないが正しいか正しくないかを知っていること

異邦人は善と悪についての認識を持ちながら、いったいどのような態度を取ったのでしょうか。彼らは悪を行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しています。彼らは他人をさばいています。彼らは神の慈愛と忍耐と寛容とを軽んじて安んじています。

要するに彼らは、何が善であり何が悪であるかということを十分知りながら、悪を行なってい

るのです。そして彼らは、神の啓示に対して拒否反応を示しているのです。そればかりでなく、心に記されている律法に対しても拒否反応を示し、好んで悪を行なっているのです。自然によっても、心に書かれている律法によっても、彼らは悔い改めに至ることを拒んでいるのです。

このような異邦人、絶えず罪を犯し続けている異邦人に対して、神はいったいどんな取り扱いをなさるのでしょうか。神は彼らを「引き渡された」のです。その結果、彼らは盲となり、闇のもとに生活するようになり、不道德な行ないに身をまかせるようになってしまったのです。そしてこのことは、とりもなおさず神のさばきを意味しているのです。異邦人は、もはや弁解の余地はありません。神の怒りのもとにいるのです。

神の啓示のゆえに、異邦人には決断する機会が与えられていたのですが、彼らの不道德と不従順のゆえに、言いひらきをすることが許されていないのです。生きている間に、決断をすることがどうしても必要なのです。絶えず神を拒み続けて心の律法に従わないならば、その者は失われなければなりません。

律法なしに罪を犯した者は滅び、律法の下にあって罪を犯した者も、律法によって滅びなければなりません。律法の知識でなく、律法の行ないこそ重要なのです。律法や良心によつては、常に心の葛藤が生じるのです。

自然を通しての神の啓示、あるいは心に書かれた律法によつて、人は光を得ることができるのです。そして、与えられた光を受け入れるか、それとも拒むかによつて、さばきが下されるのです。神は偏見のないお方であるゆえに、そしてまた公明正大なさばき主であるゆえに、外面的な

長所とか人間のもっている知識などにはよらず、神に対する態度、あるいは心の状態によって、人をさばかれるのです。

この12節においては、神が人間に対して告発をなさり、判決を下されるということが記されています。このような神の告発や判決に対して、私たち人間はどのような態度をとることができるでしょうか。罪ある者は、偉大なる裁判官の前にひれ伏し、罪を告白し、心から罪を悔い改めなければなりません。ところが2章を見ると、人間は罪を認め、悔い改めようとはせず、かえって一生懸命弁解しようとするのです。「私たちは、罪を犯しました。」というこの一言は、多くの言葉のなかで最も言いあらわすことの難しい言葉です。人間は、自分の罪を認めようとしません。

もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。(Iコリント11・31)

この節から私たちは、神のさばきがまことに義なるさばきであって、決して不法ではないことを知ります。神が義であられ、聖なるお方であられ、愛なるお方であるゆえに、神のさばきには不法ではないのです。このさばきはかならずやってくるものであり、だれもこのさばきからのがれることはできません。

私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。

(ローマ14・10)

来たるべきさばき、というまことに重大な真理も、福音の一部をなしているのです。自分の罪を告白する者は罪を赦されます。それに対して罪のなかにとどまる者は、その結果を自分の身に

受けなければなりません。

神の豊かな慈愛と忍耐と寛容とを、あなたは軽んじてはいませんか。

あなたは神の慈愛が、あなたを悔い改めに導くことを知っていましたか。

あなたは今日までこのことを知らなかったかもしれません。しかし、今日あなたは、主があなたを悔い改めに導くことを知ることができたのです。ですからもはや言い逃れの余地はありません。

やがて怒りの日がやってきます。そして義なる神のさばきが下されるのです。私たちは、そのさばきの時にさばかれずにすむためには、どのようにすればよいのでしょうか。

御子を信じる者はさばかれない。

(ヨハネ 3・18)

ここにひとつの実話があります。ある婦人が罪を犯したために裁判にかけられることになりました。そこで彼女の友人は弁護士を頼むようにすすめましたが、彼女はそれを真剣に考えようとはしませんでした。まだだいじょうぶ、まだだいじょうぶ。心のなかでそうつぶやいた婦人は、友達の忠告をないがしろにして日々を送っていました。そうするうちに裁判の日が刻々と近づいてきました。とうとう裁判の前日になって、この婦人ははじめて真剣になり、友達の紹介してくれた有名な弁護士のところにかけてつけました。「明日の裁判のために、どうか私を弁護してください。」彼女は必死になって弁護士に頼みました。しかし弁護士は、静かに首をふって答えました。「奥さん、もう遅すぎます。私はあなたと争った人の弁護士となってしまったのですから。」

この実話と全く同じように、神は私たちを取り扱っておられるのです。

神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

(ヨハネ 3・17)

主イエスはさばき主ではなく、救い主なのです。しかし聖書によれば、神は、御子イエスにすべてを与えられたので、さばく権威をもお与えになられたのです。ある時、イエスは世をさばく裁き主として、御自身を現わされるでしょう。今日、私たちが主イエスを自分の救い主として信じ、受け入れないならば、やがてイエスは救い主としてではなく、裁き主として我々の前に立たれ、そのさばきによって滅びなければならぬのです。

きょう、もし御声を聞かぬならば、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。

(ヘブル 4・7)

今は恵みの時、今は救いの日です。

(Ⅱコリント 6・2)

5 ユダヤ人に対する神の啓示

ローマ人への手紙

2章17節から29節まで

I 神はユダヤ人に何をお与えになったか

1 御心の認識

2 わきまえる能力

3 比類なき使命

II ユダヤ人は神の賜物で何をしたか

自分を義とするものは、

1 多くのものを知っている

2 自分の成すべきことを知っている

3 遣わされた使命を持っている

III ユダヤ人に対する神の判断はいかなるものか

1 外見上の体の割礼

2 御霊による心の割礼



私たちは今まで、異邦人が神の前に義とされてはいないゆえに、失われた者であるということを一緒に学んできました。神は異邦人に多くのものをお与えになりました。神は、異邦人にも御自身をわからせるために、被造物を通して御自身を現わされました。ですから、神を知りたいと思う者は、被造物を通して神を知ることができるわけです。それだけでなく、神は異邦人に、心に書かれている律法と良心とを裁判官としてお与えになりました。神を知ることができながら神を知りたいと思わない者は、それゆえに、責任があります。そして、弁解の余地がなく、失われた者となるのです。

これに対してユダヤ人の場合はどうでしょうか。そこで、今日は2章17節―29節までを学んでみることにしましょう。その主題は、「ユダヤ人に対する神の啓示」です。

¹⁷もし、あなたが自分をユダヤ人となえ、律法を持つことに安んじ、神を誇り、みこころを知り、なすべきことが何であるかを律法に教えられてわきまえ、¹⁹また知識と真理の具体的な形として律法を持っているため、盲人の案内人、やみの中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師だと自任しているのなら、²¹どうして、人を教えながら、自分自身を教えないのですか。盗むなど説きながら、自分は盗むのですか。姦淫するなど言いながら、自分は姦淫するのですか。偶像を忌みきらいながら、自分は神殿の物をかすめるのですか。²³律法を誇りとしているあなたが、²⁴どうして律法に違反して、神を侮るのですか。これは、「神の名は、あなたがたのゆえに、異邦人の中でけがされている。」と書いてあるとおりです。

もし律法を守るなら、割礼には価値があります。しかし、もしあなたが律法にそむいて²⁵いるなら、あなたの割礼は、無割礼になったのです。もし割礼を受けていない人が律法の規定を守るなら、割礼を受けていなくても、割礼を受けている者とみなされないでしょう。また、からだに割礼を受けていないで律法を守る者が、律法の文字と割礼がありながら律法にそむいているあなたを、さばくことにならないでしょうか。外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、外見上からの割礼が割礼なのではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです。

(ローマ2・17-29)

まず、次のような三つの質問を考えてみることにしましょう。

I 17-20節 神はユダヤ人に何をお与えになったか

II 21-24節 ユダヤ人は、神の賜物で何をしたか

III 25-29節 ユダヤ人に対する神の判断はどうか

I 神はユダヤ人に何をお与えになったか

異邦人が神の御業を知っているのに対して、ユダヤ人は神の御心を知っています。聖書、すなわち旧約聖書と新約聖書は、ユダヤ人に与えられました。ですからユダヤ人は、神の御心を知っ

ているのです。彼らユダヤ人には、神のいろいろな言葉が、すなわち聖書が与えられているゆえに、これこそまさにはかり知れない彼らの財産なのです。（3章2節参照）

ここでさらに次のような三つのことが言えましょう。すなわち第一に、ユダヤ人が神を知っており、御言葉によって神の御心をも知っているということです。神は被造物や心にある律法、あるいは良心などによって御自身を明らかになさるのみならず、御言葉によっても御自身を啓示なさったのです。

第二にユダヤ人は、自分がなすべきことが何であるかをわきまえる能力をもっています。（18節）神の御心を知る者は、なすべきことを正しくわきまえることができます。

第三に、ユダヤ人は、19と20節にあるとおり、案内人、光、導き手、教師であるべく召されています。神は、ユダヤ人がほかの民よりもすばらしく偉大であったから選ばれたのではなく、ユダヤの民を愛されたからにほかなりません。そして神は、ただユダヤ人だけを祝福するためではなく、彼らを通して多くの民を祝福するためにユダヤ人をお選びになったのです。

Ⅱ ユダヤ人は、神に与えられた賜物で何をしたか

この問いに対しては、21と24節までに答えが示されています。しかし残念なことにユダヤ人は、ゆだねられ示された道に従って歩むことをせず、むしろ現実にはそれに逆らうようなあゆみをしてしまったのです。

・あなたは、神の御心を知っていながら、それを行なわない。

・あなたは、他人を教えながら、自分自身の本当の姿に対しては盲である。

・あなたは、して良いこととしてはいけなことを教えながら自分は間違ったことをしている。

・あなたは、律法を誇りとしていながら、神の御名を汚している。

ユダヤ人の特徴は、本当にへりくだって主をほめたたえるのではなく、パリサイ的に自分自身を誇ることにありました。偽りのない神の目は、人々の心の隅々までを見通し、そのためにユダヤ人に向ってこのような激しい非難の言葉をあびせざるをえなかったのです。

神はユダヤ人に多くの物をおゆだねになりましたが、それにもかかわらずユダヤ人は盗み、姦淫をし、神殿のものをかすめることをして神を侮りました。パリサイ的なユダヤ人は高ぶって、死んだ偶像を拜んでいる異邦人を上から見おろしました。ユダヤ人は、異邦人の神殿から金銀、その他宝石で作られたものをかすめとり、それを焼き捨てずに自分のものとしたため「偽善者」と主は非難しておられるのです。金銀その他の宝石から作られたものなど多くの偶像と結びつきをもっているものは呪われるゆえに、ユダヤ人といえども偶像から完全に離れないかぎり呪われるという主の命令をユダヤ人たちは守らなかったのです。

主イエスは、その当時、自らを義とするパリサイ的な人たちに対して、真っ向から対決をなしていました。主イエスはいろいろなことを通して、人間はだれでも惨めであわれむべきものである、という自分の本当の姿に対して心の目が開かれるようにと努力なさいました。たとえば取税人とパリサイ人とが宮で祈るときの様子をお話しになって、かたくななユダヤ人の心の目を開こうと

なさいました。つまり自らを義とする高慢なパリサイ人は主によってさばかれ、反対に自分の胸を打ち続けて悔い改めた取税人は、主のあわれみを受け、祝福されて家に帰ったのです。

また、主イエスは、結婚式の時に礼服を着ないでやってきた一人の男のたとえをお話しになりました。その男は、結婚式に出るにも礼服は着ず、自分がいつも着ている普段着で、自分であると主張してなんの恥かしげもなく式にやってきました。ところが自分は正しいという高慢な心でやってきたこの男は、式場から追い払われてしまったのです。この箇所から、自分を義とする者とはいかなる者であるかを知ることができましょう。これについては三つのことを言うことができます。

第一に、自分を義とする者は、神について何も知らない者ではなく、多くのことを知っている者です。17節〜18節には「あなたは、自分をユダヤ人となえ、律法を持つことに安んじ、神を誇り、御心を知り、……」とあります。

しかし大切なことは、御心を知ることだけでは十分ではなく、御心を行なうことです。

主人の心を知りながら、その思いどおりに用意もせず、働きもしなかったしもべは、ひどくむち打たれます。
(ルカ12・47)

第二に、自らを義とする者は「なすべきことが何であるかを、律法に教えられてわきまえ」と18節にある通り、自分のなすべきことが何であるかをよくわきまえているのです。

では、いったいどうしてこの箇所で、このようなユダヤ人に対して主はパウロを通して告発な

さっておられるのでしょうか。ユダヤ人は、他人を見分けることはしましたが、自分自身を吟味することをしなかったからです。すべてのことをよく知っており、神が他の人から何を期待しておられるかをも知っていながら「自分のことについて正しく吟味することができない」というところぞ、自分を義とする者のもつとも陥りやすい病です。

さてここで少し、「自分がなすべきことが何であるかよくわきまえること」について考えてみましょう。聖書の中の御言葉は、次のように語っています。

すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。(Ⅰテサロニケ5・21)

それらの霊が、神からのものかどうかを、ためしなさい。

(Ⅰヨハネ4・1)

私たちは、ものごとを吟味して、はっきりとした判断を持つべきです。集会にくる人を、すべて見分けることなしに受け入れたり、その人の言うことを簡単に信じこんでしまったりすることは、大いに考えなおさなければなりません。そのためにパウロは次のように書き送っています。

あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。

(ピリピ1・10)

堅い食物はおとなの物であって、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。

(ヘブル5・14)

したがって、霊的な人の特徴は、見分ける能力があるということです。

いままでのところを要約してみますと、

1 自らを義とする者は、神を知り、御心をも知っています。

2 自らを義とする者は、なすべきことをわきまえる能力を持っています。

3 自らを義とする者は、自分が神から遣わされた者だという認識を強く持っている人です。すなわち、1の神と神の御心を知っているということ、そして2の識別力を持っていることから、当然に導かれるのが3の認識、すなわち自分が他の人を教えるために神から遣わされた者である、という認識です。

19-20節には「盲人の案内人、やみの中にいる者の光、愚か者の導き手、幼子の教師……」とあり、また21節には「どうして人を教えながら、自分自身を教えないのですか。」とあります。ある人が、ほかの人々の教師であるということは、非常に重い責任をになうことです。

私の兄弟たち。多くの者が教師になつてはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。

(ヤコブ3・1)

私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。

(Iコリント9・27)

自らを義とする者は、他の人々に対しては、教えたり、訓戒したりすることに熱心です。また、自らを義とする者は、表面の見せかけだけは信心深そうにしています。大切なことは、自分自身を偽らずに素直に自分の罪を認め、いつも主によって自分が吟味される用意があることです。

Ⅲ ユダヤ人に対する神の判断はいかなるものであるか

この問いに対しては、25～29節までの御言葉が答えています。3章9節を見ると、ユダヤ人もギリシャ人もすべての人がひとりのこらず、例外なく罪の下にあることがわかります。「義人はいない、ひとりもない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益なものとなった」とある通り、神の御言葉によると、だれひとり神の前に立つことができず、また義と認められることはないので。そこでパウロは、ユダヤ人から彼らの最大の誇りと高慢な心を打ち砕き、ユダヤ人と異邦人の区別を示す割礼というものによってこのことを解き明かしたのです。28～29節がそれです。「外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。かえって人目に隠されたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です」。

言いかえれば、中身がなければ外側の形式は何の意味もなく、何の価値もないということです。ここでパウロは、外見上の割礼と心の割礼について述べています。つまりだれが本当に神の民に属し、だれが外見上神の民に属するかということが明らかにされています。この割礼とは、主の

イスラエルの民との契約のしるしを意味するものです。つまり当時は割礼を受けた者が神の民に属し、割礼を受けていない者は神の民ではないとされていたのです。

主は彼らに代わって、その息子たちを起こされた。ヨシユアは、彼らが無割礼の者で、途中で割礼を受けていなかったたので、彼らに割礼を施した。民のすべてが割礼を完了したとき、彼らは傷が直るまで、宿営の自分たちのところにとどまった。すると、主はヨシユアに仰せられた。「きょう、わたしはエジプトのそしりを、あなたがたから取り除いた。」それで、その所の名は、ギルガルと呼ばれた。今日もそうである。(ヨシユア5・7-9)

主は、エジプトのそしりをイスラエルから取り除きました。つまり、エジプトから離れるということは、この世から離れるということであり、これこそ割礼が意味することでした。したがって本当に神の民に属したいと思う者は、あらゆるこの世のもの、偶像、肉のことから離れなければなりません。

キリストにあつて、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。
(コロサイ2・11)

割礼が真に意味するところは、自分自身の思いや考えを捨てて、主の御心と戒めに従っていくことです。神は人の外側を御覧になるのではなく、常にその人の心を見ておられます。別の言葉で言うならば、主の御心に従って従順に生きる者は、心の割礼を受けていると言えるわけです。

外見上主の民に属することに価値があるのではなく、内面的に真に主の御心になつた歩みをするからこそが、本当の意味での神の民に属することなのです。

新約聖書によると、いったいだれが本当のユダヤ人なのでしょうか。ここで「ユダヤ人」とは神によってほめたたえられる者という意味です。ですから本当のユダヤ人とは、心の割礼を受けた者です。本当のユダヤ人、すなわち御心になつた歩みをする者とは、自分を無にして全く自分を大切にせず、すべてを主にゆだね、主に明け渡した者にほかなりません。これはすなわち、前に述べた自らを義とする者とは正反対の者です。自らを義とする者は心の割礼を受けておらず、新しい生まれかわりをも体験していません。

その当時、ローマの教会には、異邦人よりも主を信じたユダヤ人の方が多かったと思われます。しかしユダヤ人たちは、信者といえども自分がユダヤ人、すなわち神から選ばれた民であることに自信過剰、意識過剰であつたため、霊的な成長がまことにおそく遅々たるものでした。それと同じように、今日の私たちも、霊的な成長においては遅々たるものです。自分自身の思いや考えが主によって支配されてゆく歩みは、まさに一步一步と進んでゆく道です。

したがって、パウロが切に望んだことは、ローマのキリスト者たちが神の御心を正しく認識して真に謙遜な者となることでした。ユダヤ人は、盲人の案内人、闇の中にいる者の光としての召しを受けましたが、実際は自からの傲慢と思いあがりによって全くだめになってしまったのです。

自分を知恵のある者と思つている人を見ただろう。彼よりも、愚かな者のほうが、まだ

望みがある。

(箴言 26・12)

ああ。おのれを知恵ある者と見なし、おのれを、悟りがある者と見せかける者たち。

(イザヤ5・21)

パウロは新しく生まれかわった信者のために、自らを義とし自らを誇る者を恐れました。彼は、確かに聖書の知識を持つてはいても、形はよいが中身がなかったのです。彼らは愚かな者の導き手、幼子の教師だと自任している者たちだったのですが、実は「羊の群れを荒らしまわる狂暴なおおかみ」となってしまうのです。

私が出発したあと、狂暴な狼があなたの中のはいり込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。(使徒20・29、30)

終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、情け知らずの者、和解しない者、そしめる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快楽を愛する者になり、見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。(Ⅱテモテ3・1-5)

しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現われるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえして、自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。そして、多くの者が彼らの好色にならい、そのために真理の道がそしりを受けるのです。また彼らは、貪欲なので、作り事のことばをもつてあなたがたを食い物にします。彼らに対するさばきは、昔から怠りなく行なわれており、彼らが滅ぼされないままにいることはありません。

(Ⅱペテロ 2・1-3)

神を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには確かに神の愛が全うされているのです。それによつて、私たちが神のうちにいることがわかります。神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。……小さい者たちよ。今は終わりの時です。あなたがたが反キリストの来ることを聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現われています。それによつて今が終わりの時であることがわかります。彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし私たちの仲間であつたのなら、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。しかし、そうなのは、彼らがみな私たちの仲間でなかつ

たことが明らかにされるためなのです。

(Iヨハネ2・4、5、6、18、19)

しかし、この人たちは、自分には理解もできないことをそしり、わきまえのない動物のように、本能によって知るような事の中から滅びるのです。忌まわしいことです。彼らは、カインの道を行き、利益のためにバラムの迷いに陥り、コラのようにそむいて滅びました。彼らは、あなたがたの愛餐のしみです。恐れげもなくともに宴を張りますが、自分だけを養っている者であり、風に吹き飛ばされる、水のない雲、実を結ばない、枯れに枯れて、根こそぎにされた秋の木、自分の恥のあわをわき立たせる海の荒波、さまよう星です。まっ暗なやみが、彼らのために永遠に用意されています。

(ユダ10・13)

パウロ、ペテロ、ヨハネ、ユダは、うわべだけ信心深そうな惑わす者に対していつも警告を發していました。イエス御自身も、またそのような者を警戒しておられました。

にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。良い木が悪い実をならせることができないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。こういうわけで、あなたがたは、実によって彼ら

を見分けることができます。わたしに向かって、「主よ、主よ。」と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。「主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追ひ出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。」しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。「わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。」

(マタイ 7・15―23)

忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、はつか、いのんど、クミンなどの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、すなわち正義もあわれみも誠実もおろそかにしているのです。これこそしなければならぬことです。ただし、他のほうもおろそかにしてはいけません。目の見えぬ手引きども。あなたがたは、ぶよは、こして除くが、らくだはのみこんでいます。忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。目の見えぬパリサイ人たち。まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば、外側もきよくなります。

(マタイ 23・23―26)

さて、金の好きなパリサイ人たちが、一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた。イ

エスは彼らに言われた。「あなたがたは、人の前で自分を正しいとする者です。しかし神は、あなたがたの心をご存じです。人間の間であがめられる者は、神の前で憎まれ、きらわれます。」

(ルカ 16・14-15)

最後に、ここの箇所が私たちに何を言わんとしているかについて考えてみましょう。神は、私たちに何をお与えになったのでしょうか。神は私たちに対して、被造物を通して、あるいは心に書かれている律法や良心を通して御自身を現わされました。すべての人は、うそをつくこと、盗むこと、殺すことが悪いことである、ということをよく知っています。人は良いことをすれば、心静かでいられますが、悪いことをすれば良心の呵責にさいなまれるのです。

私たちは、被造物や心に書かれている律法、あるいは良心によってのみならず、御言葉によっても、主を知ることができます。それらを通して私たちはよりよく知ることができますようになりますが、同時に、責任がますます重くなってきます。ただ単に行ないによる罪だけでなく、心のなかの思いによる罪もまた、良心の呵責となります。ところが私たちに、神の言葉である聖書だけでなく、主イエス御自身をも与えられたのですから、ましてやその責任はますます重いものとなっているのです。イエスによる救いは成就されました。私たちはあらゆる罪や債務から解放され、神によって聖い者とされることを知っています。神が私たちに与えてくださった賜物に対して、私たちはいったい何をしましたでしょうか。あなたはいったい主イエスに対して何をしましたでしょうか。主イエスこそあなたに対する神の賜物にほかなりません。イエスについての知識が私

たちを救うのでもなく、イエスについて語ることが私たちを義とするのでもなく、ただひとつのこと、すなわち主を受け入ることが私たちを救い、義としてくれるのです。

この箇所が出てくる「ユダヤ人」のかわりに「キリスト者」という言葉を置き換えてみると、いままで述べたことが生き生きとしたものになります。何としばしば私たちの行ないによって、主の御名が汚されたことでしょうか。多くの者が、自ら「キリスト者」であると自称し、そのことを誇りにしています。しかし私たちはそのような思いあがった高慢な心を完全に打ち砕かれなければ主のあわれみを受けることはできません。なぜならば、主は謙遜な者に恵みを施すのに対して、思いあがった高慢な者には徹底的に対決なさるからです。

今日学んだこの箇所から明らかなことは、人は外側を見るのに対し、主は内側、すなわち心の奥底を御覧になる、ということです。人は、罪を犯すならば、割礼を受けていても何の意味も価値もありません。

キリスト・イエスにあつては、割礼を受ける受けないは大事なことでなく愛によって働く信仰だけが大事なのです。

(ガラテヤ 5・6)

割礼を受けているか受けていないかは、大事なことでありません。大事なのは新しい創造です。

(ガラテヤ 6・15)

ですから、あなたが本当に主によって新しく造りかえられた者であるかないかということは、

非常に大きな問題なのです。もしも新しいのちがないならば、たとえいくら熱心に集会に通い聖書を読んでも、神から遠ざかっているのです。主イエスは新しいのちを受けるようにと今日もあなたにこのすばらしい賜物を提供しておられるのです。この贈り物に対してあなたはどのような態度をお取りになられるでしょうか。

主イエスは、永遠のいのちを提供しておられるだけでなく、あふれるばかりのいのちをも提供しておられるのです。主イエスは、私たちがローマ人への手紙5章17節に記されているように「いのちにあつて支配するようになり」、「圧倒的な勝利者」となることを望んでおられます。

最後に、出エジプト記4章の御言葉を考えてみましょう。

さて、途中、一夜を明かす場所でのことだった。主はモーセに会われ、彼を殺そうとされた。そのとき、チッポラは火打石を取って、自分の息子の包皮を切り、それをモーセの両足につけ、そして言った。「まことにあなたは私にとって血の花婿です。」そこで、主はモーセを放された。彼女はそのとき割礼のゆえに「血の花婿」と言ったのである。

(出エジプト4・24、25)

主は男の子が生まれた場合は、八日目には必ずその男の子に割礼を施さなければならぬと命令なさいました。しかしモーセとその妻チッポラはその子を非常に大切にしていたため、子どもが苦しまないようにという思いめぐらして割礼をしないようにと考えたところ、その瞬間主はモーセを殺そうとなさいました。我が子かわいさゆえの甘さと不従順のために、モーセはいのち

を奪われる危険に直面したのです。このことからわかるように、割礼とは徹頭徹尾主によりたのみ、すべてを主にささげ明け渡すことを意味しています。したがって割礼とは、罪から生じるあらゆるもの、すなわち古い性質からでてくるあらゆる人間的な考えや思いから全く離れるということの意味しているわけです。

これは、とりもなおさず、自らに死ぬこと、すなわち自らの心の破産を意味しています。それゆえイエスの割礼とは、イエスとともに死に、そのことによってイエスのよみがえりのいのちがあふれでることを意味するわけです。

多くのキリスト者は、主イエスのよみがえりの力にあずかることを切に望みますが、その実、このときのモーセやチツボラのように苦しむことを恐れ、主とともに苦しむことを避けてしまうのです。

私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。

(ピリピ 3・10)

これこそまさに主イエスの割礼を受けることです。この割礼を受けた者はパウロと同じように、次のように言うことができるのです。

肉体の中にあると、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。

(Ⅱコリント 5・9)

6 誰ひとり神の前に義と認められない

ローマ人への手紙

3章1節から20節まで

I 自らを義とする者への三つの質問

- 1 ユダヤ人の優れたところは何か
- 2 不真実によって神の約束が無に帰するか
- 3 不義が神の義を明らかにするとしたら、怒りを下す神は不正か

II 神の究極的な裁き

1 罪の支配のもとに

ある人間

(五つの事実)

2 滅びに向う人間の

a 言葉

b 道

c 業



今日は、引き続いてローマ人への手紙3章1―20節について学んでみましょう。

では、ユダヤ人のすぐれたところは、いったい何ですか。割礼にどんな益があるのですか。それは、あらゆる点から見ても、大いにあります。第一に、彼らは神のいろいろなおことばをゆだねられています。では、いったいどうなのですか。彼らのうちに不真実な者があつたら、その不真実によつて、神の真実が無に帰することになるでしょうか。絶対にそんなことはありません。たとい、すべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきです。それは、「あなたが、そのみことばによつて正しいとされ、さばかれるときには勝利を得られるため。」と書いてあるとおりです。

しかし、もし私たちの不義が神の義を明らかにするとしたら、どうなるでしょうか。人間的な言い方をしますが、怒りを下す神は不正なのでしょうか。絶対にそんなことはありません。もしそうだとしたら、神はいったいどのように世をさばかれるのでしょうか。でも、私の偽りによつて、神の真理がますます明らかにされて神の栄光となるのであれば、なぜ私がお罪人としてさばかれるのでしょうか。「善を現わすために、悪をしようではないか。」と言つてはいけないのでしょうか。私たちはこの点でせられるのです。ある人たちは、それが私たちのことばだと言っていますが、もちろんこのように論じる者どもは当然罪に定められるのです。

では、どうなのでしょう。私たちは他の者にまさっているのでしょうか。決してそうではありません。私たちは前に、ユダヤ人もギリシャ人も、すべての人が罪の下にあると責

めたのです。¹⁰ それは、次のように書いてあるとおりです。

「義人¹¹はいない。ひとりもない。悟り¹²のある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもない。」

「彼ら¹³のどは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く。」

「彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり、」

「彼ら¹⁴の口は、のろいと苦さで満ちている。」

「彼ら¹⁵の足は血を流すのに速く、彼ら¹⁶の道には破壊と悲慘がある。また、彼らは平和の道¹⁷を知らない。」

「彼ら¹⁸の目の前には、神に対する恐れがない。」

¹⁹ さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。なぜなら、律法を行なうことによつては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によつては、かえって罪の意識が生じるのです。
(ローマ3・1～20)

本論に入る前に、少しばかり前置きをしてみましょう。かつて未信者の人が友達に向かって次のように言ったそうです。「私には、ひとつの大きな恐れがあるのです」。そこでその友達が「それは何ですか」と聞きますと、次のように答えたそうです。「私が恐れているのは、聖書は真理

であるということなのです」。

聖書は私たちに、私たちの本当の状態を明らかにします。人間はそのままでは失われた状態であり、神の呪いとなっています。ところが、主イエスのみもとに行き罪を告白して悔い改めた者には、永遠のいのちが与えられます。したがって人間は、自分の罪の状態を認めようとせず、罪が明るみに出されるのを本能的に恐れます。このことを証明するものとして、次のような実話をご紹介します。ドイツのある町でいたずら好きなある人が、その町で最も尊敬されている三人の人たちに匿名の手紙を出しました。その手紙の内容は「すべて明らかにした。」というたった一行の文章でした。ところがこの手紙を受けとった三人のうち、一人はすぐに自殺し、他の二人は訴訟や処分を恐れてその町から姿を消したということです。人間は光の中に出、すべてを明かるみに出されることを恐れますから、主イエスをも拒むようになってしまうのです。

私たちは、まえにローマ人への手紙2章17―29節で、自らを義とする者について一緒に学びました。自らを義とする者は、人の目はごまかせても、神を偽ることはできません。自らを義とする者は、実際そうではないことをもあたかもそうであるかのように見せかける偽善者なのです。今日、ご一緒に学ぼうとしているところは、二つに分けて考えることができます。

I 1―8節 自らを義とする者への三つの質問

II 9―20節 神の究極的なさばき

I 自らを義とする者への三つの質問

1〜8節までには、自らを義とする者への三つの大きな質問が出されています。それは次のようにまとめることができます。

- 1 ユダヤ人の優れたところは何か。(1〜2節)
- 2 不真実によって神の約束が無に帰するか。(3〜4節)
- 3 不義が神の義を明らかにするとしたら、怒りを下す神は不正か。(5〜8節)
- 1 ユダヤ人の優れたところは何か

第一の問いは、ユダヤ人の優れたところは何か、割礼にどんな益があるのか、ということですが、言葉をかえて言うならば、外見上神の民に属するということがいったいどれほどの益を持っているのかということです。これに対してパウロは肯定的な答と否定的な答を与えています。そのうち否定的な答は2章28〜29節です。体に学びました。体の割礼が真に神に喜ばれるものではなく、心の割礼こそ真の意味で神に喜ばれる本当のユダヤ人である、と聖書は言っています。つまり心の割礼とは、新しく生まれかわることを意味しているのです。洗礼やパン裂きや教会の会員になるということが大切なのではなく、新しく生まれかわることこそが大切なのです。イエスに出会ってしっかりとイエスに結びついてゐる者は、手による体の割礼ではなく心の割礼を受けてゐるのです。

キリストのうちにこそ、神の満ち満ちた性質が形をとって宿っています。そしてあな

たがたは、キリストにあつて、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と權威のかしらです。キリストにあつて、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。あなたがたは、バプテスマによつてキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によつて、キリストとともによみがえらされたのです。あなたがたは罪によつて、また肉の割礼がなくて死んだ者であつたのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。

(コロサイ 2・9―14)

しかしそれと同時に、他方においてパウロは、肯定的な答も出しています。すなわち神によつて選ばれた民には、特に優れたところがあるということです。それは、2節に書いてあるように、彼らは神のいろいろな御言葉を委ねられている、ということです。もちろんそれは人間の手柄によるのではなく、ただ神の恵みによるのです。

彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法を与えられることも、礼拝も、約束も彼らのものです。先祖たちも彼らのものです。また、キリストも、人としては彼らから出られたのです。

(ローマ 9・4―5)

今日、聖書を持っている人は、すばらしい特権と宝物をもっています。しかし、神の御言葉に対して無関心でいるということは、まことに無責任なことです。御言葉に対して無関心でいる者は、闇を照らすただひとつの光を捨てるようなものです。やがてその人は暗やみの中に一人さまよい、全く絶望的な状態に陥ってしまうのです。主は今日も御言葉によって、私たちに語りかけたいと思っておられます。御言葉を真剣に受け取る者ははかりしれない祝福にあずかることができるのです。主の御言葉は神に至る道を示し、救いに至る道を示し、主との幸いな交わりに至る道を示します。

私たちはどうでしょうか。ただうわべだけ聖書を持っているにすぎない者なのでしょうか。それともその御言葉を通して主に語りかけていただくことを切に願っているのでしょうか。御言葉は、私たちにとって、いのちと救いを与えるものなのでしょうか。

2 不真実によって神の約束は無に帰するか

第二の問いは、ユダヤ人のうちに不真実なものがあつたら、その不真実によって神の約束が無に帰するか、ということ です。その答えは明らかです。つまり神の真実は、ユダヤ人の不真実によつても決して恥をこうむらないということです。たとえ多くのユダヤ人が信じなくても、神は真実をもつて取り扱われ、約束を成就なさるのです。神は、全く人間から独立しておられ、決して偽ることがありません。主の御言葉は完全に信頼することができます。そしてユダヤ人の不真実にもかかわらず、主の御言葉は確実に成就されるのです。

過去において、特に「士師」の時代とイエスの時代にあつて、ユダヤ人はまことに不真実でし

た。しかしそれにもかかわらず、主は御自分の民を見捨てず、千年王国に至るまで彼らを導いていかれるのです。このようにして御言葉が成就され、彼らは大いなる祝福にあずかることができます。神は御言葉に忠実であられ、忠実であり続ける方なのです。

私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。

(Ⅱテモテ 2・13)

まことに、主の言葉は正しく、そのわざはことごとく真実である。

(詩篇 33・4)

この御言葉は、キリスト者にとって大きな慰めです。その反面、主の御言葉は必ず成就されるゆえに、未信者にとっては厳しい警告でもあります。

3章4節には次のように記されています。「たとい、すべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきです。」

人間は、神と論じあおうとするかもしれませんが。また、自分を神の前に義としようとするかもしれません。あるいは御言葉を自分の都合のよいように変えようとするかもしれません。しかしこれらのことは、すべて価値のないむなしいことです。新しく生まれかわり、主によって新しく造られ、永遠のいのちを与えられたものだけが、神の前に義とされるのです。神が不真実なのではなく、人間が不真実なのです。人間は、不真実であり、神のために何の役にもたない者です。すべての人は偽り者である、と聖書は言っています。自分が偽り者だとまだ認めようとしない人は、神も知らなければ、自分のことも知らないのです。

私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。

(詩篇51・4)

ここでは一方において人間の罪、他方において神の完全さが記されています。ダビデのように自分を低くしてすべてを主に明け渡す者は、永遠のいのちを与えられるのです。まず罪を認め、自分のどうしようもない状態を認め、悔い改めると罪の赦しを体験することができのです。

今日、うわべだけのクリスチャンは大勢います。しかしそれが本物であるか、にせものであるかは、遅かれ早かれ明らかになるのです。初代教会においてもこれと同じような問題があったのです。

彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし私たちの仲間であつたのなら、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。しかし、そうなのは、彼らがみな私たちの仲間でなかったことが明らかにされるためなのです。

(Iヨハネ2・19)

光の中に来て、本当に悔い改めることをしないかぎり、真の解放を得ることはできません。

3 不義が神の義を明らかにするとしたら、怒りを下す神は不正か。

第三の問いは、もし私たちの不義が神の義を明らかにするとしたら、怒りを下す神は不正かど

うかということです。これに對してパウロは、はっきりと次のように答えています。神の神聖さが惡を罰しなければならぬゆえに、罪に對する神の怒りは決して不正ではないと。自分自身というものが粉々に打ち碎かれる者は幸いです。聖書によると、すべてのものは偽り者です。この聖書の御言葉素直に認めて受け入れることこそ神の恵みを受けるための必要条件です。

・神は聖なる御方であられ、罪を憎まざるを得ません。

・神は罪を憎むゆえに、罪を罰せざるを得ません。

・神は義なる、聖なる御方であられるゆえに、罪を犯した者は罰を受けなければなりません。

まだ新しく生まれかわっていない人は、罪の恐ろしさも知らなければ、神が聖なる御方であることも知りません。罪人はたとえいかなる弁解をしても、結局は罪人にすぎないのです。神は裁き主であられるゆえに、罰がやってきます。

2章4節に、神の慈愛は罪人を悔い改めに導くとありますが、この悔い改めによつて救いに至ることができのです。罪を悔い改めようとしなない人は、神の裁きを受けなければなりません。神を恐れ、主に全き信頼を置く者だけが神のあわれみを受けるのです。神に對する私たちの態度がこのようになったかどうか、私たちは問ひなおしてみましよう。

Ⅱ 神の究極的な裁き

私たちはいままで、自らを義とする者についての三つの質問について考えてきました。そこで次に、この箇所第二の部分である9―20節までを考えてみましょう。ここでは神の究極的な裁

きが中心になっています。ユダヤ人も異邦人も、すべての人が債務を負っている、と記されています。しかし人間は自分の債務を思い出すことはいやなものですか。また罪についても考えることはいやなものです。しかし人間は、自分が債務を負っているものであることを認めるべきであり、罪を悔い改めて神に罪の許しを願い求めるべきです。ですからパウロは、すべての者が神の前に債務を負っているということをそのように強調したのです。9節では、例外なくすべての人が罪の支配の下にあり、神の恐るべき判決のもとにいるのだと言っています。旧約聖書に従って、パウロは罪人の姿をはっきりと記しております。

彼らの口には真実がなく、その心には破滅があるのです。彼らののは、開いた墓で、彼らはその舌でへつらいを言うのです。

(詩篇5・9)

彼の口は、のろいと欺きとしいたげに満ち、彼の舌の裏には害毒と悪意がある。

(詩篇10・7)

愚か者は心の中で、「神はいない。」と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行なっている。善を行なう者はいない。主は天から人の子らを見おろして、神を尋ね求める、悟りのある者がいるかどうかをご覧になった。彼らはみな、離れて行き、だれもかれも腐り果てている。善を行なう者はいない。ひとりもない。

(詩篇14・1-3)

彼はおのれの目で自分にへつらっている。おのれの咎を見つけ出し、それを憎むことで。彼の口のことばは、不法と欺きだ。彼は知恵を得ることも、善を行なうこともやめてしまっている。彼は寢床で、不法を図り、よくない道に堅く立っていて、悪を捨てようとしらない。

(詩篇 36・2-4)

蛇のように、その舌を鋭くし、そのくちびるの下には、まむしの毒があります。

(詩篇 140・3)

彼らの足は悪に走り、血を流そうと急いでいるからだ。

(箴言 1・16)

彼らの足は悪に走り、罪のない者の血を流すのに速い。彼らの思いは不義の思い。破壊と破滅が彼らの大路にある。彼らは平和の道を知らず、その道筋には公義がない。彼らは自分の通り道を曲げ、そこを歩む者はだれも、平和を知らない。(イザヤ 59・7-8)

人間だれしもが遭遇するのは、次の五つの事実です。

第一は「義人はいない、ひとりもない」ということです。すなわちこうあるべきだと思ふことを実行できる者はひとりもおらず、したがって債務のない者はひとりもないということです。第二は「悟りのある人はいない」ということです。エペソ 4 章 18 節に記されているとおり、す

べての人は罪のゆえにその知性において暗くなっているのです。

第三は「神を求める人はいない」ということです。本当に真剣に神を求める人は事実いないのです。

第四は「善を行なう人はひとりもない」ということです。善とは何か。善とは神の使命にかなうことです。神を第一として自分自身を全く明け渡すことこそ善を行なうことです。ですから人間の中に善があるという考えかたは根本的に間違っているのです。

第五は「すべての人が迷い出て、神の道から離れ、みなともに無益なものとなった」ということです。無益なものとは神にとって価値のないものということです。神の道から離れてしまっている者には神に対するまことの恐れがありません。

この神の判断には例外がありません。すべてのものがそのようなものである、と聖書は言っています。

人が滅びに向かっていることは、次の三つによって明らかです。

彼らの「言葉」(13～14節)

彼らの「道」(15～17節)

彼らの「業」(18節)

言葉によって人は偽りあざむきます。彼らの口は呪いと苦さで満ちているとパウロは言っています。

血を流すことと平和のないこととは、彼らの道をよくあらわしています。私たちは剣によって

のみならず、いろいろな考えをあらわす言葉、あるいは舌によっても人を傷つけたり、ある場合には殺害することもしてしまっています。すべての人はたとえ実際に血を流さないとしても、その本質上潜在的に殺害者である、と聖書は言っています。

ある有名な医者が、ある日、絞首刑になった殺人犯の死体のそばに立っていました。死体に近づくと、その医者顔はみるまにまっさおになり、指はわなわなとふるえました。それを見た人が「先生。どうなさいましたか」と聞きますと、医者は静かに次のように話しました。「死んだこの殺人犯は、私の幼な友達でした。このことを思うとなぜ私が彼と同じようにならなかったか、神の恵みなくしてはどうていその理由を見出すことはできないのです」。

パウロがローマ人への手紙で描いた人間像は、なんと暗いものでしょうか。しかし、これこそ人間の偽らざる本当の姿なのです。

またパウロは、19節から律法のことについて述べています。律法は神の御心を示すために与えられました。律法は神の御心を示しますが、人間は神の御心を行なおうとする力はなく、ただせいぜいその意志を持つにとどまるのです。そこで起ってくる疑問は、人間が行なうことのできないことをなぜ、何のために神は律法を通して人間に要求なさるのでしょうか。19節は、すべての口がふさがれるためである、と言っています。つまり、自らを義とすることをやめるため、すべての口をふさぐ、と主は言っておられます。神の律法の光に照らされて自分のすべてが明るみに出されるならば、人間はもはや自らを義とすることができなくなり、自分が神の前に債務を負っていることを認めざるをえないようになるのです。すなわち神は、人間が行なうことができる律

法をお与えになられたのではなく、むしろ「自分の罪を知るようになるため、実行不可能な律法をお与えになった」のです。

ちょうど医者が病人を診察して悪いところを指摘するように、神も人間の罪を指摘なさるので、そのための手段が律法にほかならないのです。

大部分の人は、聖書とかかわりあいを持ちたくないと思っています。本当に聖書を神の言葉として受け入れたものだけが自分の罪を知り、救い主を必要とするのであって、このように真剣に求めない者には、このことは全くわからないのです。

この箇所目的は、人間が自分自身を本当に知るように導かれるということです。20節に、人間は自分自身の人間的道德的な努力によつては決して神の前における義に達することができないとあります。律法によつてはかえつて罪の意識が生じるのです。この御言葉の中に、私たち人間の恐るべき真実の姿が描かれているのです。

いかなる動物も、人間のような悪を行なうことはありません。

いかなる猛獣も、人間ほど残虐ではありません。

また、人間ほど汚いことを言う生きものもありません。平和なときには、これらのことがらが表面上隠されていますが、戦争のときになると、すべてが表われてくるのです。

聖書は例外なく、すべての人間に判決を下しています。いかなる人間にも根強い自我と、消すことのできない抑えることのできない傲慢が宿っています。たとえば、山上の垂訓のような律法においては、絶対的な愛、正直な心、清さ、自分を無にすることが要求されています。これらの

律法を正直に行なおうとする者は、自分自身のことを知るようになります。神の御霊は、私たちの罪をすでに明るみに出したでしょうか。自分が滅び行く者であること、債務を負っている者であることがあなたにおわかりになったでしょうか。

御言葉によって自分の生活を見ることができ、自分が聖なる神のさばきのもとにあり「滅びる者は禍いなるかな」ということを正しく知ることができた者が、神の豊かな恵みを体験することができます。



草は枯れ、花はしぼむ。

だが、私たちの神のことは永遠に立つ。(イザヤ40・8)

第Ⅱ部 提供された主の救い

新約聖書ローマ人への手紙

3章21節から5章21節まで



主の妹

私は、日の下で行なわれたすべてのわざを見たが、
なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。
実に、日の下で骨折ったいっさいの労苦と思ひ煩いは、人に何になろう。
その一生は悲しみであり、その仕事には悩みがあり、その心は夜も休まらない。
これもまた、むなしい。(伝道者1・14、2・22、23)
しかし私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。私は、
神なる主を私の避け所とし、あなたのすべてのみわざを語りあげましょう。(詩篇73・28)

人間はいかにして神の前に義とされるか

7 人間はいかにして神の前に義とされるか

ローマ人への手紙

3章21節から26節まで

I 律法による道Ⅱ自分の義

Ⅱ 神の全く新しい道Ⅱ神の義

1 ヨベルの年 恵みの計画

2 契約の上に血がある 救いの成就



カンピドリオの丘からフォロ・ロマーノを望む。

ここからは第2部に入ります。まず、ローマ人への手紙3章21―26節を学んでみましょう。

しかし、今は、²¹律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。²²すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。

²³すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、²⁴神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。²⁵それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。

(ローマ3・21―26)

I 律法による道

私たちは今までのところで、すべての人が神の前に債務者であることを見てきました。人間に對する神の判断は、例外なく「すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった」ということです。人間は神に對し、また同胞に對し、罪を犯したと聖書は言っています。

ところが3章21節からは、全く新しいテーマが展開されます。3章21節から5章21節までは、「神が、イエス・キリストにある救いを提供しておられる」ことが主題となっています。神は、

罪人に対する救いを御計画になり、イエス・キリストによってそれを行なわれ、罪と負債からの贖いを罪人に提供なさいました。

3章20節を見ると、「律法によつては、かえつて罪の意識が生じる」と記されています。自身の債務を知ること、そして心から出てくる罪を知ることが、大変なことであり、恥かしいことです。しかしながらこのことは、どうしても必要なことなのです。救いの確信を得るためには、自分の罪を知ることがどうしても必要です。病人だけが医者が必要とするのであり、聖霊によって罪を認めるようになった者だけが救い主の必要性を感じるのです。

ある信者と不信者が、ドイツの有名な温泉であるカールスバッドで次のような話をしたそうです。その不信者は大金持ちでしたが、胆石症の治療のためにこの温泉にやってきたのでした。彼は信者にむかつて言いました。

「もちろん私だつて神の存在を否定しているわけではないのです。しかし、どうして救い主なるものがなければならぬのか、その必要性が感じられないのですかね。」

すると、それを静かに聞いていた信者の人は、次のように答えました。

「でもちよつと考えてみてください。あなたはいま胆石症を直すためにこの温泉にきておられるでしょう。いままで四、五十年間、元気な時はこの温泉など全然必要としていなかったでしょう。しかし胆石症になってはじめて、病気がいやされるためにこの温泉が必要になったのではありませんか。信仰の問題も実はそれと全く同じなのです。つまり自分が罪に対して全く盲目であつたときには、救い主などどうでもよかったでしょうが、いったん自分の罪に対して

心の目が開かれ、自分が神から離れていることこそ罪であると知ったときには、どうしても救い主を必要とするのです。聖書にも記されているように、イエス・キリストによらなければ、父なる神のみもとに行くことはできないのですから、私たちはどうしても救い主なるイエス・キリストを必要としているのです。」

人間はだれでも、心に書かれている律法を持っています。そして、その中のある人々は、聖書に書かれている律法も知っています。しかし神の前には、これらの人々の間に区別がなく、すべての人は罪と債務を持っており、神から離れてしまっているのです。律法を犯す者は神の前に債務があります。そしてその人の心の中にはいつも不安と心配があるのです。

この不安と心配から、非常に大切な問い、すなわち人間はいかにして神の前に義とされるか、という問いが出てくるのです。神と人との間の壊された関係を正しいものにするという可能性は、人間の側に存在しているのでしょうか。それとも全く絶望的に、永遠の滅びとさばきとに服さなければならぬのでしょうか。この問いに対して私たちに慰めを与えるすばらしい答えが21節に記されています。「今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によつてあかしされて、神の義が示されました。」

ローマ人への手紙の1章から3章20節までに、私たちは神の前に義とされる一つの道を見てきました。そこではユダヤ人も異邦人もそれぞれ自分の道を歩んでしまったことが記されています。しかし、人間の力で神の前に義となろうとする努力に対する神の判断は、次のようなものでした。

「義人はいない。ひとりもない。」神が受け入れることのできるような人はいない！

Ⅱ 神の全く新しい道

人間に罪があることは、否定することのできない事実です。そして、その罪が罰せられるということも事実です。そしてまた、人間がいのちの源である神から罪のために離れている、ということも事実です。本当に悔い改めて碎かれた人、自分の力でよくなろうとすることに全く絶望した人、神の前でちりの中に伏した人のために福音があります。この福音は「しかし、今は神の義が示された。」ということによって現われたのです。「しかし、今は。」という言葉は、全く新しい時代が始まったことを意味しています。

旧約聖書を見ますと「ヨベルの年」という言葉が出てきますが、これは喜びの年、あるいは歓呼に満ちた年という意味で、五十年ごとに行ってくるものとされています。そしてヨベルの年には、それまでのすべての負債、債務などが取り払われることが特別に許されていました。しかし21節にでてくる「しかし、今は。」ということばは、旧約聖書時代のヨベルの年よりも、さらに新しいものが始まることを示唆しています。

「神は全ての罪を赦す」というのはかりしれない恵みが、主イエスを通してもたらされたのです。

神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕われ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ、すべての悲しむ者を慰め、シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの

油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである。彼らは、義の樫の木、栄光を現わす主の植木と呼ばれよう。

(イザヤ 61・1-3)

「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」イエスは書を巻き、係りの者に渡してすわられた。会堂にいるみな目の目がイエスに注がれた。イエスは人々にこう言って話し始められた。「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。」

(ルカ 4・18-21)

しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。

(ローマ 3・21-22)

3章20節までは「人間が何をするか」について記されていますが、3章21節からは「神が何をするか」について記されています。

ここには、逃れ道のないような場合にも神の御手が差し伸べられ、しっかりとらえてくださることがはっきりと記されています。神は、滅びゆく人類の運命を変えようとなさっておられま

す。まばゆいばかりの光が、人間の罪の淵と闇とを深みに至るまでくまなく照らし出すのです。今まで私たちは、裁く者としての神を見てきました。しかし怒りの神は、同時に罪人でさえも義とされる救いの道を提供しておられます。そんなことがいったいどうして可能なのでしょうか。旧約聖書の中には、このことを指し示す「象徴」が出てきます。契約の箱がおかれているところには、かならず神が御臨在なさいました。そしてその契約の箱の中には、石に書かれた律法がおさめられていました。大いなる贖いの日には、この契約の箱の上に血がふりかけられました。それと同じように、キリスト・イエスの血が流されることによって、裁く神、判決を下す神は、恵みを与える神となられたのです。罪人に対する神の罰は、イエスの上にくだされました。これはすなわち、イエス・キリストが十字架上で注がれた血潮は、「代価がすでに支払われた」ことを証明している、ということです。この事実にもとづいて、ヘブル人への手紙の著者は、次のように書き記しました。

こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。また、私たちには、神の家をつかさどる、この偉大な祭司があります。そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪惡な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。

(ヘブル 10・19～22)

人間が破った律法は、主イエスの血によって覆われました。主イエスという救い主の血潮によって、債務者は債権者になることが許されました。つまり、債権者と債務者は、全く入れ替ったのです。債権者は債務を請け負い、債務者は義を受け取るようになったのです。罪によって債務が生じ、債務を負うことによって死が生じる、と聖書は言っていますが、主イエス御自身が、全人類のかわりにこのことを一身に受けてくださったのです。そのことによって、全人類は義とされ、永遠のいのちを提供されたのです。

20節と21節とは、全くの対照をなしています。つまり20節では「律法」について、21節では、「啓示」について記されているのです。律法は要求し、判決を下します。人間は自分の力で律法を守ったり行なおうとしますが、実際はそれを行うことができないのです。あらゆる宗教は、律法を成就しようとする人間の試みです。しかし律法を成就しようとする努力の結果は、絶望以外のなものもたらしません。律法の正反対のものがまさに福音であり、神の啓示なのです。こういう理由から、パウロは21節で「しかし、今は」という表現を使ったのです。

失われた人間、滅びに定められた人間は、自分の力では自分を救うことができず、また逃れ道を見い出すことすらできないのです。ですから、上から神の啓示がなされたのです。第一の道は、律法によって義とされる道でしたが、人間の罪の無力さのゆえにふさがれてしまったのです。20節に記されているとおり「律法を行なうことによって、だれひとり神の前に義と認められないのです」。

しかし、もうひとつの別の道は、神が拓かれた道であり、神の思いです。律法を守り、神の義

を尊び、さばきをも軽んじないで、神の義を提供するのが第二の新しい道です。

しかしながら、次の事実は変わることなく存続するのです。つまり、律法は聖なるものであり、すべての人間は罪を犯したゆえに神の前に義人として立てる人は一人もいず、神は罪人をそのままでの状態で義と認めることはできません。もしもそうしたならば、それはご自身の律法に反するものであり、義も真理もくずれてしまうことになるからです。

新しい道は、神の義であって、人間の義ではありません。それは神からくるものであって、神の義は、人間の義と何のかかわりもありません。神の義は、神の賜物であり、上からの啓示です。神の義は一つの人格です。すなわち主イエスです。主イエスを信じることによって、神の義が私たちのものとなるのです。

神は私のために、ご自身のおひとり子を通して、大いなる犠牲をなしてくださいました。罪人を永遠の滅びから救うためにはいかなる犠牲も大きすぎることはありませんでした。

ドイツで好んで用いられる子供の祈りは、次のようなものです。

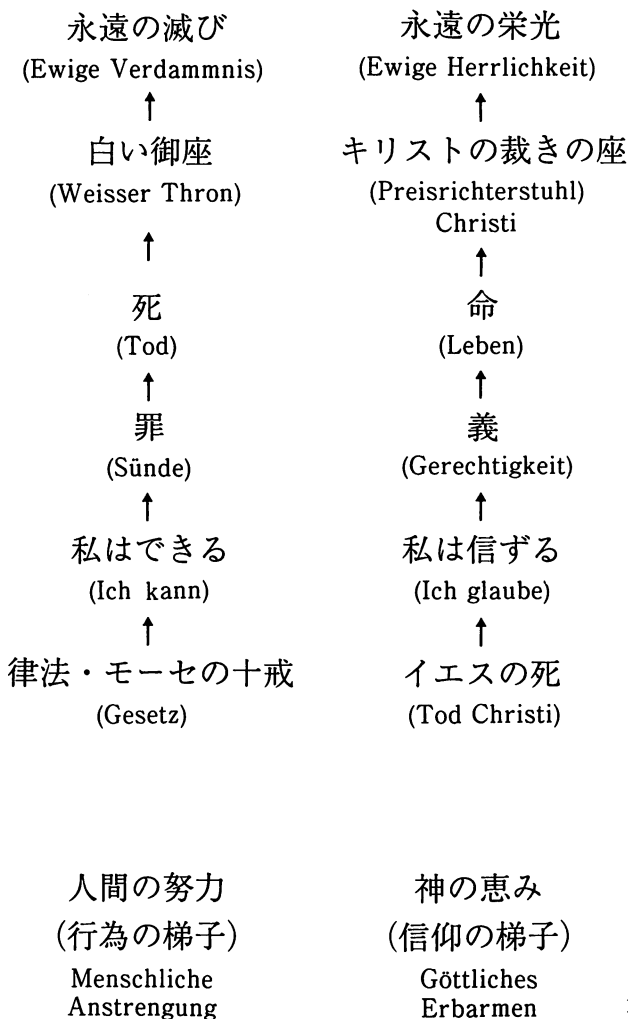
「イエス様の血潮と義、それこそ私の大事な宝です。これを持って行けば、天国で神様の前に立つことができるのです。」

これは、この箇所でパウロが言わんとしていることを、最も端的に表現したものであると言えますでしょう。

私たちはすでに主イエスの義を持っているのでしょうか。これこそ、一番大切なことなのです。

二つの道

Zwei Wege



主イエスは、次のように言っておられます。

もし、あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義に勝るものでないなら、あなたがたは、決して天の御国にはいれません。

(マタイ 5・20)

律法学者たちは、自分の力で律法を行なおうとしました。主イエスは、彼らについて次のように言われたのです。

ですから、彼らがあなたがたに言うことはみな、行ない、守りなさい。けれども、彼らの行ないをまねてはいけません。彼らは言うことは言うが、実行しないからです。

(マタイ 23・5)

神の義とは、人間の努力の結果ではなく、全くいさおなしに与えられる神の賜物です。義とは、債務を支払う以上のものです。神の義とは、あらゆる債務と罰から完全に解放されている状態を意味しています。神は、義とされた者を、一度も罪を犯さなかった者として取り扱われます。

神の義について、私たちは例の放蕩息子の話からよく知ることができます。放蕩息子が罪を悔い改めた時、父親は彼を抱いて迎えました。このことは完全な罪の赦しを意味していました。それだけではなく、父なる神は、悔い改めた放蕩息子に上等の着物を与え、召使いとしてではなく、もとおりの息子として前と同じ権利と自由を与え、彼のために盛大な祝宴を開かれたのです。

大切なことは、神と人間との壊れた関係が回復されることです。しかし人間は、自分の行ないによっては、決してこの状態に達することができません。

人は律法の行ないによっては義と認められず……律法の行ないによって、義と認められるものは、ひとりもないからです。

(ガラテヤ 2・16)

律法によって神の前に義と認められる者が、だれもないということは明らかです。

(ガラテヤ 3・11)

神は、人間の行ないの結果としてではなく、イエス・キリストを信じる信仰によって、義を提
供なさっておられるのです。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことを聞いて、わたしを遣わ
した方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っ
ているのです。

(ヨハネ 5・24)

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この
方にある、神の義となるためです。

(Ⅱコリント 5・21)

主イエスを自分の救い主として受け入れる者は、救いと赦しと、永遠のいのちを与えられるの

です。

大いなる贖いの日のとき、イスラエルの全体は、自分たちの罪がことごとく消しさられ、神との和解を与えられることを確信していました。パウロは、次のように告白することができました。

神が、その愛する方によって私たちに与えてくださった恵の栄光が、ほめたたえられる
ためです。
(エペソ 1・6)

主イエスは、私たちひとりひとりがパウロと同じように告白することを望んでおられます。

8 恵みによって信者に与えられる神の義

ローマ人への手紙

3章27節から31節まで

I なぜ神は御自身の義を提供なさることができるか

血潮の代価が支払われたゆえ

II 神が罪人に義を提供することができるための条件は何か

イエス・キリストのみもとに行くこと

III 義の結果は何か

1 神の義を誇ることはできない

2 信仰の道が律法に抵触するものか

私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。(エペソ1:7)



前回で私たちは、「ヨベルの年」について聖書から学びました。レビ記25章と27章には、ヨベルの年について記されています。安息の年と同様に、ヨベルの年には種をまいたり刈り取ることが禁じられており、その年には休まなければならないことが記されています。この場合、人間だけでなく土地もまた休ませなければなりません。今日では、土地を休ませるところか、反対に人工肥料や農薬など人間が作ったものを用いても土地から収穫物を少しでも多く取ろうと一生懸命になっています。これもまた、現代人が昔の人たちよりも健康でなくなったことの一つの原因になっているようです。

七年目ごとに種まきや収穫物の刈りとりを止めて休むことが、イスラエルでは習慣となっていました。それは神の御心だったからです。この神の戒めを忠実に守ってそれを実行するならば、主の豊かな祝福にあずかることができたわけですが、七年目ごとに休むことができるためには、その前の年に、二年分の収穫がなければならなりません。

安息の年は、七年目ごとに巡ってきますから、ちょうど四十九年目も安息の年であり、その翌年の五十年目はヨベルの年となり、二年間種をまくことも収穫することも休まなければならなかったわけです。これはイスラエルの民にとっていわば試練の年であり、これを通してイスラエルの民は主により頼むことを学ばなければならなかったのです。すなわちイスラエルの民は、このように目に見えるものから目を離し、完全に主により頼まなければならなかったのです。

土地は神の定めに従って正しく分割され、それぞれの所有となった土地はかつてに売買したり譲り渡したりすることを許されませんでした。しかしながら、貧しいために土地を売らなければ

ならず、自分の土地を手放してしまったような人にも、このヨベルの年には、もとどおり以前自分が所有していたものを返されるという特別の定めがあったのです。したがって、土地の売買が永久に続くということはなく、定められた期間には、必ず始めの状態にもどるようになっていたわけです。そして奴隷もまたヨベルの年には解放されました。

しかし、いったい何のためにヨベルの年があったのでしょうか。主は、自分の所有物や自由を失ったイスラエルの民に、もう一度もとどおりの状態に立ち返ることができるようにとヨベルの年を定められたのです。イスラエルの民はだれでも一つの逃れ道、解放、そして新しい出発があることを知っていました。ヨベルの年はまさに主の恵みの年でした。

神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕われ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ、すべての悲しむ者を慰め、シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである。彼らは、義の檜の木、栄光を現わす主の植木と呼ばれよう。

(イザヤ 61・1-3)

このヨベルの年に与えられる本当の開放は、主イエスとその救いによって始まったと言えます。ですから、主イエスはナザレでこのイザヤ書の部分をお読みになられたのです。

「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わた

しに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」イエスは書を巻き、係りの者に渡してすわられた。会堂にいるみな目の目がイエスに注がれた。イエスは人々にこう言つて話し始められた。「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。」

(ルカ 4・18～21)

私たちも今日、ヨベルの年に生きています。ローマ人への手紙1～3章によれば、そこには逃れ道のない状態、人間の罪と墮落のことが歴然と記されていますが、3章21節になつてはじめて「しかし、今は」という言葉が出てきます。「しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によつてあかしされて、神の義が示されました」。

今は、恵みの時、今は、救いの日です。

(Ⅱコリント 6・2)

とパウロは言っております。

そこで、今日学ぶ3章27～31節までの主題は、「恵みによつて信じる者に与えられる神の義」とすることができま

す。それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。それはすでに取り除かれました。

どういう原理によつてでしょうか。行ないの原理によつてでしょうか。そうではなく、信

仰の原理によつてです。

人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるというのが私たちの考えです。それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人にとつても神ではないのでしょうか。確かに神は、異邦人にとつても、神です。神が唯一ならばそうです。この神は、割礼のある者を信仰によつて義と認めてくださるとともに、割礼のない者をも、信仰によつて義と認めてくださるのです。

それでは、私たちは信仰によつて律法を無効にすることになるのでしょうか。絶対にそんなことはありません。かえつて、律法を確立することになるのです。(ローマ3・27-31)

この箇所では三つの問いが問題とされています。

I 何ゆえ神はご自身の義を提供なさることができるか

II 神が罪人に提供なさる義が実現する条件は何か

III 義の結果は何か

I 何ゆえ、神はご自身の義を提供なさることができなのか

神は、全知全能であるがゆえに、ご自身の義を提供なさることができなのでしょう。罪に対しては、なんらの罰も要求なさらないのでしょうか。

「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができないのです」という23節

の御言葉は、特にキリスト以前に生きていた人々に関して言われています。またこの御言葉は、律法と神に近づくすべを知っていたユダヤ人の民にもあてはまることは言うまでもありません。ヘブル人への手紙の著者が言っているように、動物の血を流すことによつては、本当の意味での罪を取り除くことはできないのです。

雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。

(ヘブル10・4)

かつてのイスラエルの民が、主に近づくために動物の血を流したことは、外面的、形式的な罪のきよめを意味してはいましたが、本当の意味での根本的な罪の赦しとはなっていないからです。

それではいったい、罪の問題はどのようにして解決されたのでしょうか。3章25節の後半にその答えが記されています。「今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもつて見のがして来られた」。すなわち、神はイエス・キリストの血が流されるという本当のきよめの道が開かれるまで、罰することを行ななかつたのです。流されたイエス・キリストの血は、人間の罪のためのなだめの供え物を意味しています。「あがない」という言葉は、一定の代価を支払って解放することを意味しています。その当時、奴隷市場で奴隷を買いとる場合にも「あがなう」という言葉を用いました。そのみならず、買いつた奴隷を全く自由な状態においてやることもこの「あがない」という言葉の中に含まれています。

そのようなあがない(＝贖い)は、主イエスが十字架におかかりになることによつて成就され

ましたが、それは金や銀などによるのではなく、主ご自身の尊い血潮によってなされたのです。贖いとは、まず支払われた代価による解放、罪の債務からの解放、また罪の力からの解放、そして新しいのちに至るための解放を意味しています。

イエス・キリストは、単になだめの供え物となっただけでなく、贖いそのものです。このことからわかるように、神は、罪を放っておかれるのではなく、罰を下さなければならなかったのであり、しかも御子イエス・キリストの上に下され、その結果十字架における死とならざるをえなかったのです。

ご自身のいのちを犠牲にすることによって、主イエスは、尊い代価を支払ってくださいました。救いにいたる道は、主イエスの血を信じること以外にありません。神は、主イエスがなしてくださいましたことのゆえに、義としてくださるのです。神は、黒を白と言ったり、不義なる者を義であるなどと言うようなことは絶対になさいません。神は、御子イエスが尊い代価を支払って贖いを成就なさり、そのために尊い血潮が流されたゆえに義としてくださるのです。全人類の債務が支払われ、贖いが成就されたゆえに、神は罪をお赦しになるのです。

Ⅱ 神が罪人に義を提供することができるときの条件は何か

この節から明らかのように、人間は功や律法の行ないによっては、決して義とはされないのです。義とは徹頭徹尾神の恵みによるものであり、しかもそれは、罪人に対する神の愛、あわれみによるまったく自由な贈り物です。ですから、人間がしなければならなかった一つのことは、主

イエスのみもとに行くことです。というのは、主イエスが人類に対するなだめの供え物となられたからです。

救いに至る道を「歩むこと」、そして、提供された贈り物を「受け取ること」、このことが信仰であると聖書は言っているのです。

神は、全く逃れ道のない絶望的な状態の中にも入ってこられ、新しい逃れ道を作ってくださいましたのです。主イエスの流された血潮によって、救いに至る新しい道が開かれました。私たちはこの道を歩んでいるでしょうか。私たちはイエスによってなされたことを、本当に信じているでしょうか。「信仰によって」主の贖いの御業が自分自身のものとなるのです。

主イエスによって成就された贖いは、すべての人に提供されるべき贈り物です。しかしながら、どうして多くの人は、この贈り物を受けとうとしないのででしょうか。その理由には、

第一に、多くの人は何が自分のものとならなければならないかを「知ろうとしない」ことがあげられます。

第二に、事実成就されたことがらを「信じようとしなない」ことも考えなければなりません。

第三に、救い、贖いを「必要としていない」ことも大きな妨げとなっています。

第四に、提供された素晴らしい贈り物を「受けとうとしなかった」ことも大きな原因です。信仰とは一体何でしょうか。信仰とは、備えられた道を歩むこと、そして提供された贈り物を受け取ることです。

「行ないによる道」は、自分の努力によって神の前に義となろうとする試みであって、この道

は、滅びに至るものです。

これに対し「信仰による道」は、提供されたすばらしい贈り物を素直に受け取り、主によって成就された贖いを信ずることであって、この道は永遠のいのちに至るものです。

つまり、一方は自分の力で義にいたろうと一生懸命もがいているのに対し、他方は主によって成就された贖いを信じ、受け入れたため、喜びの声をあげているのです。

ここで注意しなければならないことは、信仰とは、救いに至る道にすぎず、救いそのものではありません。贈り物を受け取ることによって、初めてその贈り物が自分のものとなるのです。備えられた道を歩むということは、自から道を開くことではなく、あくまでもすでに開かれた道を歩んでいくことにすぎません。信じることによって自分を救うことはできませんが、主イエスのなされた救いが自分のものとなるのです。ですから、パウロは27節で、「私たちの誇りはすでに取り除かれた」と言っているのです。

提供された贈り物を受け取ること、あるいは備えられた道を歩むこと、すなわち信じることは、決して私たちの誇りとなるものではなく、ただ神のなさった恵みなのです。

28節でパウロは、人が義と認められるのは律法の行ないや倫理、道徳、あるいは宗教などによるのではなく、ただ信仰によるのであるとはっきり言っています。ここで「人」と記されているのは、すべての人、ひとり残らずという意味です。人間はだれでもすべて罪人です。しかし、人は信頼あるいは信仰のゆえに義とされるのです。

ここに一つの良いたとえがあります。ひとりの狩人が多くの犬をつれて鹿狩りをした時のことです。獵犬は一頭の鹿を嗅ぎ出し、四方八方からその鹿を取り巻いてその輪をじりじりとせばめていきました。そして、狩人のちょうど目の前の撃ちやすいところへと鹿を追いつたのです。このようにして鹿は狩人の鉄砲の狙いの中へと追い出され、まさに狩人が引き金を引こうとしたとき、その鹿はもはや逃れることができないのを知って、無駄な抵抗をやめ、狩人の前に身を投げ出したのです。そして、懇願するような眼で狩人を見上げ、すべてを狩人にゆだねました。これを見た狩人は非常に心を打たれ、この鹿をあわれに思い、犬を自分のところに呼びよせて、この鹿を逃がしたやっただけのことです。

私たちの場合も、これと同様です。神の怒りを受けるべき人間は、神から逃げようとして逃げることはできず、もはや逃げ道を失ったとき、あの鹿と同じように神の御前に身を投げ出し、あわれみを乞うほか何もできません。しかしそのとき神は、私たちをあわれみ、大いなる恵みを与えてくださるのです。すなわち、その人は神の罰、債務、罪などあらゆるものから解放されるのです。

救いに至る道は、神の提供された贈り物を受け取る信仰です。この信仰は、神の御言葉の上にしっかりと立っているものです。

Ⅲ 義の結果は何か

ここで、二つのことをよく考えてみましょう。第一は、神によって義とされた者は、決してそ

れを誇ることができないということです。本当の謙遜こそ義とされた者のしるしです。

第二は、パウロが31節で、「私たちは信仰によって律法を無効にすることになるのでしょうか」と言っていることです。すなわち、パウロが問うているのは、信仰の道が律法に抵触するものであるかどうかということです。この問いに対してパウロは「否」と答えています。この二つのものは決して対立しあうものではなく、一つのものであると言うのです。すなわち、パウロは、罪人は罰せられなければならないこと、また罪人に対する判決が下されなければならないことを明らかにしています。それが同時に、この罰と判決が罪人の上ではなく、その代理人の上に行われたことを明らかにしているのです。

3章19節を見ると、すべての人が神のさばきに服すべきことが記されています。すなわち、義人はいない、ひとりもないということです。しかし、30節には、神は義と認めてくださると記されています。人間は義となることはできないゆえに、神はすべての人間に神の義を提供しておられるのです。

いったいだれが義なる者でしょうか。神の言われていることを素直に認め、主の提供された贖いを信じ受け入れる者だけが、義とされるのです。しかし、神の提供なさる贈り物は、決して強制されるものではありません。私たちが信じようが、信じまいが、それは自由です。このことを信じないならば、私たちは罪に定められ、義とされず、永遠の滅びに至るほかありません。もしも信じるならば、債務が支払われ、主ご自身の義によって永遠のいのちを持つことができます。ですから義の結果は決して誇りではなく謙遜であり、律法は無とならず、信者の生活によつ

て成就されるのです。

愛は律法を全うします。

(ローマ 13・10)

主イエスを愛するがゆえに、主の御心を行なうことは義とされたことの結果です。

救いに至る道が開かれました。

神の贈り物はすでに提供されています。

あなたは、この道を歩み、主によつて成就された贖いという贈り物を受け取る備えができていますか。

私たちはヨベルの年、すなわち、恵みの時を生きています。本当の解放、贖い、そして新しい始まりが存在しています。パウロはこのことを体験的に知り、大喜びで次のように言っています。こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

(ローマ 8・1)

9 信じるとはどういうことか

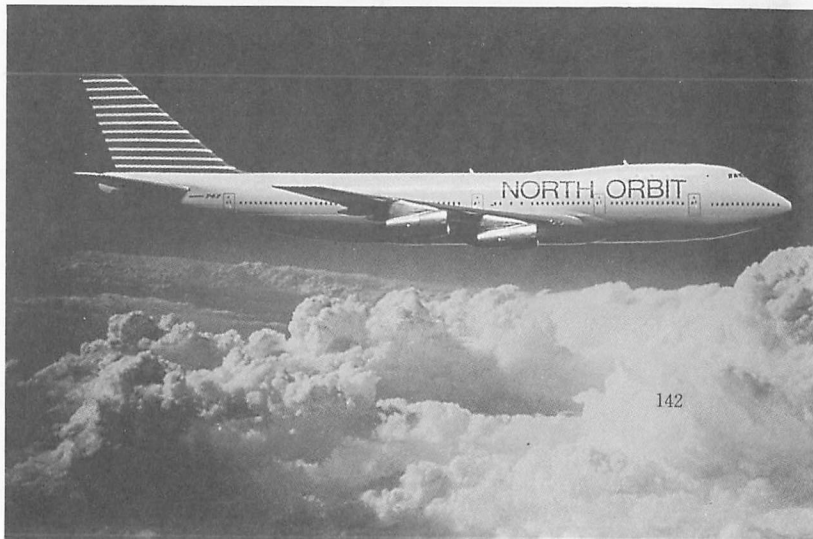
ローマ人への手紙

4章1節から25節まで

神によって義とされる人はどんな人か

- I アブラハムのように御言葉を決して疑わない者
- II ダビデのように御言葉に徹頭徹尾より頼む者
- III 私たちはいったいどうなのか

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。
それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。(エペソ2・8)



前回は、ローマ人への手紙3章において、神の前に義とされることについて学びました。自分の人間的な努力によって義とされようとする試みは、全く価値のないものであり、神の前には認められません。人間はすべて神の前に債務者であり、その債務はあまりにも大きいため、人間の力によっては支払うことができません。3章は、新しい道、神によって備えられた道を示しています。

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

(ローマ3・24)

また3章では、神がくださる贈り物を素直に受け取ることが非常に大切であること、すなわち信仰によって受け取ることの大切さを明らかにしています。

人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。

(ローマ3・28)

今日これから学ぶ4章の内容は、次のようにまとめることができます。

アブラハムを通して、またダビデを通して、「信じるとは一体いかなることか」あるいは、「神によって義とされる者はいかなる者か」ということです。

それでは、肉による私たちの先祖アブラハムのばあいは、どうでしょうか。²もしアブラハムが行ないによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます。しかし、神の御

前では、そうではありません。聖書³は何と言っていますか。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義とみなされた。」とあります。働く者のばあいに、その報酬は恵みでなくて、当然支払うべきものとみなされます。何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。ダビデもまた、行ないとは別の道で神によって義と認められる人の幸いを、こう言っています。「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。主が罪を認めない人は幸いである。」

それでは、この幸いは、割礼のある者にだけ与えられるのでしょうか。それとも、割礼のない者にも与えられるのでしょうか。私たちは、「アブラハムには、その信仰が義とみなされた。」と言っています¹⁰が、どのようにして、その信仰が義とみなされたのでしょうか。割礼を受けてからでしょうか。まだ割礼を受けていないときでしょうか。割礼を受けていないときではなく、割礼を受けていないときにです。彼は、割礼を受けていないとき信仰によって義と認められたことの証印として、割礼というしを受けたのです。それは、彼が、割礼を受けないままで信じて義と認められるすべての人の父となり、また割礼のある者の父となるためです。すなわち、割礼を受けているだけではなく、私たちの父アブラハムが無割礼のときに持った信仰の足跡に従って歩む者の父となるためです。¹³というのは、世界の相続人となるという約束が、アブラハムに、あるいはまた、その子孫に与えられたのは、律法によってではなく、信仰の義によったからです。¹⁴もし律法による者が相続人であるとするなら、信仰はむしくなり、約束は無効になってしまいます。律法¹⁵は怒り

を招くものであり、律法のないところには違反もありません。

その¹⁶ようなわけで、世界の相続人となることは、信仰によるのです。それは、恵みによるためであり、こうして約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持っている人々にだけでなく、アブラハムの信仰にならう人々にも保証されるためなのです。「わたしは、あなたをあらゆる国の人々の父とした。」と書いてあるとおりに、アブラハムは私たちすべての者の父なのです。この¹⁷ことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、「あなたの子孫はこのようになる。」と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだが死んだも同然であることと、サラの胎の死んでいることを認めても、その信仰は弱りませんでした。彼は、²⁰不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。

だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。²³しかし、「彼の義とみなされた。」と書いてあるのは、ただ彼のためだけでなく、また私たちのためです。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義とみなされるのです。²⁵主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。

(ローマ4・1―25)

そこでこれから、信じるとはどういうことかというこの主題について4章を三つに分けて考えてみましょう。

信じるとはどういうことか

I アブラハムを通して

II ダビデを通して

III 私たちについて

I アブラハムを通して

疑いもなく、アブラハムは信仰によって義と認められた人でした。

これらの出来事の後、主のことが幻のうちにアブラムに臨み、こう仰せられた。「アブラムよ。恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きい。」そこでアブラムは申し上げた。「神、主よ。私に何をお与えになるのですか。私にはまだ子がありません。私の家の相続人は、あのダマスコのエリエゼルになるのでしょうか。」さらに、アブラムは、「ご覧ください。あなたが子孫を私に下さらないので、私の家の奴隷が、私の跡取りになるでしょう。」と申し上げた。すると、主のことが彼に臨み、こう仰せられた。「その者があなたの跡を継いではならない。ただ、あなた自身から生まれ出て来る者が、あなたの跡を継がなければならない。」そして、彼を外に連れ出して仰せ

られた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

(創世記15・1―6)

ローマ人への手紙4章2―4節には、ふたたび二つの正反対の道、すなわち行ないによる道と信仰による道、あるいは行為による道と信頼による道が記されています。私たちはアブラハムの生涯を通して、彼が良い行ないをしたことを知っています。例えば彼は、カルデヤから出たときに自分のふるさとや友人を捨てて、神の命令に従いました。また彼は、カナンの地に入ったとき、すぐに祭壇を築き主の御名を宣べ伝えました。また彼は、良い地を選ぶか、劣る地を選ぶかという選択に直面したとき、自分を全く無にして良い地をおいのロトに譲ったのでした。おいのロトは非常に欲が深く、自分中心の性格を強く持っていました。あるときケドルラオメルというエラムの王に敗戦した結果、捕えられてしまいました。しかしロトを救うために、アブラハムは彼に戦いをいどみ、大きな勝利をおさめてロトを救いだすことに成功しました。その時、ソドムの王がアブラハムにすべての財産や戦利品などを与えようとしたが、それに対してアブラハムは「私は何ひとつ取らない」と主に誓って言ったのです。

この二、三の例を見ただけでも、アブラハムが多くの良い行ないをしていたことがわかります。そのことを通して、ロトとソドムの王はアブラハムの偉大な人格に深い感銘を覚えたに違いありません。しかしアブラハムは、神の前に義とされるためにこれらの良い行ないをしたのではなく、

神と一つに結びついていたことの結果として自然に出てきたことであつたのです。主イエスは次のように言われました。

このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。
(マタイ 5・16)

そしてヤコブも「実りのない信仰は死んだものです」と言っております。しかし、いかに良い行ないであつたとしても、それは神に義とされるためには何の役にも立ちません。アブラハムは義とされるために良い行ないをしたのではなく、反対に義とされた結果良い行ないをしたのです。なぜアブラハムが義と認められたのかということについて、いくつかの点を考えてみましょう。義とされるにあたって、決定的なことは何でしょうか。それは、アブラハムの信仰ではなく、神の御言葉だつたのです。信仰は、神の御言葉に基いているものです。ただ、神がお語りになるときのみ、信仰が土台を見い出すのです。神の御言葉のない信仰とは、いわば土台のない家のようなものです。アブラハムは、いろいろな神の約束の御言葉を与えられました。

あなたの子孫はこの（星の）ようになる。
(創世記 15・5)

ただ、あなた自身から生まれ出て来る者が、あなたの跡を継がなければならない。

(創世記 15・4)

ところで、約束は、アブラハムとそのひとりの子孫に告げられました。神は「子孫たちに」と言つて、多数をさすことはせず、ひとりをして、「あなたの子孫に」と言つておられます。その方はキリストです。

(ガラテヤ3・16)

創世記12章によると、地上のすべての民族がアブラハムに約束されたイエス・キリストによって祝福されることが明らかです。

アブラハムは、神の語られた御言葉を「聞いた」だけでなく、それを「見た」のです。創世記15章5節によれば、アブラハムが主の言葉に従つて外に出て天を見上げたとき、彼の子孫が天の星の数のようにおびただしくなることを約束されたのです。アブラハムは、ただ単に神の約束を聞いただけでなく、神の救いの道を見ました。アブラハムは救い主なるイエス・キリストを見ました。そしてそのイエス・キリストによつて救われた人類を見ました。救われた人の数は大空の星のように多いと聖書は言っています。

アブラハムは、神の御言葉に対していかなる態度を取つたのでしょうか。彼は御言葉に対して拒むことをせず、それを受け入れ、御言葉をないがしろにせずそれをよりどころとしました。もしもアブラハムが目に見えるものを見ていたならば、すべてが不可能に思われたことでしょう。彼とサラはひとりの男の子をさすけられると神に約束されましたが、このことも、人間的に考えたらば、あらゆる点で不可能だったのです。人間の理解力、自然の法則、科学的な知識から見て、彼の妻とすべての他の人々はそれが不可能であると答えたことでしょう。状況はまったく望

みのないものでした。しかし、信仰は、そのような目に見えるもの、人間の理性に対して、このことが可能であると断言しているのです。理性に対して反対したアブラハムは「神の言葉は真理である」と確信していました。アブラハムがより頼んだ神は、ちっぽけなものではなく、全知全能なる神なのです。

9～12節までは、おもに割礼のことが述べられています。割礼とは神に選ばれた民イスラエルに属している者のしるしです。多くのユダヤ人は、そのことを誇りに思っていました。彼らは、外側のしるしである割礼があればそれだけで神に属する者であり、それだけで十分であると思っていたのです。しかしそれに対して、パウロはそれが間違っているということを2章28～29節で明らかにしています。

割礼を受けているか受けていないかは、大事なことはありません。大事なものは新しい創造です。

(ガラテヤ6・15)

アブラハムは、いつ割礼を受けたのでしょうか。神によって義とされる前ではなく、後に割礼を受けたのです。11節によれば、割礼とは義と認められたことの証印です。正しい順序は次のとおりです。まず、第一に信仰。第二に、その結果としての義認、すなわち義とされること。そして第三に、そのしるしとしての割礼です。

私たちがここで考えてきたのは、神によって義とされる者はどのような者か、という問いでした。今まで見てきたように、これに対する答は、生き生きとした信仰を持っている者、たとえば

アブラハムのような者です。

アブラハムは、自分に御言葉を与えてくださった神を決して疑いませんでした。彼は心から神を信頼していました。悪魔は今日もエデンの園のときと同じように「本当に神がそう言ったのですか」と言って惑わそうとしています。神を信じる者は、神の御言葉ひとつひとつを本当に信じるのです。17節にはアブラハムが「死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方」を信じていたことが記されています。私たち人間には死んだもののように思われ、また全く望みがないように思われる場合であっても、主に信頼するならば、不可能が可能となるのです。18節には、アブラハムが望みえないときに望みを抱いて信じた、とあります。アブラハムは意識的に目に見えるものから目をそらし、目に見えない主に目を注いでいたのです。これこそ、本当の信仰です。

本当の信仰とは、自分や他人から目をそらし、神が必ず約束をお守りになることを確信することです。

また、本当の信仰は、いろいろな攻撃や試練によってかえって強められるものです。

21節にはこうあります。「神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。」神は約束されたことを成就する力を持つておられるので約束を守られる、ということを知っている者は幸いです。

本当の信仰は、神に栄光を帰するものです。私たちはいったいいかにして神に栄光を帰するのでしょうか。神を信じ、その御約束を疑わないならば、神に栄光を帰することができるのです。

アブラハムの信仰は、幼子のような信仰でした。神を知らない者は、アブラハムのように幼子のような信仰のことを幼稚な考えであると言います。アブラハムは死んだも同然な自分の体を見ず、また神の約束を疑うようなこともしませんでした。

アブラハムは、神が見たものを見ました。

彼は、約束された子孫を見ていました。

彼は、創造主なる神を見上げて、この神を信頼することによって、義とされたのです。

Ⅱ ダビデを通して

神によって義とされた者の第二の代表者は、ダビデです。6―8節にかけてはダビデのことが記されています。私たちは、ダビデが深い罪を犯したこと、すなわち姦淫を犯し、殺人を犯したことを知っています。神は、預言者ナタンをダビデのもとへ遣わしました。預言者とは神の言葉を取りついで言い表わす者です。預言者ナタンは、罪を犯した者を罰するためではなく、回復させるために遣わされたのです。預言者によって与えられた御言葉は、ダビデに大きな重荷を負わせることになりました。

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私

の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。

(詩篇 32・1-5)

ダビデはなぜ主が自分の罪を赦してくださった、という確信を持つことができたのでしょうか。ダビデは、神の御言葉に耳をかたむけ、それを自分のものとしたのです。

主もまた、あなたの罪を見過してくださった。

(Ⅱサムエル 12・13)

姦淫と殺人という罪は非常に大きい罪でした。こんな大きな罪を神が赦したという言葉は、本当に真理なのでしょうか。ダビデは、この御言葉を疑わずに信じたのです。ですから、彼は喜びと平安と確信を持つことができたのです。神によって義とされる者はどのような者でしょうか。それは、ダビデのような者です。ダビデは神の御言葉に徹頭徹尾よりたのみました。ですから神は、彼の罪を見過してくださったのです。

Ⅲ 私たちはいったいどうなのか

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

(ローマ 3・24)

この御言葉は、私たちの罪が赦されるために主が死んでくださった事実を明らかにしています。

主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。

(ローマ4・25)

この御言葉は、私たちが義と認められるために主イエスがよみがえられた、と言っています。アブラハムとダビデは、主の御言葉を信じました。ですから、彼らは罪を赦され、義と認められたのです。御言葉は、私たちの罪と債務がすべて支払われていると言っています。私たちはこの事実を信じているでしょうか。それとも信じないのでしょいか。私たちは、御言葉を信じるか、それとも目に見えるものだけを見るか、のどちらかです。多くの人は、救いの喜びと救いの確信を持ちたいと願っています。しかし、彼らは良い生活をするによって義とされようと一生懸命に努力するのです。他の人々は、自分が救われているという感じを持ちたいと思っています。24節には、アブラハムとダビデが義と見なされたというのは、私たちのためでもあって、彼らがひとつの良い見本を示したとあります。神はイエス・キリストにおいて、完全なる救いを成就してくださいました。救いはもはや備えられており、私たちはただそれを受け取りさえすればよいのです。大切なことは、御言葉に対して私たちがいかなる態度を取るか、ということです。私たちは、目に見えるもの、たとえば良い行ないとか、罪などというものを見ていないでしょうか。あなたが御言葉を信じ、より頼むならば、神が約束なさったこと、つまり罪の赦しと主の義を自分のものとする事ができるのです。「信じる者は持つ」、なぜなら「与えられる」からです。

アブラハムとダビデは、神の御言葉を完全な真理として受け取りました。これこそ、彼らが義

信じるとはどういうことか

とされたことの理由です。「私はあなたの罪を見過ごした」という神の御言葉に対して、あなたはいかなる態度を取られますか。アブラハムとダビデは神の御言葉を信じたゆえに義とされました。あなたも、主の御言葉を信じたいと思われませんか。

コロッセオの内部



10 与えられた義の祝福と富 (1)

ローマ人への手紙

5章1節から11節まで

- I 神との平和を持っていること
- 1 なぜ平安がないのか
- 2 いかにして平安を得るか
- 3 どこに平安を見い出すのか
- II 信仰によって恵みに導き入れられていること
- III 神の栄光を望んで大いに喜んでいること



私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の杯は、あふれています。
(詩篇23:5)

4章では、アブラハムやダビデの場合を通して、ただ信仰によってのみ義とされることを学びました。また、信仰の本質や種類、さらに信仰の働きが義とされた者においてどのように表われてくるかについても学びました。

5章には、義とされたことによって、信者の得る祝福について多くのことが記されています。この5章の主題は、「与えられた義の祝福と富」とすることができましょう。

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。

この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、

なおさらのことです。¹⁰もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。(ローマ5・1-11)

ある人は、信者に与えられる祝福というものが何か遠い将来のもののように思っていますが、聖書は現在豊かな富と祝福が与えられると言っています。

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。

(エペソ1・3)

このような、すでに与えられた霊的祝福のうちのいくつかがこの5章で記されています。そこで、主に三つの点について、これから一緒に学んでみましょう。

I 主イエス・キリストによって神との平和を持つていること

II 信仰によって恵みに導き入れられていること

III 神の栄光を望んで大いに喜んでいること

Ⅰ 主イエス・キリストによって神との平和を持つていること

神との平和とは、戦争の状態が終わり、平和の状態が来ることを意味しています。ここでは、平和の感情ではなく、平和の事実が重要な問題となります。人間は誰でも平和を求め、平和を必要としています。ところが、今日世界を見まわすと、政治的にも、経済的にも、社会的にも、家庭においてさえも、いたるところに争いや不和が見うけられます。このような外側の世界に表われている争いや不和は、心の中の状態が外側に表われてきているということを知らなければなりません。つまり言葉をかえて言うならば、人間ひとりひとりの心にある分裂や不一致というのが外側に表われてきているということにはかなりません。例えば、いろいろな変化や流行を追い求めるということは、心の中に本当の満足と平安がないことを証明しています。有名なゲーテは彼の全生涯において、二四時間本当に幸福だったことはなかったと言っています。なぜ人間はそのような満たされない状態にあるのでしょうか。その原因はまさに人間の心に本当の平和と平安がないということなのです。

悪者どもには平安がない。

（イザヤ 48・22）

悪者はその一生の間、もだえ苦しむ。

（ヨブ 15・20）

悪者は追う者もないのに逃げる。

（箴言 28・1）

ここで、新改約聖書が「悪者」と言っている者は、原語を見ると「神なき者」となっていることに注意しましょう。「神なき者」は本当の平安を持つことができません。しかし聖書は、すべての人間は神なき者であり、したがって平安のない者であると言っています。人間は、だれでも平安を必要としていますが、その平安を与える者は人間ではなく神であり、ただ神の恵みによるのです。

そこで、次に三つの質問について考えてみましょう。

- 1 なぜ、人間には平安がないのでしょうか
- 2 いかにして、人間は平安を得ることができるのでしょうか
- 3 いったいどこに、平安の土台があるのでしょうか

1 なぜ、人間には平安がないのでしょうか

まず考えられることは、良心の呵責から罪意識が生まれ、そのために平安がないということですね。

私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。

(詩篇32・3-4)

神、すなわち義なる裁判官のことを思うと、私たち人間には平安がなくなります。有名なフランスの思想家であるヴォルテールは、無神論者でしたが、あるとき友達にむかって「もしも神がいるとしたら、それは本当に恐ろしいことだ」と言ったそうです。人間は死後裁きを受けるため、人間には平安がないと聖書は言っています。

さらに、平安がない状態の原因を考えてみると、この世のさまざまなことがらに対する思い煩いをあげることができるでしょう。また満たされない願いなども原因の一つになっていることでしょう。このように、生まれつきの人間には本当の喜びと平安がないのですが、そのような絶望的な人間に対して本当の平安を与えてくださる方は、神以外におられないことを知らなければなりません。

2 いかにして、平安を得ることができるか

ただ、生けるまことの神おひとりだけが、平安をお与えになることができます。というのも、神は平和の神とも呼ばれているからです。そして神は、イエス・キリストを通して私たちに平安をお与えになるのです。それはイエス・キリストが平和の君と呼ばれているからです。

キリストこそ私たちの平和であり：

（エペソ 2・14）

イエスは神との贖いを成就してくださいました。主イエスは、神に対する敵対関係を取り除いてくださいました。私たち人間が、神から離れている罪、すなわち債務は、主イエスの尊い犠牲によって完全に取り去られたのです。平和は主イエス・キリストを信ずることによってのみ与え

られるものです。信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています」と5章1節にある通りです。

私たちが神との平和を持っているということは、過去形で書かれているのではなく、現在形で書かれていることからわかるように、現在私たちは神との平和を持っていると聖書は言っています。主イエスを信ずる者は、いま神との平和と贖いを持っていることを信じ確信することを許されているのです。神はもはや怒りを持っておられず、主イエスの犠牲によって完全なる贖いと和解が成就されているのです。もはや何ものも神との結びつきを引き離すことはできません。

主イエス・キリストは、あらゆる問題の解決です。そして、主イエスは、最大の問題である罪と債務をも解決してくださったのです。神の前に私たち人間は、ただ単にあわれな乞食であるのみならず、途方もない債務を負っているものです。私たちの状態は、全く望みのないものでした。ですから、主イエスがこの世に遣わされたのです。そして、主イエスは、贖いと和解を成就してくださり、主イエスを信ずる者は主の流された血潮により何のいさおがなくても洗いきよめられ、汚れのない者としていただけるのです。主イエスこそ神との平和そのものです。この神との平和は、私たちがそれを体験的に知るはるか以前に現実となったのです。主イエスは、私たちをかぎりなく愛し、私たちがまだ罪人であったとき、敵であったとき、神なき者であったときに私たちのために死んでくださったのです。8-9節によると、私たちは主イエスの血潮により義とされたゆえに「もはや罪人ではありません」。また10節によると、御子イエスの死によって神と和解させられたゆえに、私たちは「もはや敵ではありません」。そして、11節によると、私たちは今

や和解を受け入れたゆえに、「もはや神なき者ではありません」。信仰によって義とされるということは、私たちの人生における最大の転機です。一撃で私たちのすべての罪と債務が取り除かれるのです。啓示によって、私たちは主イエスの価値と十字架における大いなる贖いの御業を知り、さらに、自分の罪がことごとく赦されていることを確信するにいたるのです。この事実は、人間の理性によって説明することのできないものですが、私たちの心にしっかりとした不動の確信となることのできるものです。

義とされているとは、私たちと神との間には両者を分離する隔てがもはや存在しないことを意味しています。5章を見ると、主イエスの血潮によって義とされていることこそ、使徒パウロの喜びであり、歓呼であったことがわかります。パウロはいつも自分の罪と債務のことを思いましたが、それは、彼にとって決して重荷とはならなかったのです。主イエスが債務の問題を完全に解決してくださったゆえに、もはや債務は問題となくなってしまうたのです。主イエスを信じる者は義とされている。このことこそ、5章の一番大切な内容です。

ここで、注意しなければならないことは、何でもよいから信じれば救われる、というのではなく、ただ「主イエスを信ずる」ことによってのみ義とされるということです。イエス・キリストを信じる信仰の代わりとなるものは何ひとつありません。救う力のあるのは、ただ主イエスを信じる信仰だけです。イエスを信じる信仰は、私たちの人生をまったく変える力を持っているのです。主イエスを信じるということは、最初から最後まで主に信頼し、自分を捧げることにほかなりません。また、主イエスを信じるということは、主イエスとひとつになり、親しい交わりを持

つことでもあります。このように主イエスを信じるものは、義とされ、神との平和を与えられます。主イエスが、私たちの代わりに罪に対する罰を受けてくださったゆえに、もはや私たちの罪を訴える根拠がなくなってしまったのです。

3 いっただいどこに、平安の土台があるのでしょうか

この平安とは、決して感情ではありません。感情というものは、誤った方向にそれる可能性があるため、感情に身をゆだねることは大変危険であると言わなければなりません。平安の土台は、神との関係が新たに回復されたという確信にあります。私たちが罪を告白し、イエス・キリストを自分の救い主として受け入れるならば、罪は赦されると聖書は語っています。私たちはこの御言葉にしっかりと立つとき、確信を与えられます。従って、確信の土台は私たちの理解や感情ではなく、神の御言葉にほかなりません。そして、平安の土台は、良心の呵責にさいなまれることなく、また訴えられることもないことにあると言えましょう。平安の土台は、私たちが本当に主に従っていききたいという意志にもあります。人間の自分勝手なわがままは、不和と不一致をもたらす大きな原因です。しかし、そのような自分勝手なわがままが支配され、小さくなってゆくにつれて、ただ主にのみ仕え、主にのみ従ってゆきたいという意志が心を占めるようになるのです。

地上では、あなたのほかに私は誰をも望みません。

(詩篇 73・25)

神との平和を持っている者は、もはや死を恐れることはありません。それは、なぜかということ、完全な平安のうちにやすらうことができるからです。この神との平和は、絶えず移り変わるよう

なものではなく、決して変わることがありません。またこの平安は、私たちの魂が感じとるようなものではなく、主イエスが私たちの罪と債務をことごとく取り去ってくださったという事実そのもののうちにあります。

「神との平和」は、主イエスの十字架において現実となりました。

「神との平和」とは、一回かぎりのものであり、永遠に失われることのないものです。けれども、それに対して「神の平安」は失われる可能性があるものです。

そうすれば、人のすべての考えにまざる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守ってくれます。

（ピリピ 4・7）

キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。

（コロサイ 3・15）

もし、私たちが自分勝手な道を行くならば、この「神の平安」は失われてしまいます。しかし、ゴルゴダにおける贖いの御業は「神との平和」であり、私たちがどうあろうとも、いつも変わることがありません。

Ⅱ 信仰によって恵みに導き入れられていること

このことは、つまり絶えず主の御臨在に近づくことができる、ということです。ひとたび罪を赦された者は、もしかしたら私はまた罪を犯してしまうのではないかという不安を抱くかもしれ

ません。私たちは、再び望みのない状態、人間的な虚しい努力に身をゆだねるために贖われたのではありません。罪と債務の後に出てくる問題は、新しいのちの形成ということです。私たちは、いくら義とされても、自分の力で自分を新しく造り変えることはできません。しかし、主イエスは、私たちに迫り私たちを脅かすすべてのものよりも大いなるお方です。豊かないのちが約束されているのです。主の恵みによって、私たちは、すべてのものに打ち勝つことができるのです。ではいったい、恵みとはどのようなものでしょうか。恵みとは、律法と全く反対のものです。

律法は、人間から義を要求しますが、

恵みは、私たちにイエス・キリストの義を働かしに与えてくださいます。

律法は、良い行ないを要求し、常にモーセを指し示しますが、

恵みは、主イエスを指し示し、ただ信仰のみを求めるのです。

律法は、主の祝福を功によって得ることを要求し、

恵みは、働かしにイエス・キリストにあつて祝福を与えてくださることです。

つまり、恵みとは、働かしに与えられる神の贈り物にほかなりません。この恵みは、罪人として主イエスのみもとに来る人すべてに与えられるのです。この恵みは、信者の全生涯を担っているのです。ですから5章2節には、「いま私たちの立っているこの恵み」という表現が使われているのです。信者の全生涯は、初めから終わりまですべてこの恵み以外の何ものでもありません。「悔い改め」は、神がお与えになった恵みです。

人々はこれを聞いて沈黙し、「それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお

与えになったのだ。」と言って、神をほめたたえた。

（使徒 11・18）

「信仰」が神からの賜物、つまり恵みであることも記されています。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によつて救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

（エペソ 2・8）

「奉仕」もまた、神からの賜物、すなわち恵みです。

私が、異邦人のためにキリスト・イエスの仕え人となるために、神から恵みをいただいているからです。

（ローマ 15・16）

「成長」もまた、主イエスの恵みであることがわかります。

私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。

（Ⅱペテロ 3・18）

苦しみを受けながらも「忍耐」することは、神の賜物、すなわち恵みです。

人がもし、不当な苦しみを受けながらも、神の前における良心のゆえに、悲しみをこらえるなら、それは喜ばれることです。

（Ⅰペテロ 2・19）

「与える」ことも、神の恵みです。

さて、兄弟たち。私たちは、マケドニアの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。

(Ⅱコリント 8・1、2)

イエス・キリストが再び来られるとき、私たちが「主の御姿に似たものと変えられること」もまた、神の恵みであることがわかります。

ですから、あなたがたは、心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現われのときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。

(Ⅰペテロ 1・13)

私たちは、ただ単に信仰生活の初めのときだけでなく、全生涯にわたって、神の恵みを体験することができなのです。

恵みとは、何か漠然としたものではなく、イエス・キリストにおいて具体化されたものです。すべてをこの主イエスにゆだねることは、本当にすばらしいことです。主イエスは、すべてをお見通しになり、御自分の計画の内にいっさいを導いておられます。しかし、これは決していわゆる宗教によって与えられるものではなく、ただ主イエスによってのみ与えられるものです。

主イエスは比類のないお方です。主は、御自分の御計画を遂行する力を持っておられます。大

いなる忍耐と愛を持って、私たちひとりびとりに配慮をしておられるのです。主の目的は、主を信ずる者が、主の御姿に似た者に造り変えられることです。「私たちは恵みの中に立っている」とパウロは言っています。私たちに對して注がれる恵みは、三つの泉から、あるいは、三つの管を通じて流れてくると言えます。

第一に、主との交わりであり、祈ることです。

第二に、御言葉に親しむことであり、聖書を読むことです。

第三に、信者同士の交わりであり、集会を大切にすることです。

「私たちは恵みのなかに立っている」ということは、すなわち神の恵みが罪よりもはるかに大いなるものであることを意味しているのです。

「私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。」

（Ⅱテモテ2・13）

主の恵みは、永遠に変わることがありません。主イエスとその恵みは、ほかの何ものにも比べることができない比類のないものです。しかし残念ながら、信者のなかには成長しないで同じところをいつまでも足踏みしている人がいます。そのような人達は恵みの中に立っておらず、恵みが自由に働くことを妨げて主を悲しませているのです。

私たちは、

「過去」に對しては、神との平和を持ち、

「現在」に對しては、恵みの中に立ち、いつも主の御前に近づくことができ、

「将来」に対しては、「神の栄光を望んで大いに喜んでいます」。

Ⅲ 神の栄光を望んで大いに喜んでいること

私たちはいままで「過去」の問題として罪と債務の問題を、そして「現在」の問題として新しいのちの形成の問題を考えてきました。そこで、これから「将来」の問題として、主の御手に守られている信者のことについて学んでみることにしましょう。

信者は次のように告白します。「私の過去は清算され、債務は支払われ、絶えず神との平安を与えられている。現在主の恵みが私の生涯を新しく造り変え、主が私のことを心配してくださる。将来に対して、来たるべき栄光のゆえに確信と喜びと崇拜が生じてくる」。

この来たるべき栄光は、私たち人間の努力によるのではなく、主イエスのいさおによるものです。私たちは、この栄光にあずかるに値しないのですが、ただ神の一方的な恵みの贈り物として受けることが許されています。望みは、ただ主イエスに基づくものであり、また主イエスのなされた御業に基づくものです。ただ主イエスを持っている者だけが、本当の望みを持っているのです。

イエスなき人は望みなき人です。

私たちは、二四時間先すらも知ることができませんが、主イエスはすべてを永遠にいたるまで御存知です。この主イエスに信頼することが許されているとは、何という特権でしょうか。ですからパウロは、「喜んでいる」あるいは「誇りに思っている」と言わずにはおられなかったのです。

いかなる宗教や哲学も、死後の将来に至るまで解き明かすことはできません。それができるのは、ただ主イエスおひとりだけです。黙示録21章22節には、来たるべき新しい世界が記されています。

私は、この都の中に神殿を見なかった。それは、万物の支配者である、神であられる主と、小羊とが都の神殿だからである。

（黙示21・22）

主イエス御自身が、私たちのためにあらかじめ備えていくださるのです。この事実を真剣に思うとき、私たちは圧倒され、自らを恥じ、礼拝せざるをえなくなるのです。

将来を見て、心安らかにいられるということは、何という富でありましょう。今日主イエスを信じ受け入れ、すべてを主に明け渡す者は、自分の過去がすでに清算されてしまったこと、そして言い表わすことのできない栄光が自分を待っていることを確信することができるのです。

11 与えられた義の祝福と富 (2)

ローマ人への手紙

5章12節から21節まで

I 義とされたことの結果

1 何が与えられているか

過去—現在—未来

2 なぜ、患難さえも喜ぶことができるか

II アダムの不従順によってもたらされた悲惨

1 罪

2 死

3 滅び

III 主イエスの従順によって注がれた豊かな恵み

1 義

2 いのち

3 救い



喜びにあふれている小澤明人、久美子夫妻。

今回は、1章1節から5章11節までのまとめである5章の後半について学んでみましょう。

¹² そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。¹³ というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。¹⁴ ところが死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々をさえ支配しました。アダムはきたるべき方のひな型です。¹⁵ ただし、恵みには違反のばあいとは違う点があります。もしひとりの違反によって多くの人が死んだとすれば、それにもまして、神の恵みとひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、多くの人々に満ちあふれるのです。

¹⁶ また、賜物には、罪を犯したひとりによるばあいと違った点があります。さばきのばあいは、一つの違反のために罪に定められたのですが、恵みのばあいは、多くの違反が義と認められるからです。¹⁷ もしひとりの人の違反により、ひとりによって死が支配するようになったとすれば、なおさらのこと、恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は、ひとりの人イエス・キリストにより、いのちにあつて支配するのです。

¹⁸ こういうわけで、ちょうど一つの違反によってすべての人が罪に定められたのと同様に、一つの義の行為によってすべての人が義と認められて、いのちを与えられるのです。

¹⁹ すなわち、ちょうどひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって多くの人が義人とされるのです。²⁰ 律法がはいって来たのは、違反が

増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。（ローマ5・12～21）²¹

I 義とされたことの結果

5章の前半である1～11節を経験した者は、どんな人でしょうか。この箇所では「求めている者の努力」ではなく、「持っている者の喜びの声」を聞くことができました。主イエスを信じ受け入れた者は、はかり知れないほどの富を与えられているのです。それは、何かを欲しがっている者、あるいは何かを求めている者の声ではなく、すでにそれを見出した者の確信と証しです。ここでは「どうか与えてください」というようなことが祈られているのではなく、与えられた神の贈り物に対する感謝がなされているのです。ここに出てくる動詞を見ただけでも、何という富が与えられているかがよくわかります。

1節 私たちは持つている

2節 私たちは導き入れられている

私たちは大いに喜んでいる

3節 私たちは喜んでおり、そして知っている

5節 私たちに注がれている

私たちは与えられている

9 節 私たちは義と認められている

10 節 私たちは和解させられている

11 節 私たちは大いに喜んでいる

1 信者に何が与えられているか

1 節 神との平和

2 節 恵みに導き入れられること 神の栄光を望むこと

5 節 聖霊と神の愛

9 節 神の怒りからの守り

10 節 救いにあずかること

11 節 和解を受けること

これらのものがすべて信者に与えられていることの根拠は、主イエスが尊い犠牲を払ってくださったという事実にあります。

過去に関しては、神との平和があり、良心はもはや訴えることがなく、良心の呵責もありません。そして自分の罪と債務がことごとく赦されている、という確信が与えられているのです。

現在に関しては、主の御前に恐れることなく近づくことが許され、信者の生活を豊かにする恵みが満ちあふれているのです。はかり知れないほど多くのものが主イエスを通して贈られているのです。信仰とは、主イエスに対する態度です。主イエスを信じるということは、主イエスを持

つことにほかなりません。すなわち主イエスが持つておられるものを、私たちも持つようになるのです。

将来に関しては、大きな栄光が約束されているゆえに、喜ぶことができます。もちろんこの地上においても、神の栄光を体験することができます。

もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。

(Ⅰペテロ 4・14)

いかなる苦しみの中でも、神の子は望みと喜びで満たされます。これこそまことの栄光ではないでしょうか。主イエスは、次のように祈られました。

またわたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです。

(ヨハネ 17・22)

主イエスと兄弟姉妹が愛によって一つに結びつけられていることこそ、まことの栄光です。しかし、聖書は未来の栄光についても数多く語っています。

あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。

(コロサイ 3・3-4)

卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらされ、弱いもので蒔かれ、強いものによみがえらされ、
（Ⅰコリント15・43）

肉体が栄光あるものによみがえらされ、主イエスの御座の右に座し、主イエスと共に永遠から永遠まで支配するということ、これに勝る栄光はありません。そして私たちは、主イエスとともに遺産を受け継ぐように召されているのです。

もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光とともに受けるために苦難をともしにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です。
（ローマ8・17）

聖書は、私たちも主イエスに似たものとされると言っています。

愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。

（Ⅰヨハネ3・2）

2 なぜ患難さえも喜ぶことができるか

さらにパウロは、「患難さえも喜んでいる」と、驚くべきことを言っています。なぜパウロは、そのようなことを言うことができたのでしょうか。信者は、患難が決して不幸なことではなく、大いなる富にあずかるために必要な手段であることを知っています。栄光の御霊としての聖霊が、私たちに与えられています。ですから私たちは、あらゆる苦しみをも喜んで通ってゆくことができるのです。

（パウロ達は）弟子たちの心を強め、この信仰にしつかりとどまるように勧め、「私たちが神の国にはいるには、多くの苦しみを経なければならぬ。」と言った。（使徒14・22）

信仰は試されなければなりません。信仰には、三つの試練があります。

その第一は、主イエスを告白することです。主イエスを告白し、証ししなければ、その人には信仰の成長はないでしょう。

第二は、日常生活における試練です。日常生活において、主イエスが本当に私たちの内に宿っておられることが明らかにされなければなりません。

第三は、最も大切な試練、つまり苦しみです。私たちはいつたい、この苦しみに対してどのような態度を取ったらよいのでしょうか。

私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に迷ってはいませんが、行きづまることはありません。

（Ⅱコリント4・8）
それゆえ私たちは、神の諸教会の間で、あなたがたがすべての迫害と患難とに耐えなが

らその従順と信仰とを保っていることを、誇りとしています。

（Ⅱテサロニケ1・4）

患難に対して正しい態度を取る者は、豊かに祝福されます。患難に対する私たちの反応こそ決定的なものであり、それによって私たちの信仰は立ちもすれば、倒れもするのです。

「多くの患難によって」、信者は今まで以上に真剣に主を求めるようになるでしょう。

主よ。苦難の時に、彼らはあなたを求め、あなたが彼らを懲らしめられたので、彼らは祈ってつぶやきました。

（イザヤ26・16）

「苦難を通して」、私たちはさらにいつそう主の御声を聞くことができるようになるでしょう。神は悩んでいる者をその悩みの中で助け出し、そのしいたげの中で彼らの耳を開かれる。

（ヨブ36・15）

「苦しみによって」、私たちはいつそう信者の交わりを大切にするようになるでしょう。

このようなわけで、兄弟たち。私たちはあらゆる苦しみと患難のうちにも、あなたがたのことでは、その信仰によって、慰めを受けました。

（Ⅰテサロニケ3・7）

「患難によって」、私たちは罪の征服者となることができますのです。

このように、キリストは肉体において苦しみを受けられたのですから、あなたがたも同

じ心構えで自分自身を武装しなさい。肉体において苦しみを受けた人は、罪とのかかわりを断ちました。

(Ⅰペテロ 4・1)

ウォッチマン・ニーはかつて、「おお神よ。多くの苦しみによって我らを祝福したまえ。」と祈りました。パウロも多くの患難を経験しました。

彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。だれかが弱くて、私が弱くない、ということがあるでしょうか。だれかがつまずいていて、私の心が激しく痛まないでおられますか。もしどうしても誇る必要があるなら、私は自分の弱さを誇ります。主イエス・キリストの父なる神、永遠にほめたたえられる方は、私が偽りを言っていないのをご存じです。ダマスコではアレタ王の代官が、私を捕えようとしてダマスコの町を監視しました。

そのとき私は、城壁の窓からかごで降り降ろされ、彼の手をのがれました。

（Ⅱコリント 11・23～33）

まさに患難を通して主イエスをよりよく知るということは、はかり知れない価値を持っているのです。

将来与えられる栄光を見て、キリスト者はいかなる患難のときにも主を喜ぶことができるのです。信者は、将来に対して何の不安も持っていません。私たちは将来のことを知ることができませんが、主イエスに信頼しています。ですから、将来に関するすべてのことは解決が与えられているのです。主イエスご自身が私たちの将来です。あらゆる不安と心配は、主イエスによって慰められます。主イエスは、ご自身を信頼する者を必ず目的地まで導かれます。それですから、私たちは今誇ることができ、感謝することができる土台を持っています。

ローマ人への手紙の1章17節～3章20節までには、まことに恐るべき現実が記されています。すなわち、「義人はいない、ひとりもない。すべての人が迷い出て、皆ともに無益なものとなった」ということでした。

3章21節～5章11節までには、すばらしい現実、すなわち、義と認められ、神との平和を持つことが許されている、ということが記されています。かつては失われた者が、いまや救われているのです。

そして、5章12～21節までで、パウロは以上述べたことがらをまとめて要約しています。ここ

で私たちは、二つの出発と二人の発端者、すなわちアダムとキリストのを見る事ができます。そこで、最初にアダムのことについて、次に主イエスのことについて考えてみましょう。

Ⅱ アダムの不従順によつてもたらされた悲惨

天地が造られたときには、人間に罪というものはありませんでしたが、後になつて悪魔により罪がもたらされました。

あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であつて、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願つてゐるのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立つてはいません。

(ヨハネ 8・44)

5章の19節には、人間が不従順であつたために罪が入りこんできたとあります。つまり、罪の原因は不従順でした。罪とは、まず第一に行ないよりも態度です。それは人間のわがままな気持ちです。このわがままな気持ちは、神の御心に反対する性質を持っています。罪が入りこんだことによつて、人間は神から離れ、自分で何でもやりたいというわがままな気持ちが生じ、「自己中心」がすべての考えや行ないを支配するようになってしまつたのです。12節を見ると、全人類が罪を犯したがゆゑに全人類が罪人であると記されています。罪の結果は、死です。罪によつて全人類に死が入りこんでしまいました。それは、肉体的な死であり、霊的な死でもあります。アダムが罪を犯したとき、彼はすぐに肉体的に死ぬことはありませんでしたが、霊的にはそのとき

既に死んでしまったのです。かつて神との親しい交わりを持っていたアダムは、いまや神を恐れ、神の御顔から逃げてしまったのです。これこそ、霊的な死です。アダムには後悔の念と悔い改めの思いが欠けていました。これこそいのちの泉からの分離、すなわち死です。さらにもうひとつの罪の結果は、滅びです。18節には「一つの違反によってすべての人が罪に定められた」とあります。人間は神によって滅びの判決を受けなければなりません。12節と18節には「すべて」という言葉が二回出てきますが、これは、例外のないことを明らかにしています。永遠にわたって神から離れていかなければならないこと、これこそまさに滅びです。

Ⅲ 主イエスの従順によって注がれたあふれるばかりの恵み

パウロは12節以下で、罪のことばかりでなく「恵み」のことも記しています。一方では、過ち、債務、滅びの判決、死が記されており、他方では、神に対する正しい態度、神の恵みによる釈放、いのちが記されています。

主イエスの場合は、アダムの場合と全く根本的に違っています。主イエスには、罪、債務、死、破局がなく、反対にいのち、救い、新しい始まりが満ち満ちています。人間は、誰でも永遠に滅びの内にとどまりたいか、それともいのちである主イエスとひとつに結びついて救いにあずかりたいか、どちらかに決定しなければなりません。アダムは滅びゆく人類のかしらであり、主イエスは全く新しい救われた人類のかしらです。主イエスは御自分の流された血潮によって、罪の奴隷を買ひ取ってください、新しいいのちを与えてくださったのです。人間は誰でも、自分の意志

によって生まれたものではありません。人間はみなアダムの子孫ですから、生まれたときに既に罪人でした。それに対して「新しく生まれかわる」ことは、私たちの意志によるのです。信仰によって、私たちは主イエスと結びつけられ、それによって永遠のいのちが与えられます。主イエスとひとつに結びつくことによってのみ、平和、贖い、義、救いが与えられるのです。従って、パウロは罪の力のみならず、恵みの絶大な力についても書き記しているのです。

アダムによってその子孫は罪、死、苦しみ、永遠の滅びを受けなければならなくなりました。

主イエスによって、豊かな恵みと義という贈り物が与えられたのです。

恵みとは、主イエスを信ずる者に値なしに与えられる全く自由な神の贈り物です。「罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました」。

主イエスによって、あふれるばかりの恵みが注がれました。救われるために一生懸命努力することは全く必要ではなく、人間的な努力はかえって神に対する罪であることを知らなければなりません。

最後に特に17節と21節とを見てみたいと思います。「もしひとりの人の違反により、ひとりによって死が支配するようになったとすれば、なおさらのこと、恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は、ひとりの人イエス・キリストにより、いのちにあつて支配するのです。」「それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。」

この箇所では「支配する」という言葉が四回出てきます。その場合「支配する」とは、17節で

は「いのちにあつて支配する」、21節では「いのちを得させるために支配する」と使われています。「いのちにあつて」とは、回心した信者の中で支配する「恵み」について、「いのちを得させる」とは、与えられた恵みによって「信者」が支配するようになったということを意味しています。主イエスのない人間は、本当のいのちを知りません。そのような人の生活は全く意味の無い生活であり、死に至る病の状態と言えましょう。川の流れというものは大変力強いものです。例えば冬が去り暖かい春がやって来ると、雪がとけ川の水かさが増し、一杯になると岸边にあふれてあたり一帯を潤します。この様子をあらわす言葉が恵みについて使われているのです。主イエスを自分の中に受け入れる者の罪は、あふれるばかりの恵みのゆえにもはや無に等しくなってしまうのです。赦された罪は、恵みのゆえにいまやどこにも見い出せません。

毎日あふれるばかりの恵みを受けている者は「支配する」ようになる、と動詞の現在形を用いてパウロは説明しています。すなわち、日々あらたに主イエスとの交わりを持つことがどうしても必要なのです。私たちは王のように支配することができますのです。けれども、あわれな乞食のようになってしまうていないでしょうか。あふれるばかりの恵みのゆえに、日々の生活において、自分の環境の上に立つことができ、支配することができるようになるのです。すなわち罪の奴隷から、罪を支配するものになることができますのです。そうになると、もはや死を恐れる必要は全くなりません。なぜなら、主ご自身が死を克服して完全なる勝利を成就してくださったからです。波に浮ぶボールのように周囲の人間や環境によって変わる人間が、いまやあらゆる環境の上に立ち、支配するものとなるのです。このあふれるばかりの恵みの秘訣は何でしょうか。アダム

の「不従順」によって、悲慘がやって来ましたが、主イエスの「従順」によってあふれるばかりの恵みが注がれたのです。

「わたしを遣わした方のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。」
(ヨハネ 4・34)

主イエスにとって、最高のものは、父なる神の御心でした。そして、主イエスの従順によって、絶えざる恵みが私たちに与えられるようになったのです。主イエスは私たちが恵みのゆえにさらに恵みを受けることを望んでおられます。ヨハネは次のように証しました。

私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのです。
(ヨハネ 1・16)

私たちも、このように証しすることができれば幸いです。

第Ⅲ部 新しい生活の歩み

新約聖書ローマ人への手紙
6章1節から8章39節まで

夫婦 岡本英介氏、幸子さん。



姑と嫁 藤本シゲさん、佐和代さん。



母と娘 山本孝子さん、いづみさん。



まことの一致——キリストを知ること

12 キリスト者が罪に対して取る態度

ローマ人への手紙

6章1節から23節まで

「主とともに十字架につけられた」

I ということを知る必要性

II ということを感じる必要性

III ということが生活において現われる必要性



あなたがたを私たちの養子として受け入れ、また喜びなのです。(1テサロニケ2:20)

前章において私たちは、救われた人々が受ける祝福と富について学びました。第一のアダムの道、全人類の道は、滅びへの道でした。しかしながら、第二の道……すなわち、イエス・キリストのなされた救いによって、望みの光がもたらされました。5章20節に「しかし、罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。」とある通りです。

罪と債務からの救いのあるところには、新しいいのちがなければなりません。6章のテーマは、罪の問題です。というのは、信者も罪を犯す可能性があるからです。

それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたわけではありませんか。

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

死んでしまった者は、罪から解放されているのです。⁷ もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。⁸ キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。

¹⁰ なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。

¹¹ このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあつて生きた者だと、思いなさい。¹² ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従つてはいけません。また、¹³ あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません、むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。

¹⁴ というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。

¹⁵ それではどうなのでしょう。私たちは、律法の下ではなく、恵みの下にあるのだから罪を犯そう、ということになるのでしょうか。絶対にそんなことはありません。¹⁶ あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であつて、あるいは罪の奴隷となつて死に至り、あるいは従順の奴隷となつて義に至るのです。¹⁷ 神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の

奴隸でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隸となったのです。

¹⁹ あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隸としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隸としてささげて、聖潔に進みなさい。罪の奴隸であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。²¹ その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。²² しかし今は、罪から解放されて神の奴隸となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。²³ 罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

(ローマ 6・1-23)

6章のテーマとして、私たちはいくつかの題をあげることができます。例えば、与えられた義の結果、罪の力からの解放、信者の聖化、すなわちきよめられること、信者の罪に対する態度などです。

1節 罪の中にとどまる

2節 罪の中に生きる

6節 罪の奴隸である

こういう表現は、未信者の状態を表わしています。未信者は罪の中にとどまり、罪の中に生き、

罪の奴隷として生活しなければなりません。信者の中にも罪は生きていますが、しかし、信者は罪に対して別の態度を取ります。信者にとって罪は生活を支配して動かす原動力ではないのですから。罪と債務の問題は、信者にとっては解決された問題です。すなわち債務は支払われ、罪は赦されたのです。これが義とされたことであり、聖書の言っている救いの土台なのです。しかし、義とされることがすべてなのではなく、むしろこれは始まりなのです。5章までは主イエスが「私たちのため」に何をなしてくださったかについて学んできました。しかし、6章では主イエスが「私たちとともに」何をなされたのが記されています。

5章においては、主イエスが私たちの罪と債務の問題を解決するために死なれたということについて学びました。

6章においては、私たちが新しい歩みをするために、主イエスが私たちとともに十字架につけられ、死に、そしてよみがえられたと述べられています。

主イエスを信じる者は、罪の中にとどまることなく、新しいいのちを持っています。

主イエスを信じる者は、罪の中に生きているのではなく、神に対して生きているのです。

主イエスを信じる者は、罪の奴隷として生きているのではなく、自由にされた者として生きているのです。

未信者の世界は、偽りと享樂とあたりをかえりみない利己主義の世界です。

信者の世界は、真実と、自分をかえりみない愛と、心からの交わりの世界です。

こういうことが、6章の主な内容なのです。ローマ人への手紙6～8章までには、信者の成長と

きよめについて述べられています。主イエスの救いによって、信者は債務を負うことがなく、義とされた者であるだけでなく、「聖なる者」です。

イエス・キリストのからだは、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。
(ヘブル 10・10)

このことを私たちはよく考えてみる必要があります。すなわち、信者の立場は「聖なるもの」であるが、信者の状態は、しばしばこれから遠くかけ離れていることがある、ということなのです。

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。
(Ⅱコリント 3・18)

6章の中心テーマは、信者が変えられること、すなわち信者の立場と信者の状態とがしだいに近づいてゆくことについてなのです。ところで、信者がこのように変えられることの最大の妨げは、「信者の内の罪」です。この罪は、信者が死ぬまでとどまり続けます。「古い人(6節)」すなわち、信者の古い性質は罪を肯定します。ですからこの古い人についてはどうしても解決がなされなければなりません。けれども幸いなことに、6章によればこの古い人の問題は、すでに解決されているのです。「古い人はイエスとともに十字架につけられました。」そこで、これから三つのことについて考えてみましょう。

I 私たちは、私たちが主イエスとともに十字架につけられたという事実を「知る」必要があります。

II この事実を「信じ」なければなりません。

III この事実が私たちの生活において「現わされる」必要があります。

I 知ることの必要性

私たちは生きている限り、何をする場合にも、行動を開始する前にまずいろいろな事実を知らなければなりません。ここで述べられている事実は、まず第一に主イエスが十字架につけられ、死に、葬られ、そしてよみがえられたこと。次に、「私」が主イエスとともに十字架につけられ、死に、葬られ、そしてよみがえられたことです。

主イエスとともに十字架につけられたのは古い人です。古い人は、神の御心に対して逆らうという自分中心の人間的な意志を持っており、また、罪の力を持っています。3-5節には、古い人の死亡通知と新しい人の出生通知が記されています。死んだ人は、答えることも、反応することも、動くこともできません。私たちは死人がとる態度を、罪に対しても取るべきです。いわゆる水の洗礼は、すでになされた救いの証しにほかなりません。洗礼を受ける人が水の中に沈んで見えなくなるように、私たちが主イエスとともに死んで葬られたのです。そして、洗礼を受ける人が水の中から再び出てくるように、私たちは主イエスとともに新しいのちによみがえられたのです。

しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ2・19、20）

主イエスとともに死んだということは、罪の力から解放されているということを意味しています。「罪のからだが減びて（無力となり）、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。」と6節にある通りです。

地球の引力は、飛んでいる飛行機に対しては無力です。それは引力よりもっと強い力が働いているからです。信者の内にある罪は、内住の主イエスによって無力にされています。これこそ、新しい生活の秘訣です。

8節 キリストとともに生きる

10節 神に対して生きる

罪の力からの解放は、単なるお勧めでも理論でもなくまさに事実です。この事実を私たちは知る必要があるのです。

3節 あなたがたは知らないのですか

6節 私たちは知っています

Ⅱ 信じることの必要性

私たちは、すでに主イエスとともに十字架につけられた、という事実を信じなければなりません。この事実は、私たちが知ろうと知るまいと、信じようと信じまいと、受け入れようと受け入れまいと、そのようなことに関係なく厳とした事実です。この事実は、主イエスにある信者は罪の力から解放されている、ということの意味しています。問題は、私たちがそれを信じるかどうかということだけです。私たちが信じなければ、私たちの生活はそのままです。しかし、私たちが信じるならば、私たちの生活は全く変わります。

一八三四年に奴隷解放宣言がおこなわれました。このとき奴隷であった人々は「あなたがたはもう自由になったのです」と告げられました。このことを信じて受け入れた奴隷たちは自由になり、新しい生活を始めることができました。

あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であると思いなさい、と11節に記されています。私たちはこの事実をよく考えなければなりません。私は罪に対して死に、罪に従う必要はない、ということです。

罪に対して、自分は死んだ者だと思いなさい。

罪に対して、はつきりとした態度をとりなさい。

古い人に従う必要はありません。

神に対して生き、主イエスの御心を受け入れ、従いなさい。

主イエスとともに十字架につけられたということは、自分の決定や自己支配を否定することにはなりません。

罪は、私たちがそれに賛成するときののみ力を持ちます。イエスにすべてをささげるならば、罪に対して死ぬということが実現されるのです。

創世記に登場するヨセフが、それに対する良い例です。彼はポティファルの妻に誘惑された時、彼の古い人、すなわち古い性質はその誘惑に応じようとしたでしょうが、彼はそれに対して反対の態度をとり、次のように告白したのです。

どうして、そのような大きな悪事をして、私は神に罪を犯すことができましょうか。

(創世記 39・9)

主イエスとともに十字架につけられたという事実を信ずることは、毎日新しく自分自身を主にささげ、御声に聞きしたがうことです。私たちの古い人は、主イエスとともに十字架につけられたのです。従って、その古い人は支配をやめ、王座から追い払われるべきです。罪はなお信者の中に住み続けています。しかしながら、罪があるということはもはや信者の負債にはなりません。そうではなく、私たちの罪に対する態度こそ、私たちの責任なのです。私たちが罪に対して心を譲るならば、罪は私たちを支配してしまいます。このことは私たちの負債となります。

Ⅲ 生活において現わされる必要性

私たちが主イエスとともに十字架につけられたという事実が、私たちの生活において現わされる必要があります。私たちは、はじめにこの事実を知る必要があるということを学びました。しかし、知ることとは、内的に把握することであり、心の目で見ることです。このように、この事実を知る人は全く新しい態度を取るようになります。すなわち、いままでは自分自身が支配していましたが、いまからは主イエスが支配されるようになります。これが変えられた生活の意味にほかなりません。罪が支配するのではなく、義が支配するのであり、そしてこの義とは主イエスご自身なのです。

13節と19節に「ささげなさい」、あるいは「ささげてはいけません」という言葉が用いられています。つまり、私たち信者が罪に仕えるか、主イエスに仕えるかは、私たち自身の決定にまかされていることなのです。主イエスとともに死に、主イエスとともによみがえらされたということとは、主イエスとの交わりの生活を意味しています。言いかえるならば、罪はもはや支配しないということです。

14節 というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。

18節 罪から解放されて、義の奴隷となったのです。

22節 しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となったのです。

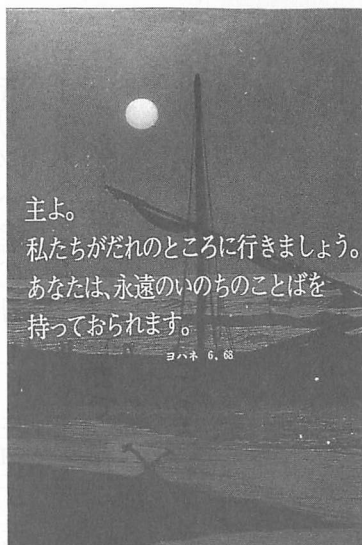
信者として、私たちは罪を拒否して主イエスに仕えることができます。私たちは、罪の奴隷にな

るか、神の奴隷になるか、そのどちらかなのです。罪の奴隷になるということは、神にとって実りのない無価値なものとなることです。神の奴隷になることは、私たちの生活が豊かに実を結び、永遠の価値を持つことを意味しています。

信者は、罪の支配のもとにはないのであり、そのゆえに罪を犯す必要がないのです。古い人は、罪を犯さないわけにはいきませんが、新しい人は、罪を犯す必要はありません。私たちは、主イエスの血によって買い取られたので、どちらに仕えるかを選択することができます。自由にされた者たちだけが、選ぶことができます。信者として、あなたは自由にされたのです。ですから主イエスにだけ仕えなさい。これはあたりまえのことのようですが、あなたはいかがでしょう。

ローマ人への手紙5章を通して、私たちは神の怒りから免れた者であることを学びましたが、6章を通して、罪の力からの解放について学んだわけです。罪の力から自由にされた者は、主イエスに自分を明け渡し、主イエスに自分自身を用いていただくことができます。罪の力からの解放によって、私たちは自分自身を主にささげるならば、もはや罪を犯す必要がないのです。

人間は絶対的に自由な者ではありません。人間は絶えずしもべとして仕えるべき者です。しかし、信者は救いによって主に仕えるか、罪に仕えるかのいずれかを選ぶ機会を持っています。新しい歩みは、心の新しい態度で始まります。その新しい態度とは、第一に自分自身に対する考えと態度です。信者は、自分の罪が赦されており、自分は神の子であり、神は自分の裁き主ではなく父である、ということを確認しています。そして、信者は神の御心を行ないたいという気持ちを持っていきますし、神の嫌われることを避けようとする気持ちもあります。主を悩ませたような



ときには、できるだけ早く再び主との正しい関係に立ちたいと願います。

私たちの救いの土台は、主イエスが私たちのためになされた御業であり、新しい歩みの秘訣は、主イエスが私たちとともになされた御業です。新しい歩みは、私たちが自らを主に捧げることによってのみ実現されるのです。私たちが自分自身を捧げるそのお方が、私たちを支配するようになります。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行なっている者はみな、罪の奴隷です。奴隷はいつまでも家にいるではありません。しかし、息子はいつまでもいます。ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたは本当に自由なのです。」

(ヨハネ 8・34～36)

13 キリスト者の新しい生活の歩み

ローマ人への手紙

7章1節から13節まで

I 律法からの開放——死によってのみ

1 妻（信者）

2 第一の夫（律法）

3 第二の夫（イエス）

II 律法の方法

1 罪を明らかにする

2 悔い改めをもたらす

3 救い主に導く



私たちは愛しています。神さまがまず私たちを愛してくださいましたからです。
(1ヨハネ4・19)

今日は、ローマ人への手紙7章1節から13節までを学んでみたいと思いますが、その前に、今まで学んできた6章までの内容を、簡単に振り返ってみたいと思います。それは三つに分けてまとめられます。

1 最初に私たちは3章20節までの箇所¹で、次のようなことを学んできました。それは「キリストを持たなかった私たち」ということでした。実は、聖書はこのことを罪と言っているのです。なぜならこのような人は、自分の行ないに頼ろうとするでしょうが、その人には神の義は与えられないのです。

2 次に私たちは5章21節までで「私たちにとつてのキリスト」ということを学んできました。その中で私たちは、神によって義とされるといふことがどういふことであるかを学んできました。さらに、信仰といふこと、すなわち神から与えられる義について学んできました。

3 最後に6章と7章において、私たちは「キリストとともにある私たち」といふことを学んできました。今日は、このことを続けて考えてみたいと思います。ここでは、まず第一に聖化といふこと、第二に信頼といふこと、そして第三に神の栄光を現わすといふことが中心となっています。この7章を通して、これらの点をよりよく学んでみたいと思います。

それとも、兄弟たち。あなたがたは、律法が人に対して権限を持つのは、その人の生きている期間だけだ、といふことを知らないのですか。——私は律法を知っている人々に言っているのです。——夫のある女は、夫が生きている間は、律法によって夫に結ばれています。しかし、夫が死ねば、夫に関する律法から解放されます。ですから、夫が生きてい

る間に他の男に行けば、姦淫の女と呼ばれるのですが、夫が死ねば、律法から解放されており、たとい他の男に行っても、姦淫の女ではありません。

私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。

私たちが肉にあつたときは、律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いて、死のために実を結びました。しかし、今は、私たちは自分を捕えていた律法に対して死んだので、それから解放され、その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えているのです。

それでは、どういうことになりますか。律法は罪なのでしょうか。絶対にそんなことはありません。ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、「むさぼってはならない。」と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。

しかし、罪はこの戒めによって機会を捕え、私のうちにあらゆるむさぼりを引き起こしました。律法がなければ、罪は死んだものです。

私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。それで私には、いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わかりました。それは、戒めによって機会を捕えた罪が私を欺き、戒めによって私を殺したからです。ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いも

のなのです。

¹³では、この良いものが、私に死をもたらしたのでしょうか。絶対にそんなことはありません。それはむしろ、罪なのです。罪は、この良いもので私に死をもたらすことによって、罪として明らかにされ、戒めによって、極度に罪深いものとなりました。

(ローマ7・1-13)

有名なローマ人への手紙6-8章までの一番大きなテーマは、信仰を与えられた人の「新しい生活の歩み」ということです。6章を見ると、その中に私たちはひとつの特徴的な言葉をみつけることができます。それは、「知っている」、あるいは「知らないのですか」という表現です。これらの言葉は、6章の中に四回出てきますが、いずれも「知る」ことの大切さを強調しています。そこで、今日の箇所である7章1節を見てみると、そこにも「知らないのですか」という言葉が使われていることに気づきます。聖書が「知る」あるいは知識ということを言うときには、それはいつでも本当の知識のことについて語っています。本当の知識とは、頭の知識ではなく、体験的に知ることになった知識のことを示しています。本当の知識だけが、人を解放し、人を自由にするのであります。

その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。

(ヨハネ17・3)

というのは、私たちをご自身の栄光と徳によってお召しになった方を私たちが知ったことによって、主イエスの、神としての御力は、いのちと敬虔に関するすべてのことを私たちに与えるからです。

(Ⅱペテロ 1・3)

信仰を与えられた人が喜んで受け入れている本当の知識とは、「私の汚れた罪は、主イエスが流された血潮によつて、すべて洗い流された」という知識です。

次のような話があります。あるひとりの伝道者が大学に招かれました。彼は、ある教授に招かれてクラスに話をするはずでしたので、そのために主に祈り、十分に準備して出かけてゆきました。学生たちに話し終ると、招いた教授は最後に一言付け加えて言いました。「今日のお話はとてもよいお話でした。ただ、もうすこし短かければもっとよかつたと思います」。これを聞いた伝道者はがっかりしてしまい、重い足を引きずるようにして家に帰っていききました。彼は家に着くと早速、その教授に一通の手紙を書き、その日のことについて心からおわびをしました。しばらくして、教授から返事の手紙が届きました。開けてみると、そこには英語で次の三つの言葉が書いてあるだけでした。

forgiven——forgotten——forever!

つまり「赦しました。忘れました。永久に。」と書いてあったわけです。

このことを、神様と信仰を与えられた人との関係にあてはめてみる事ができます。主なる神も、私たちの罪を赦し、忘れ、しかも永久に忘れさってくださいだったのでしたのです。

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。
(イザヤ 43・25)

わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖ったからだ。
(イザヤ 44・22)

なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さないからである。
(ヘブル 8・12)

わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。(ヘブル 10・17)

東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。

(詩篇 103・12)

この知識こそが信者の新しい生活の土台となります。そこで7章が問題にしていることは、このような知識を持つ信者が「実的生活において、この知識にふさわしい生活を行なうことができるかどうか」ということです。言いかえれば、このような知識を持った信者が神のおきてをまっとうすることができるかどうか、ということですが、このことについて、7章11-13節では次のよ

うに二つに分けて考えられています。

I 律法からの解放——死によつてのみ（1―6節）

II 律法の目的（7―13節）

I 律法からの解放——死によつてのみ

1―6節までは、神のおきて、すなわち律法からの解放について書かれています。そこで述べられていることは、「死によつて」私たちは律法から解放されるということです。7章の中には「おきて」すなわち律法という言葉が何回も出てきます。律法というと、すぐ私たちは十戒を思い出しますが、律法は十戒だけではありません。詳しいことには触れないでおきますが、一口で言うならば、律法とは神の御心の全体を指す言葉です。律法は私たちに何が善であるかを教えてくれます。しかし律法は私たちに律法を行なう力を与えることはありません。

律法が与えられなければ、世の中は混乱におちいるだけでしょう。律法は、良いものです。

しかし、人間には律法を行なう力がありません。だから、律法は人間の重荷になるのです。律法は人間を罪に定めるものです。法というものは、生きている間だけ人間をしるものであって、人間が死んでしまえばもはや法は効力を持たないのは言うまでもありません。たとえば死刑の判決を受けた人が、刑が行なわれる前に何かの理由で死んでしまえば、死刑の判決はもはやその人をしるることができない、ということです。結婚の約束も、二人を結びつけているのは夫か妻かのいずれかが死にいたるまでの間だけです。もし夫か妻が死んでしまったら、残された方はすく

なくとも結婚の約束にはもはやしばられてはいないことになります。「ですから、夫が生きている間に他の男に行けば、姦淫の女と呼ばれるのですが、夫が死ねば、律法から解放されており、たと他の男に行っても、姦淫の女ではありません。」と7章の3節にあります。

だれでも、妻を離別して別の女を妻にするなら、前の妻に対して姦淫を犯すのです。妻も、夫を離別して別の男にとつぐなら、姦淫を犯しているのです。(マルコ13・11-12)

次に、すでに結婚した人々に命じます。命じるのは、私ではなく主です。妻は夫と別れてはいけません。——もし別れたのだったら、結婚せずにいるか、それとも夫と和解するか、どちらかにしなさい。——また夫は妻を離別してはいけません。

(Iコリント7・10-11)

この7章の中には、「一人の妻」と「二人の夫」のことがたとえ話として書かれています。妻というのは私たち信者のことを指しています。二人の夫のうち前の夫は律法のことであり、後の夫は主イエスのことを指しています。二人の夫の間には共通している点も多くありますが、根本的には二人は全く異った者です。律法は聖なるものであり、正しいものであり、また良いものです(12節)。この点では、主イエスも同じ聖なるお方であり、正しく良いお方であられます。しかし一方、律法は飽くことなく要求するだけのものです。主イエスもある意味では同じように飽くことなく要求するお方ですが、主イエスは要求されるだけではなく、助けも与えてくださるお

方です。律法は人を窮地に立たせるものです。たとえば結婚の約束、あるいは結婚のおきてとは、離婚をするな、ということですが、このようなおきては場合によっては人を窮地に立たせるものです。人間の内にある古い自我は、いつも神のおきて、すなわち神の御心に逆らうものです。人間的な努力によつて神のおきてを行なおうとするならば、その結果は「死のために実を結ぶ（５節）」だけです。私たちは、死のための実ではなく「神のための実を結ぶもの（４節）」でなければならぬのです。

しかしこのことは、いったいどのようにして可能となるのでしょうか。それは、イエス・キリストと新しくひとつとなることによつてのみ可能となるのです（４節）。なぜならば、律法という名の夫は要求はしても、助けは与えてくれない夫ですが、イエス・キリストという名の夫は、私たちに要求をなさるだけではなく、助けをも与えてくださる方だからです。こう言いますと、私たちはだれでも、律法という夫から離れてイエス・キリストという夫に行く方がずっと望ましいと思うことでしょう。ところが、どうしたら私たちは律法という夫から離れてイエス・キリストという夫へ行くことができるのでしょうか。聖書は、ただ「死」ということを通してのみこのことができると言っているのです。「あなたがたも、キリストのからだによつて、律法に対しては死んでいるのです。」と７章４節にあります。

これこそ、福音です。律法は、死んでいる人に対しては、すなわち聖書に書いてあるように、キリストとともに死んでいる人に対しては、何の要求もすることができなくなっているのです。したがって、新しい生活への歩みは、律法的な努力によるのではなく、イエス・キリストの死

によって律法から解放されて、イエス・キリストに従って生きることから可能となるのです。すなわち新しい生活は、イエス・キリストとひとつになるときにはじめて、可能となるのです。このような人だけが、神に対しての豊かな実を結ぶことができるのです。大切なことは、神に対して実を結ぶことができるのは決して人間的な努力によるのではなく、ただ私たちが主イエスとひとつに結びついているという事実の中から自然に出てくることにすぎないということなのです。

律法に従って歩もうとしている人、すなわち自分の努力によって良くなろうとしている人というのは、むちを持った男に尻をたたかれながら歩いている牛のようなものです。これに対して、主イエスと共に歩もうとしている人、すなわち主イエスにすべてをゆだねて歩いている人は、主イエスとくびきを一つにして歩いている牛に似ています。主イエスがその人と共に歩んでくださり、その人を常に助けてくださるからです。パウロという人は律法を大変良く知っていました。律法が人間をしぼりつけ、人間から自由を奪い取ってしまうものであることを知っていたのです。

主イエスの救いの目的は、人間に本当の自由を与えることでした。本当の自由というものは、自分の好きなことが何でもできるということではありません。もしそのような自由が人間に与えられるならば、人間のやることはただ自分の欲望のままに生きることであり、悪魔的な考えのとりことなることだけであり、平気で罪を犯すようなことだけでしよう。これらのことが、果たして本当の自由と言えるでしょうか。決してそうではありません。本当の自由とは、私たちがイエス・キリストとひとつになるときにだけ、与えられるものです。4節にあるように、「死者の中からよみがえった方と結ばれる」ということが、本当の自由への道なのです。

「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」
(イザヤ43・1)

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。
(Iコリント6・19・20)

主イエスに結びついている人は、自然のうちに実を結ぶようになります。ぶどうの木に自然にぶどうの実がなるようなものです。

あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。
(ヨハネ15・8)

しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。

(ガラテヤ5・22)

だから、自分で何かを努力しようとしなくても、自然にできるようになります。

わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。あなたのおしえは私の心のうちに

あります。

(詩篇40・8)

このとおり、私は、あなたの戒めを慕っています。どうかあなたの義によって、私を生かしてください。

そうして私は広やかに歩いて行くでしょう。それは私が、あなたの戒めを求めているからです。

ご覧ください。どんなに私があなたの戒めを愛しているかを。主よ。あなたの恵みによって、私を生かしてください。

(詩篇119・40、45、159)

この詩篇の作者のように、私はあなたの戒めを慕っています、求めています、愛しています、ということのできる人は、神がその人を主イエスとひとつにされた人です。このように、主イエスとひとつにされるといことが、新しい生活の秘訣なのです。

Ⅱ 律法の目的

7-13節までの内容は、私たちが陥りやすい考えについて述べられています。それらはたとえば「自分という人間は、そんなに悪いものではないのではないか。」「罪とは、そんなに恐いものなのだろうか。」「律法に対する弁護論」などであり、つまりこの箇所では、律法の目的について書かれています。

聖書は、人間がだれでも例外なく墮落しきつたものであると言っています。と言っても、初めから自分が罪に対して盲であり、自分のしていることがすべて罪であり、自分は神から遠く離れてしまっているということを知っている人はだれもおりません。律法を与えられて初めて人間は、何が善であり、何が悪であるかを知ようになります。罪というのは自我のことであり、律法の働きは人間の隠された心の奥底を明らかにすることです。もしも、人間の心の奥底が明らかにされるなら、そこにあるのは、人間の自我というものでしょう。それでは、このように人間の自我をえぐりだす律法は、果たして罪なのでしょうか（7節）。律法は、先にも述べたように、だれの心の中にでもある自我を明るみに引きだすだけの役目を持つものです。例えて言えば、外科医はメスを持つて患者の患部を切り出しますが、外科医の使うメスは果たして悪いものでしょうか。決してそのようなことはありません。また、汚れた顔をした人が鏡の前に立ちますと、鏡は汚れた顔をそのまま映しだしますが、果たして鏡は悪いものでしょうか。決してそのようなことはありません。それと同じように、人間の心の中にある自我、あるいは罪をえぐりだす律法、罪を映しだす律法も、決してそれ自体悪いものとは言えないのです。

律法は良いものです。人間の患部をいやし、人間の汚れた顔を洗うためには手術や洗顔が必要です。それと同じように、人間の罪の問題を解決するためにも、神による手術、汚れのきよめが必要なのです。病気を知らない人は、病気を直そうとは思いません。これと同様に、自分が罪の病を持っているということを知らない人は、罪を直そうとは思いません。律法とは、実に私たちが罪の病を持っていることを私たちに指摘するものなのです。したがって、律法は私たちに罪を示

し、その後で、私たちを罪の悔い改めに導き、さらに、私たちを主イエスという避けどころ、のがれ場へと導いてくれるのです。

律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。(ガラテヤ3・24)

神の御言葉という鏡を通して初めて、私たちは自分が罪を犯しているものだということ、すなわち聖なる神から遠く離れてしまっているものであることを知ることができます。ですから、神を受け入れた人達は、神の御言葉によって自分が滅びそうな者であり、自分が汚れたものであり、罪深いものであることを知り、それを認めた人々なのです。ところが、主なる神を受け入れたことのない人達は、自分がこのようなものであることを知ることができずにいるのです。詩篇24篇3・4節でダビデは、だれが主の山に登りえようか、と問い、これに対して、手がきよく、こころがきよらかなものである、と答えています。私たちは、どうしたらきよい手ときよらかな心を持つことができるでしょうか。ただ、イエス・キリストの血によるほかはないのです。

律法というのは、一方において罪の恐ろしさに目を開かせ、他方において神の恵みへと導くものなのです。

神の御言葉は、あなたの山のような罪をあなたに教えると同時に、あなたの罪が赦されている、という知らせをも教えているのです。

ですから、私の罪は主イエスの血潮によって赦され、忘れられ、しかもとこしえまでも忘れられてしまった、ということが出来る人は、本当に幸いです。もし、あなたがこのように言うこと

ができないようでしたら、どうか次のように神様にお祈りをしてください。

「神様、どうか聖書の言葉を通して、自分がどんなにみじめなものであるかということを明らかに示してください。」

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。（ローマ6・23）



がんてありながら主イエスのゆえに大いに喜んでいる長澤文枝さん。

14 人間のジレンマ

ローマ人への手紙

7章14節から25節まで

I 律法の目的

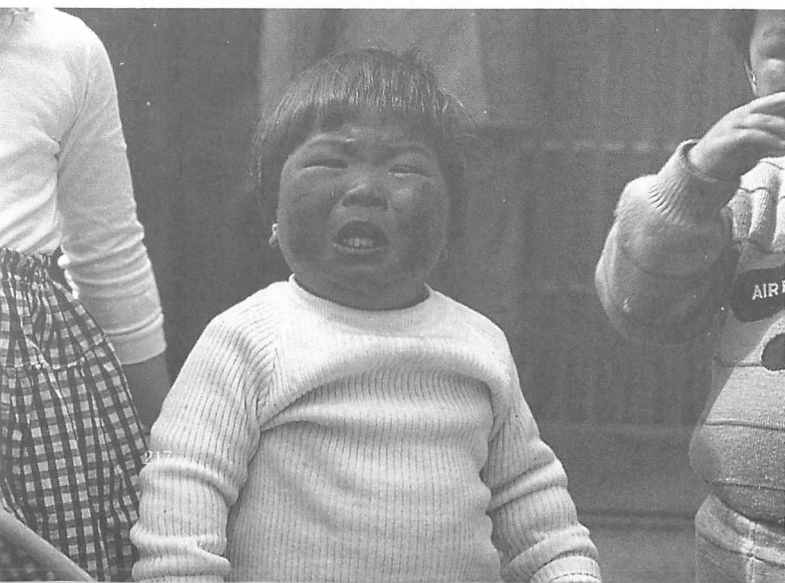
- 1 古い人を破産へと追い込み、イエスに導くこと
- 2 新しい人を破産へと追い込み、御霊の支配へと至らせること

II 新しい人に対する三つの事実

- 1 自分の内に罪が宿っている
- 2 欲する善をなすことができない
- 3 欲していない悪を行なっている

III 新しい人が行なう新しい律法

- 1 私ではない、内に住みついている罪
- 2 私ではない、内に住みたもうイエス



今日は、ローマ人への手紙7章14節以下の後半の部分について学んでみたいと思います。

私たちは、律法が靈的なものであることを知っています。しかし、私は罪ある人間であり、売られて罪の下にある者です。私には、自分のしていることがわかりません。私は自分が見たいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。

もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は良いものであることを認めているわけです。ですから、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。

そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っていると、いう原理を見いだすのです。すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいのに、私のからだの中には異った律法があつて、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心

では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。

(ローマ7・14、25)

I 律法の目的

現代ほど多くのことが、人間について語られている時代はありません。子供の育てかたについて、若者の問題について、結婚のことについて、老人問題について……。私たちの周囲には、いつも問題が満ち満ちています。しかもこれらの問題については、実に多くの人たちがいろいろな意見を述べています。たとえば教育者とか、心理学者とか、精神病理学者とか、犯罪心理学者とか、社会学者といった人々がそれぞれ異った立場から、異った意見を述べているのが現状です。現代ほど、立派な意見や忠告や警告がなされている時代はありませんが、残念なことには、これらの意見は互いに混乱しあっている、私たちに解決を与えてくれるものとはどうい思えません。いったい、これはどうしてなのでしょう。

それは、これらすべての人々が、次の三つの重要な点を見逃してしまっているからです。

第一に、人間が神のみ姿に造られているということ。

第二に、人間は、罪によって墮落してしまっているということ。

第三は、人間が善をなす力を全く持っていないということです。

したがって、これらの事実が全く忘れられているかぎり、どのような忠告がなされても、何の効きめもないのです。聖書にあるように、盲人は決して他の盲人を導くことができないのです。

もし、人間のことをすべて知りつくしているような人物がいたとするならば、それは使徒パウ

口であると言ふことができると思います。ローマ人への手紙7章でパウロが書いていることほどに、人間の真相をよく把握しているものは他にはありません。「私はかつて律法なしに生きていました（9節）。だれでも、ごく幼いときには、このように律法なしに生きています。子供は、本能的に生きており、何でも思いつくままに行動します。おなかがすけば乳を欲しがりますし、疲れるとすぐ寝てしまいます。気分が悪くなると泣きだします。子供は律法というものを持っていません。しかし子供も大きくなると、ある日、母親の「～してはいけません」という命令の声を聞くようになります。このときから、子供は新しい成長の段階に入ります。子供は、して良いことと、してはいけないことがあることを知るようになります。母親の言っていることがいくら良くて正しいことであっても、子供はそれに対して反抗しようとするものです。子供は母親の言うことなどなかなか聞きませんし、自分の思ったとおりにやります。母親の戒めの声を通して、子供の中から悪い性質が、つまり罪の性質が明るみに出てくるのです。これと同じように、正直な人は、律法を通して自分の内にある暗い性質が明るみに出されてくるのを認めるでしょう。

人間は頭の中から足の先まで汚れたものであり、不真実なものであり、自己中心的なものです。このように人間は罪の奴隷ですから、彼らは不幸になるのです。しかし、律法は鏡のように、人間の罪に汚れた状態を示すだけではなく、いわば道しるべとして、主イエスに至る道をも示しているのです。

イエスに向つて次のように心から祈る人は、かならず新しい生まれ変わりを体験するでしょう。

「私は罪を犯しました。私は汚れたものです。私は不真実なものです。私は自己中心的なものです。私は心から生まれ変わりたいと願っています。私は、あなたが私のために血を流してください。たことを心から感謝しています。どうぞ、私の神、主になってください」。このように祈る人は、かならず救いの体験を与えられます。このような祈りをする人の心は、開かれており、その人の心の中に主イエスが入ってくださるのです。まことに多くの人達が、このようにして、主イエスが罪を赦してくださいるだけではなく新しいのちも与えてくださる方であることを体験してきたのです。

どのようにして、主イエスはすべての人の個人的な救い主になってくださることができのでしょうか。主イエスの救いに対して感謝をささげ、自分の生活を主イエスの支配にゆだねることによって、主イエスは私たちひとりひとりのための個人的な救い主となってくださるのです。

律法は、このようにして、人間を徹底的な破産に追い込みます。しかしそれだけではなく、このように破産を体験した人は主イエスのみもとに行き、このお方が決して破れ果てたものを追いつ出すことなく、受け入れてくださるということを体験するのです。主イエスとの個人的な出会いの体験を通して、人は主イエスの血潮のきよめの力を体験するのです。

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。

(ローマ5・1)

私たちは、この御子のうちにあって、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けて

いるのです。これは神の豊かな恵みによることです。

(エペソ 1・7)

しかし律法は、私たちの「古き人」を破産へと追い込むばかりではなく、私たちの「新しい人」をも破産に導くのです。このことを私たちはローマ人への手紙 7 章を通して見ることができます。新しい人は、自分の罪が赦されていること、自分は神の子であるということ、また、自分は神のものであるということを知っています。しかし、このように生まれ変わった新しい人、すなわち信者が律法を行ない、神様の御心になつた生活を始めようとするやいなや、その人は必ず同じように自己の破産へと導かれるのです。

たとえばアブラハムは、「私はちり灰にすぎないもの」であると告白しています。またイザヤは、「わざわざいなるかな。私は滅びるばかりだ。私は汚れたくちびるのものだ」と叫びました。ヨブは「私は自らを恨み、ちり灰の中で悔います」と言っています。パウロもまた「私は罪人の頭です」と告白しているのです。これらの人々はみな、いうまでもなく信者でした。しかし、この人たちは、事実、破産へと追い込まれて、このような告白をのこしているのです。ですから、何が悲しむべきことであるかと言いますと、実に多くの信者たちがいまだにこのような「破産へと導かれていない」ということです。このような破産を求めたことのない信者は、いまだに自分の力で主に仕えようと努力しているのです。

従って、律法の目的は、次の二つのことであると言えるのです。

1 生まれながらの人たちを破産へと導いて、主イエスのみもとへと来るようにさせること。

2 生まれ変わった人たちを同じように破産へと導いて、御霊の完全な支配のもとに至らせること。

Ⅱ 生まれ変わった人に対する三つの事実

生まれ変わりを体験したパウロは、7章14節以下で自分の中に三つの事実があることを確認しています。

- 1 私のうちには罪が宿っていること。(17, 18, 20, 23, 24節)
- 2 私は善を欲してはいるが、それをなすことができないということ。(19, 22節)
- 3 私は悪を行なっているが、それは自分がそう望んでしているのではないということ。(19節)

14-25の間には、「私」ということばが25回以上も出てきますが、この私という言葉は未信者を指しているのではなく、信者を指しているのです。7章は私たちに、信仰に入った人の本当の姿を示しているのです。パウロのように、神様の望んでおられるとおりに自分の本当の姿を認めた人たちは幸いです。

生まれ変わった信者は、心から良いことをしたいと望んでいます。彼にはそれができないのです。ですから人は、自分の心の中が引き裂かれて、悩むのです。それは、自分のしたいことが実際にはできないからです。すなわち、信者の心の内に住んでおられる御霊の力と、同じく信者の心の内に根づいている罪の力との戦いであるということができません。主イエスの望んで

おられることは、信者が一切の妥協を排して、ご自身に従ってくることです。しかし、信者にはそれをする力がありません。ですから、信者は、主イエスに従っていかうとすればするほど、失望し、落胆して力を落してしまうのです。このようにまじめに努めようとする信者の結果は、7章24節にパウロが言ったように、「私は本当にまじめな人間です。」という叫びとならざるをえないのです。このように欲しながら実際には行なうことのできない人は、本当にまじめさを経験します。

しかし、その状態にとどまり、がっかりしてしまう信者が何と多いことでしょうか。これらの信者達は、ただ自分の罪が赦されたということと、神との平和が与えられているということだけがすべてであると思い、聖書には喜びや勝利についても書いてあることを知りながらも、実際には自分のまじめさを悩み続けて、7章に書かれているようなまじめな生活を一生継続していくです。

けれども、主イエスは私たち信者をこのようなまじめな生活に導かれるために、私たちを救われたのではなく、私たちを「圧倒的な勝利者」にするために私たちを救ってくださったのです。

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましよう。

しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。

この14―25節までの間で、私たちは私たち信者が引き裂かれた心の持ち主であることを教えられます。私たちの肉の内には、罪が住みついており、この罪が私たちの肉を通して私たちの魂に戦いをいどんでいるのです。私たちの内に住みたもう御霊は、主イエスに対して「しかり」と応え、私たちの肉なるものは「否」と叫んでいるのです。ここに私たちの心の戦いがあるのです。この戦いは信者にとって一生涯続けられる戦いです。

新しく生まれ変わった人の中には、やはり罪の性質が残っているのです。このことを聖書ははっきりと教えています。この事実を否定する、いっさいの教えは誤った教え、すなわち異端です。人間の中から罪を完全に取り除こうとすれば、人間のいのちを取り去らなければ不可能です。しかし、主イエスは私たちからいのちを取り去ることを望んでおられるのではなく、私たちを自身 の道具として用いられようと望んでおられるのです。

Ⅲ 新しい律法

終りに、私たちは「新しい人はどのような律法に従うものであるか」ということについて考えてみましょう。信者は、自分の内に住む御霊に従うか、あるいは自分の内に宿っている罪に打ち負かされてしまうかのどちらかです。主イエスと出会うときにはどのような人でも、自分の生涯を主イエスに明け渡して、主イエスに従いたいという思いを持ちます。しかし、そのような信者の心の中には、決して罪の力が死んでしまっているのではなく、罪の力が依然として残っているのです。ヒューマニズムは、人間の内に善なるものがあると教えています。ですから、人間は善

意を持って誠実に、また人助けをして善をなすことができますと教えています。ところが聖書は、人間が良いものであるとは決して教えていません。それどころかまさにその逆で、人間は悪いものであることを教えているのです。このように、人間は本当は悪いものであることを良く知っているのは、ただ主イエスを知っている人だけです。しかし、主イエスを知っている人たちは「罪の重荷」から解放され、また「罪の力」の解放をも体験している人たちです。そのような人々、すなわち主イエスを本当に知っている人々の特徴は、ただ主イエスに従っていきたいというその願いを持っている、ということにあるのです。しかし、罪の力は依然として信者の心の中に残っているものであって、機会さえ与えられればいつでも力を振おうとしています。律法は良いものですが、人間が律法を行なおうとしても、私たちは無力なのです。律法というものは、ちょうど奴隷が鎖につながれているように、人間も罪の鎖につながれていることを明らかに示すためのものでした。律法によって、私たちは自分たちが欲しているけれども、実際にはできないことがあることを知のです。パウロも、律法を通してこの深刻な事実を体験したのです。

肉の内にあるということは、主イエスに全くより頼んでいるのではない、ということです。

肉の内にあるということは、結局、自己に縛られているということです。

したがって、パウロは肉の内には良いことが住んでいない、と言っているのです。どんなに努力してみても、人間が悪い木であるという事実に変りはありません。人間が悪い木であるかぎり、決して良い実を結ぶことはできません。しかし、自己中心の思いとか、悪に打ち負かされやすい性質というものは、人間にとっては影のようにいつも付きまとっているのです。信者は、だれで

も自己の内にあらゆることに對しての決定権がないことを認めなければなりません。結局、あらゆることに對しての決定権は、私たちの内に住みたまう主イエスの御靈か、さもないければ私たちの内に宿っている罪の力かのいずれかが持っているのです。

私たちは、自分達の古い人間が全く無能力であり、全く墮落しきっていることを知らなければなりません。これこそが、ローマ人への手紙7章の体験です。すなわち、「私は本当にみじめな人間です」という体験です。古い人は、罪を犯すしかなく、いつもその罪の律法に縛られているのです。古い人は、徹底的に罪にまみれており、これを救う道は無いのです。古い人に、自由なやりたいことをさせると、ただ悪いことしかないでしょう。7章は私たちに、信者も決して完全でないことを教えているのです。しかしそれにもかかわらず、信者と未信者との間には、根本的な違いがあるのです。未信者は、罪を犯しても本当に悔いることはありません。それどころか、かえって罪を犯し続けているのです。けれども信者はそうではありません。信者は罪を犯しますが、それは彼らの弱さからであり、信者は罪を犯すとこれを悔い改めようとするのです。信者は神の律法を喜んでいますが、ただ心の内には戦いがあるのです。しかし信者は、この戦いに決して失望はしません。なぜならば信者は、必ずこの戦いを通して主イエスの力を体験することができからです。「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。(25節)」。

私たちは決して絶望の叫びをあげるのではなく、救いの喜びの声をあげるようになります。24節では最も深い嘆きの声を体験しますが、25節においては最も深い喜びの声を体験するのです。

この勝利の秘訣は、生まれ変わった人間の努力や力にあるのではなく、ただ生まれ変わった人

間の内に住みたもう主イエスの力にあるのです。ただ一度だけの生まれ変わりだけでは十分ではありません。私たちが毎日新しく主に自分自身を明け渡すならば、それによって聖霊が私たちを通して自由に働くことができ、そして聖霊が私たちを勝利に導いてくださるのです。

聖霊が私たちを支配してくださるかどうかによって、私たちは7章17節にあるように「それを行なっているのはもはや私ではなく、私の内に住みついている罪なのです」と言うことになるか、あるいはガラテヤ2章20節にあるように「私はキリストと共に十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」とすることができ、そのどちらかが決まってくるのです。

私たちが全く空の器になり、主が私たちの内に力を現わすことができるようにしたいものです。

15 新しい生活の歩みのための力

ローマ人への手紙

8章1節から10節まで

I 信者にとっての二つの重要な事実

- 1 主のうちにある私たち——立場
- 2 私たちのうちにある主——状態

II 信者の内にある対立する二つの力

- 1 内にすむ罪
- 2 内にすみたまう御霊

III 信者の取りうる二つの態度

- 1 肉の歩み —— 聖霊の内住
- 2 御霊の歩み —— 聖霊の支配

クリスチャンドクターを目指しながら、筑波大学医学部二年生で病のため
天に召された一人娘まりさんを記念する碑の側に立つ重田定義（東海大学
医学部教授）都代子夫妻。まりさんと天で再会する喜びと希望に溢れて。書は都代子さん。



ローマ人への手紙7章で私たちは、ひとりの生まれ変わった新しい人が自分の力で戦い、そして戦いに敗れてしまったその嘆きと叫びを知りました。

8章では私たちは、聖霊に満たされ、聖霊に導かれている信者の喜びの声を聞くことができます。今日は、最初の1〜10節までを学んでみましょう。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。

肉に従う者は肉的なことをもつばら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。肉にある者は神を喜ばせることができません。

けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。もしキリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が義のゆえに生きています。

7章で私たちは、律法というものが私たちに与えられているその目的は、私たちが自分たちの失われている状態をはっきり認めることができ、このことを通して救い主の必要性を認めることができるようになるためであるということ学びました。すべての信者たちは、内にある古い人の破産を体験した人々です。しかし、律法はさらに、信者となって新しく生まれ変わった人々にも霊的な破産をもたらすという目的を持っています。この新しい人の破産をも体験した人々は、絶望へ至る戦いを味わわなければなりません。しかし、極めて少ないこれらの人々は、この新しい人の破産の体験の後で、新しい生活の歩みのための力を見いだすようになったのです。7章では私たちは、このような絶望にいたる戦いを体験した人の叫びを知りました。すなわち、善をしたいという願いを持ちながら、これをする力を持たない人の絶望の叫びでした。「私は本当に惨めな人間です」という叫びを聞いたのです。これこそが、もつとも深い嘆きの叫びです。引き裂かれた生活の窮みからの叫びを私たちはここに聞くことができます。あらゆる戦いとあらゆる試みにもかかわらず、すべてが虚しかったのです。しかし8章において、私たちはこれとは全く逆の喜びの叫びを聞くことができます。それは勝利の叫びであり、勝利の歌が聞かれるのです。この1―10節までの中から、私たちは三つの重要な点について考えてみたいと思います。

I 信者にとって大切な二つの事実について

II 信者の心の中にある対立する二つの力について

III 信者の取りうる二つの異なった態度について

I 信者にとって大切な二つの事実について

私たちは、ローマ人への手紙7章までで、このなかに記されているいくつかの重要な事実について注目してきました。3―6章では、私たちは主イエスの十字架と復活という重要な事実について考えてきました。「事実」はそれだけでは何の力にもなりません。もし、私たちがその「事実」を自分のものにならないかぎり、それだけでは力にはならないのです。

8章において、私たちはもう一つの重要な事実について見ることができます。それは、聖霊の降臨、すなわち信じる者に神の聖霊が下ったという事実です。主イエスを救い主として受け入れた人は、罪の赦し、神との平和、永遠のいのちを持つだけでなく、その人のうちに神の聖霊を宿すことになるのです。

3―5章のテーマは、神によって義とされているということ、すなわち、義認でした。その中で、「私たちは主イエスを通して何を与えられているか」ということを学んできたのです。

信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。

(ローマ5・1)

福音の主なる内容は、主イエスが私たちのために死んでくださり、またよみがえってください、そして、今もなお私たちのために生きてくださるということです。

6章のテーマは、罪からの解放、すなわち、私たちが自由にされているということでした。そ

の中で私たちは、「私たち自身が主イエスと共にどのようなようになったか」ということについて学んできました。私たちも主イエスと一緒に十字架につけられ、主イエスとともによみがえり、主イエスとともに生きている、ということです。

3―6章まででは、結局、信者が今置かれているその立場について説明がなされているのです。悔い改めた罪人が、主イエスの流された血潮を信じたときに、その罪人は「アダムにある生活」という立場から、「キリストにある生活」という新しい立場へと移し変えられるのです。このようにして、救われた人はキリストの内にあり、その立場は永遠に変わらないのです。神の目から見ると、御子イエスの外に出てしまった信者の生活というものはありえないのです。信者が生まれ、根をおろすべき土台は主イエスだけなのです。新しい生まれ変わりを通して、信者は新しい性質を与えられ、新しく造られた者となるのです。この新しく造られた人は、また新しい生活の環境を必要としています。というのも、その中においてのみ信者は成長することができるからです。この新しい生活の環境とは「キリストの中にある生活」なのです。

この新しい立場について、8章は私たちに教えています。主イエスを受け入れた人はキリストの内にあります。その人は、もはや罪に定められることがないのです。しかし、10節を見ますと、私たちはキリストにあつて「新しい立場」を与えられているばかりでなく、私たちは「新しい状態」のなかにおかれていることも知ることができます。そこで私たちは、このことによって二つの重要な事実を知ることができるのです。第一は、キリストの内にある私たちの新しい立場ということ。第二は、私たちの新しい状態です。

キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。

(ローマ6・4)

神様の御心は、私たち信者が本当の意味での新しい生活をする事です。しかし7章に入つて、私たちは私たち信者がこのような本当に新しい生活をするために何の力も持っていないということを見てきたのです。つまり善をしたいと思うけれども、その力が私たちの肉の内にないないということでした。しかし8章に入りますと、それにもかかわらず信者が本当の意味での新しい生活をする事ができる、ということを見ることができるとです。

7章に出てくる言葉は、いつも「私たち」です。しかし8章になりますと、「御霊」という言葉が盛んに使われているのがわかります。7章で使われている「私たち」という言葉は、もちろん未信者を指しているのではなく、主イエスを愛し、従つていこうとする信者を指しているのです。しかし、信者の最善の努力でさえも、結局は敗北に終つてしまったのです。

3～5章までは、神に義とされるということ

6章では、罪からの解放ということ

そして、8章に入つて私たちは勝利の生活について学ぶことになるのです。8章においては、主イエスが私たちのために何をしてくださったのかということも、私たちが主イエスとともにどのような立場が与えられているかということも書かれてはいません。ここでは、主イエスが私たちの内にどのようなことをなさろうとしておられるか、ということが述べられています。つま

り、神の御霊が、信者の生活のなかで、自由な力を現わすことができることの必要性ということです。もし、人が主イエスを受け入れると、その瞬間に神の御霊はその人の身体を宮として、その人の内に住んでくださるのです。そして、その御霊は神ですから、その人は力強い助け手を自分のうちに宿すことになり、もはや孤独ではなくなります。

7章において、新しい人は自己の破産を告白して、「私は本当に惨めな人間です」と言いました。しかし、このような私たちの告白に対して、8章では、御霊の方から「私ができます」と言っているのです。7章では、信者の方が「私は善がしたい」と願っているのですが、8章では、御霊が「私が善をすることができます」と言っているのです。したがって、新しく生まれ変わった人には御霊とともに働くということが大切なのです。すなわち、

「私ができる」と言う人と、

「私ができます」と言う御霊とが一緒に働かなければならないのです。

「何がしたい」と言うのは生徒ですが、これに対して、教師は「私はそれができる」と言う者です。登山に連れて行かれる人は「私は山に登りたい」と言うでしょう。これに対して「私は山に登れます」と言う人がこの人を連れて行くのです。破産してしまつた信者は、御霊という機関車がなければ動くことができない貨車のようなものです。

Ⅱ 信者の心の中にある対立する二つの力について

信者の心の中にある対立する二つの力というのは、信者のなかにある「罪の力」と、これに対

する「御霊の力」のことです。信者のうちにある罪の力は、善をしたいという信者の願いよりも大きなものです。2節では二つの原理、すなわち、いのちの御霊の原理と、罪と死の原理が書かれています。「原理」というのは、いつでも決まった働きをする力のことを言います。ですから信者がこの二つの原理のいずれに従うかということが大切な点となります。もし私たちが、罪の原理の下に立つなら私たちは罪を犯すしかなく、いのちの原理の下に立つならもはや罪を犯すことがないのです。

たとえば、エレベーターは二つの原理に支配されていると言うことができるでしょう。一つはエレベーターを下に落そうとする引力の法則です。もう一つはエレベーターを上を持ち上げようとする電力です。もし電流が通じているなら、電気の法則がモーターを動かして引力の法則に打ち勝ち、エレベーターを上へ持ち上げてくれるのです。引力の法則は常に働いています。しかしこれよりずっと強い力の法則が働けば、引力の法則の働きを打ち消してくれるのです。信者がこの地上で生活をしているかぎり、罪の力も働き続けています。けれども御霊の支配が現われるときに、この罪の力は打ち消されるのです。御霊の力に導かれる生活は、本当に新しい生活へと私たちを導いてくれるのです。私たちがいずれの力に支配されて歩むかということによって、私たちが肉のうちに歩む者であるか、それとも御霊のうちに歩む者であるかが決まってくるのです。肉の法則は死をもたします。しかし、御霊の法則はいのちをもたしてくれるのです。ですから、聖書は信者の思いが肉であるか、霊的であるかと問うています。

肉の思いは死です。

御霊の思いはいのちと平安です。

新しい人は神の御心を行なおうとしますが、できません。それは、罪の力の方が彼の願いよりも強いからです。神の御霊こそが、新しい人が願っていることを実際に行なわせることのできる唯一の力なのです。したがって、私たちが自分の力で何でもやろうとするか、それとも御霊の御支配に自分自身を明け渡すか、ということが最も大切なことになります。実際、聖霊の御支配に自分自身を明け渡すことができる人は、ただ自己の破産を体験した人だけです。

Ⅲ 信者の取りうる二つの異った態度について

いずれの態度を私たちが取るかということによって、私たちが肉的な信者となるか、霊的な信者となるかということが決まってしまうのです。9節には「キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません」と書いてあります。すべての信者は聖霊の住んでいる宮です。すべての信者は聖霊が心の中に入ってくださることを通して生まれ変わりを体験します。しかし大切なことは、神の御霊が私たちのうちにただ「住んでいる」かどうかということではなく、私たちのうちに「住んでおられる」御霊が実際に私たちにその御支配を現わしてくださることができかどうか、ということなのです。信者がもしも自分自身のために何かを求めるならば、私たちの内なる御霊はいかなる御支配をも現わすことができないのです。自分自身のために何かを求めることは、神に敵対することになります。御霊はただ主イエスの栄光を求めるという目的だけを持っています。自分を否定して、御霊と同じように主イエスの栄光だけを求める人は、御霊の御

支配を体験し、御霊の現わされる栄光を体験することができるとのことです。

真の自由とは、御霊の支配、また主イエスの御支配を受けるときに、私たちに与えられます。独立の生活ではなく、主イエスにより頼んだ生活によって、私たちは満たされた生活を体験することができるとのことです。主イエスにより頼んだ生活こそが、私たちに実りのある生活を与えてくれるのです。ですから、私たちはどれが私たちの古い性質に属しているものであり、どれが私たちの新しい性質に属しているものであるかを区別することが大切です。すべて古い性質に属しているものは悪魔のものであり、罪であり、暗やみに属するものです。古い性質が支配するときに、私たちは十字架に敵対して歩むことになるのです。

というのは、私はしばしばあなたがたに言ってきたし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。

(ピリピ 3・18、19)

パウロは常に喜びを失わなかった人でしたが、ここでは涙を流しています。この涙は未信者に対して流されたものではなく、信者に対して流されたものでした。ここで言われている信者たちは、彼らの罪が赦され、神の子どもとされ、永遠のいのちを持つようになったということを知っていました。それにもかかわらず、パウロは彼らをキリストの十字架の敵と表現したのです。十字架の敵はイエスの敵とは違います。十字架の敵とは、地の物に対する思いです。それゆえパウ

口は繰り返して「上にあるものを求めなさい。地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい」(コロサイ3・1、2)と言っているのです。信者の生活においては、主イエスがすべてのすべてであられるか、あるいは、古い性質によってまだ支配されているかの二つに一つです。

新しく生まれることによって、人は神の御心を行ないたいという新しい性質が与えられます。しかし、この新しい性質のみでは、人は無力であり、罪の律法の下にあります。新しい歩みを現実とするための神の賜物は、聖霊です。聖霊によって主イエスは私たちのうちに住んでおられます。聖霊の目指すものは、主イエスが私たちのうちに王座を占めてくださるということです。もし、私たちが主イエスの完全なるご支配のもとに、毎日自分を投げ出すなら、幸いです。そうすることによって、私たちは「圧倒的な勝利者」となることができますからです。

16 私たちの救いのすばらしさ

ローマ人への手紙

8章11節から17節まで

I 救いの意味

- 1 愛されていること
- 2 生きたものとされていること
- 3 解放されていること

II 聖霊の働き

- 1 新しいいのちを与えること
- 2 新しい歩みを備えること
- 3 相続人とすること

III 戦いの目標

- 1 死ぬべきからだを生かすこと
- 2 神の相続人となること
- 3 御子の姿に似た者となること

がんで召される数日前の故郷野章子さん。(がん研究会付属病院にて、同室ベッドのがん患者長澤文枝さんの証しを聞いて救われた。)



ヨハネの福音書11章を読みますと、そこにはラザロのよみがえりについて記されています。私たちはここに救いの素晴らしさの一つの例を見ることができます。

そして、イエスはそう言われると、大声で叫ばれた。「ラザロよ。出て来なさい。」

(ヨハネ 11・43)

主が今日も私たちの心の目を通して、その救いのすばらしさを啓示してくださいように。本日私たちが学ぶローマ人への手紙8章の11・17節の主題も、この救いのすばらしさということです。

¹¹もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださいさるのです。

¹²ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません。¹³もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。

¹⁴神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子でもあります。¹⁵あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。¹⁶私たちが神の子でもあることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいさいます。¹⁷もし子どもであるなら、相続人

でもあります。私たちがキリストと、栄光とともに受けるために苦難をともしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。(ローマ 8・11-17)

本日の箇所から、三つの点について考えてみたいと思います。

I 救いの意味について

II 聖霊の働きについて

III 戦いの目標について

I 救いの意味について

救いとは、

第一に、愛されていることであり、

第二に、生きたものとされることであり、

第三に、解放されることを意味しています。

ラザロの出来事を通して、このことを知ることができます。主イエスがラザロを愛しておられたということは、ヨハネ11章に三回述べられています。「あなたが愛しておられる者が病氣です。(3節)」「イエスはマルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。(5節)」「ご覧なさい。主はどんなに彼を愛しておられたことか。(36節)」。

愛されていることを知ることは、その人に力と勇気を与えます。だれにも愛されていない人は、

疑い深くなり、希望のない状態になり、孤独になります。生きておられる神は、私たち一人一人を愛しておられます。主は変ることのない愛を持って私たちを愛しておられます。主の愛は、愛される者がどのような状態にあっても、変わることなく注がれる愛です。主は、私たちがその愛にたとえ応えなくても、あるいは私たちが主の愛を拒絶するようなことがあったとしても、変わらず私たちを愛していただきます。救いの意味とは、主の示しておられるこの愛に対して心の目を開くことです。

第二に、救いとは私たちを生きたものとします。ラザロは生かされる、ということを経験しました。聖書は、あらゆる人間は神に対して死んだものであると言っています。御霊が、人間の神に対して死んでいた霊に代わって私たちの内に住んでくださるとき、その人は生きたものとされ、救いにあずかることができるのです。言いかえるなら、それは救われたということです。多くの知識を所有しているということは問題ではありません。また、主イエスに従うことを決心するだけでも十分とは言えません。それは、理想主義者ならばだれでもそのようにすることができからです。最も大切なことは、生きたものとされること、つまり、御霊が人間の内に住んでくださることです。「キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません（９節）」。救いの三番目の意味は、解放です。多くの人々が、今述べられたことを体験しました。つまり、主イエスに愛されており、御霊によって生きたものとされたということを体験するようになりました。彼らは、救いの確信を自分のものとしたのです。彼らはもう裁きに会うことがないということをはっきりと知るようになりました。しかし多くの信者は、ラザロと同じような状態にありま

す。ラザロは自分が愛されており、生きたものとされたということを知っていました。けれども、ラザロはそれでもなお手と足を長い布で巻かれ、顔は布切れで包まれていたのです。つまり、目を見る事ができなかったし、手足は布に妨げられて自由に歩きまわることができなかったのです。私たちはラザロと同じような状態にいるのではないのでしょうか。解放される前のラザロと同じような状態にある者は、救いの素晴らしさをまだ知っていないと言えましょう。救いとは、解放されること、全く自由にされることを意味しています。ラザロは完全な自由を体験しました。ヨハネ12章2節を見ると、ラザロがイエスと共に食卓についていたと書かれています。食卓につくことは交わりを持つということを意味しています。多くの信者は救いの一部分しか体験していないと言えましょう。彼らは日々の生活において、瞬間々々を主との交わりのうちに過ごすということを知りません。これは本当に悲しむべきことです。私たちは完全な救いを体験するために召されているのですから。

Ⅱ 聖霊の働きについて

聖霊の働きによって、主イエスからもたらされた救いが私たちのものとなり、私たちの体験となるのです。聖霊には三つの働きがあります。

- 1 聖霊のみが、新しいいのちを与えることができます。
- 2 また、聖霊は新しい歩みをするための力を与えます。
- 3 さらに、聖霊のみが私たちを相続人としてくださるのです。

第一に、聖霊が新しいいのちを与えることができる、ということについて考えてみましょう。
いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。
(ヨハネ 6・63)

聖霊が内に住んでくださることによってのみ、私たちは神の子とされるのです。9～11節にそのことがはっきりと記されています。聖霊を宿している、ということが救われているということの証拠です。

あなたがたのからだはキリストのからだの一部であることを、知らないのですか。……あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものでないことを、知らないのですか。

(Ⅰコリント 6・15, 19)

私たちは生ける神の宮なのです。

(Ⅱコリント 6・16)

私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

(ローマ 5・5)

このような御言葉は、確信に満ちた御言葉です。聖霊が与えられているということに対して単に漠然としたことを述べているのではなく、確信を持って書かれているのです。神と一つにされ

たという確信は、神の子の喜びです。主が私たちの父であり、また私たちは、神の子どもである、ということを知るのは私たちに大きな力づけを与えます。真の信者はだれでも、私たちは神の家族の一員である、ということを知っています。どのような教派、教団に属しよう、本当の信者は人間的な枠組みを越えて神の家族として一つである、ということを確認して喜んでいきます。「私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてください」と16節にあります。

御霊御自身があかししてください、これが最も大切なことです。理性によって確信をつかんでいるというのではなく、感情によつて約束されているというのではなく、御霊御自身があかししてくださいのです。この御霊のあかしがなければ、その人には一番大切なことが欠けていると言えましょう。この確信を持ちたいとは思いいけません。神の御霊が、あなたは神の子どもであると告げてくださるのです。新しいいのち、永遠のいのちのみが神の御霊を与えることができますのです。

第二に、御霊は、単に新しく生まれる力を与えるだけでなく、新しく歩む力をも与えてくださいます。子どもが生まれるということは大きな喜びです。ところが、生まれたままで少しも成長しないとしたらどうでしょうか。それは悩みの種となります。新しく生まれただけで少しも成長しない信者の場合にも、同じことが言えます。これも本当に大きな悲しむべきことです。ラザロの場合を振り返ってみましょう。彼は手と足を長い布で巻かれており、顔は布切れで包まれましたが、それは取り去られなければなりませんでした。さもないければ主イエスを見ることも、

交わりを持つこともできなかったでしょう。ラザロが食卓について主と交わりを持っていたときには、もうこれらの布は取り去られていました。信者はだれでも自分は愛されているということ、生かされているという体験を持っています。しかし、まだ葬りの布をからだに巻いたままでいるような信者は、新しい歩みを踏み出すことができません。顔が布で覆われているなら、主イエスを見ることもできません。

多くの信者は、目に見えるものに目を奪われ、自分の感情や自分の問題を見つめていて、自分を大事にし、消極的な信仰生活、つまり、目に見えるものの背後にいます主イエスを見過ごしているのです。よみがえらされたラザロは、まだ束縛された状態にありました。ラザロは自分自身を解放するという力を持っていませんでした。これと同じように、新しく生まれた信者も自分の努力で良いことを行なう力もなければ、主イエスのために生きるという力さえも持たないのです。しかし、私たちにはできないことを、御霊はなさることができます。このことが、8章に述べられている信者の人間的な努力に対する神の解答です。御霊の力は新しく生まれた人に、今まで彼が欲してもできなかったことを行なう力を与えます。新しく生まれることによって、私たちの神に対する関係は新たなものとなりました。かつて私たちは神に逆らい、霊的に盲で、つんばでしたが、今は、主との交わりのうちに主の喜ばれることをするように変えられたのです。御霊が内に住んでくださることによって神の子とされた信者は、相続人とされる特権を与えられています。ところが、現実には相続人となるためには成長して、相続するための資格を得なければなりません。

相続人というものは、全財産の持ち主なのに、子どものうちは、奴隷と少しも違わず、

父の定めた日まで、後見人や管理者の下にあります。

(ガラテヤ4・1)

さらに、第三に、聖霊のみが私たちを相続人としてくださるということについて学んでみましょう。もちろん、これはいままで学んだ第二の点、すなわち新しい歩みと関係があります。新しい歩みのもたらすものは相続人となるということです。新しく歩み、相続人となるために8章14節は大変重要です。「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです」。

ここでは、子どもという表現が使われていますが、これは本当は息子という意味です。ギリシャ語では、子どもと息子の間には大きな違いがあります。ガラテヤ4章1節によると、子どもと奴隷は財産の相続に対して同じ資格しか持っていないということが書いてあります。子どもが成長して、財産相続の権利を持ち、父親が安心してその財産を任せることができるようになったとき、息子と呼ばれるようになります。子どもは、父親の愛情に完全に信頼しているものです。息子は、ただ単に自分が愛されており、父の子であるということを確信しているのみでなく「父の御霊によって導かれる」ということを特徴としているものです。私たちは自分自身の意志によって、また考えや感情によって導かれるか、それとも御霊によって導かれるか二つに一つです。このことによって、信者が神の子どもであるか、神の息子であるかということがはっきりとわかるようになります。私たちは己れを捨てて、すなわち、自分の意志、感情、思いを捨てて、御霊に絶対的に従順に従う用意があるでしょうか。新約聖書の手紙が書かれた主な理由は、信者がなかなか成長しないという点にあります。

あなたがたは年数からすれば教師になつていなければならないにもかかわらず、神のこ
とばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物で
はなく、乳を必要とするようになっていきます。まだ乳ばかり飲んでゐるような者はみな、
義の教えには通じてはいません。幼子なのです。しかし、堅い食物はおとなの物であつて、
経験によつて良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。

(ヘブル 5・12-14)

さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かつて、御霊に属する人に対するようには話
すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。私
はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理
だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。あなたがたは、まだ肉に属してゐるか
らです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属して
いるではありませんか。そして、ただの人のように歩んでゐるではありませんか。

(Iコリント 3・1-3)

あなたがたのために私の労したことは、むだだったのではないか、と私はあなたがたの
ことを案じています。

私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたが

たのために産みの苦しみをしています。それで、今あなたがたといっしょにしていることができたなら、そしてこんな語調でなく話せたらと思います。あなたがたのことをどうしたらよいかと困っているのです。

(ガラテヤ 4・11, 19, 20)

新約聖書の手紙の目的は、神の子どもが神の息子になるためです。パウロが書いている信者に對するすすめをいくつここにあげてみましょう。

こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身だけにまで達するためです。それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、むしろ、愛をもつて真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるときのためののです。キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。

(エペソ 4・11-16)

私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊

かになり、あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり、神の御栄えと誉れが現わされますように。

(ピリピ 1・9～11)

キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。ですから、成人である者はみな、このような考え方をしましょう。もし、あなたがたがどこかでこれと違った考え方をしているなら、神はそのこともあなたがたに明らかにしてください。それはそれとして、私たちはすでに達しているところを基準として、進むべきです。

(ピリピ 3・14～16)

こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。また、主になつた歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。また、神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって強くされて、忍耐と寛容を尽くし、また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった父なる神に、喜びをもって感謝をささげることができるよう。

(コロサイ 1・9～12)

神の御霊に導かれる者のみが、神の救いの素晴らしさを体験することができます。御霊に導かれる者は、あらゆる束縛から解放されます。ちょうどラザロが葬りの布から解放されたようにです。御霊に導かれる者は、人と世から完全に解放されます。主イエスに全く拠り頼む者となります。

17節によれば、相続人になるためには、御霊に導かれることだけではなく、キリストと苦難をともにすることが必要条件としてあげられています。「ともにしているなら」の「なら」とは、条件を示しています。苦難をともにしなければ、キリストとの共同相続人となることはできない、と書いてあります。御霊は、私たちに相続人となることを望んでおられます。けれども御霊の導きを拒めば、相続人の資格を失います。その例がヤコブの兄エサウです。エサウは長子として相続権を持っていました。しかし、御霊に導かれるということをおざりにしたために、長子の権を失ってしまったのです。

あなたがたが知っているとおり、彼は後になって祝福を相続したいと思ったが、退けられました。涙を流して求めても、彼には心を変えてもらう余地がありませんでした。

(ヘブル 12・17)

エサウがイサクの子どもである、すなわち、神の民に属しているものである、ということには間違いがありませんが、彼は相続する権利を失ってしまったのでした。エサウは死に至るまで、

いわば葬りの布にくるまれたままであった人で、救いの素晴しさを体験するまでにはいたらなかったのです。

もう一つの例は、モーセです。モーセはかつてある選択を迫られたことがありました。聖書によれば、モーセは「はかない罪の楽しみを受けるか、神の民とともに苦しむかの選択を迫られた」とあります。モーセの決断によって、モーセは救いの素晴しさを体験したのみでなく、全イスラエルの民の解放者となったのです。パウロもまたこの選択を迫られたのです。パウロはこう言っています。

私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり……。 (ピリピ 3・10)

神の望んでおられることは、私たちが相続人となることです。相続人となるための道、御栄光にあずかるための道は、苦難にあずかることです。主イエスと日々交わりを持つ者だけが、苦難を共にすることができるのです。

Ⅲ 戦いの目標について

ともに苦しむということは、戦いの中に投げ込まれているという意味です。信者の生活において悪魔が勝利を得る最も大きな点は、信者が見える世界のみを見て、見えない世界を忘れてしまうということです。私たちが体験している見える世界の物事は、単に見えない世界の現われにす

きません。ところで、戦いの目標とはいったい何でしょうか。

第一は、内に住まれる御霊によって、死ぬべきからだを生かされること。(11節)

第二は、神の相続人となり、キリストの相続人となること。(17節)

そして第三に、御子の姿に似たものとなることです。(29節)

私たちの死ぬべきからだは生きたものとなる、ということに間違いはありません。今日のクリスチャンは、その霊の状態とからだの状態の間に一致がありません。すなわち、信者の霊は、御霊によって生かされていますが、からだは生かされることを待ち望んでいる状態にあるのです。信者の肉体は、今なお病氣や死によって縛られています。しかし、霊が生かされていることは、からだもまた生かされるということを保証しています。聖霊の住むところ、からだもまた生きたものとされます。「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます(8章23節)」。

キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。(ピリピ3・21)

戦いの第二の目標は、神の相続人となり、キリストの共同相続人となることです。ラザロの例で見るように、よみがえらされただけでなく、主イエスは交わりを持つことを求めておられます。私たちに對しても同様、生かされただけでなく、日々また永久に主イエスとの交わりに入ること

を望んでおられます。

父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。

(ヨハネ 17・24)

勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。

(黙示録 3・21)

前に述べたように、相続人になるためには、苦しみをもにすることがどうしても必要です。ラザロもまた苦難を受けなければなりませんでした。「祭司長たちはラザロも殺そうと相談した。(ヨハネ 12・10)」。

私たちがともに苦難にあずかるものとなり、勝利を得るものとなれば、私たちは相続人とされるのです。8章12節には、この戦いについて書き記してあります。ここで言う肉とは、信者の自我にほかなりません。あなたの心が欲するもの、他ならぬそれがあなたの最大の敵です。肉に従って歩むとは、自分自身を見て、神のご栄光を目指すことをないがしろにすることにほかなりません。何を食べ、何を飲み、何を着、今夜どこに行き、いくらのお金を儲けるかといったことはそんなに大切ではありません。どうしても必要なことは、主が私たちに何を望んでおられるか、どのようにして主にお仕えすることができるか、私を通してどのようにして他の人々を救うことが

できるか、ということです。

大切なのは私たちが中心なのか、それとも、主イエスが中心なのかということです。

私たちは、自分の思いに従って歩むか、御霊に導かれて歩むかのどちらかです。13節によれば、私たちが自らの思い、自らの意志に従って歩めば、行き着く先は死であり、御霊によって導かれるならば、救いの素晴しさを体験するようになります。

戦いの最後の目的は、29節にあるように、御子の姿に似たものとなることです。主の姿に似るものとされること、このことは想像もつかないほど素晴らしいことです。

御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。

(ヘブル1・3)

私たちが主イエスと似るものとされることを、聖書は約束しています。

キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。

(Iヨハネ3・2)

最後に、聖書から二箇所お読みして終りたいと思います。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時

が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。

(ヨハネ 5・24-25)

ラザロは主イエスの招きを受けて墓からよみがえりました。主イエスの御言葉によってよみがえらされたのです。今日でもなお、主イエスの御声を聞いて「すべて重荷を負っている者、疲れている者はわたしのもとにきなさい。わたしはあなたを休ませてあげよう」という御招きに従っていく者は、主イエスによって生かされ、霊的な死からよみがえらされるのです。主イエスは、「わたしのもとに来るものを、わたしは決して拒まない」とおっしゃいました。死人が、霊的に死んだ者が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。

「眠っている人よ。目をさませ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる。」∴御霊に満されなさい。

(エペソ 5・14, 18)

この御言葉は、信者のために書かれました。この人達は生かされたものであったにもかかわらず、眠っている人々、死者の中に横たわる人々、と言われています。彼らは、葬りの布に包まれたラザロの状態でした。顔を布で覆われたラザロのように、この人々は主イエスを見ることできませんでした。それゆえ「目をさませ。起き上がれ。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる」と呼びかけられているのです。私たちも、ラザロと同様にあらゆる束縛から解放され、主との親しい交わりに導き入れられたいものです。

17 生ける望み

ローマ人への手紙

8章18節から30節まで

I 今の時の苦しみ

II 本当の解放を求める祈り

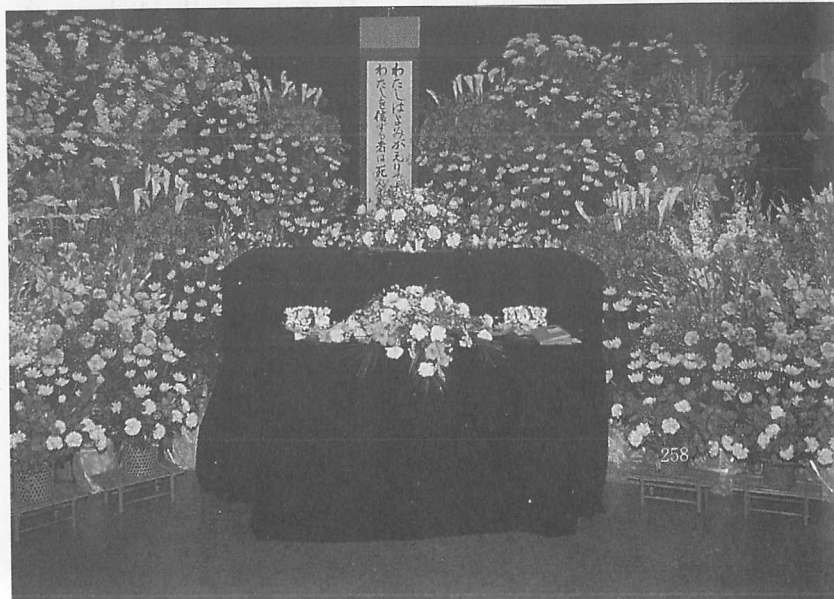
御霊の働き

1 確信を与える

2 力を与える

3 聖霊の権威

III 神に選ばれた者



故金子裕一郎氏(元東洋埠頭株式会社常務)の葬儀。

今日の主題は、「生ける望み」ということです。一般に「望み」という場合には、将来の何か良いこと、例えば幸せとか、福祉とか、正義、救いというようなことを期待しながら、待っている人間の態度を言います。それは人間の本質であり、人間だけが持つことができるものです。とりわけ若い人は希望で一杯ですが、比較的年長の人でも静かな望みを心に秘めているものです。ですからもはや望むことが何もなくなくなってしまような時には、ただ絶望と死だけしかないように思っています。

聖書の言う望みとは、将来行なわれる救いの完成を確信を持って待ち望むことです。そしてこの望みは、ただ信仰からのみ出てくるものであり、いかなる訓練、あるいは試練の中にあっても必ず勇気を与えてくれるものです。この聖書の望みは、一般に言われているような望みとは相容れないものです。

一般的な望みは、常にこの世に向けられていて、本当の確かさがなかったために心の奥は虚しさに支配されています。それに対して、聖書の望みは主イエスから与えられた望みのゆえに、この世のあらゆる虚しいものを捨てて力を持つており、そのために心は常に満たされ、慰められ、力を与えられます。生き生きとした望みの秘訣は、いったい何でしょうか。それは、私たちが自分自身を見たり、他人を見たり、私たちを取り巻く周囲の状況を見たりすることをしないで、望みそのものであられる主御自身を見上げることにあります。それは、心配や不安、恐れからの解放を意味しています。今日は、この私たちの「生ける望み」について、学んでみましょう。

今¹⁸の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。被造物¹⁹も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入られます。私²²たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていたくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。

私²⁴たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもつて熱心に待ちます。

御霊²⁶も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらいかがわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。

人間²⁷の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っ

ておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子とえられるためです。

神は³⁰あらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。

(ローマ 8・18-30)

I 「生ける望み」は、今の苦しみを通して本物であるかどうかを試されています。ですから18-23節までは、「今の時の苦しみ」と題することができます。

II 「生ける望み」とは、内に住みたまう御霊の実です。15章13節に「どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもつて満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように」とあります。ですから24-27節までの題は「本当の解放を求める祈り」とすることが出来ます。

III 「生ける望み」は、自分は神によって選ばれた者であるという確信に基づいています。そこで28-30節までは「神に選ばれた者」という題をつけることができます。この三つのことがらについて、これから学んでみたいと思います。

I 今の時の苦しみ

人間ができる唯一の正確なことは、数学的な計算だけです。例えば、地図を作る人が、百分完全な地図を作ることは不可能です。また同様に、歴史家も過ぎ去った事実について百分完全に記

述することはできません。人間ができることで百分完全にできることは算数の計算だけです。2
たす2は4ですが、このことを疑う人はおそらくいないでしょう。パウロが18節で「私は考えま
す」と言っている「考える」という言葉は、実はこの「計算する」という意味の言葉なのです。
パウロがここで考慮に入れていることは事実のみです。パウロがここで言っている今の苦しみと
は、パウロの想像でも、うわごとでもありません。これはパウロにとって現実でした。パウロは
私たちが考える以上に多くの苦しみに会っていました。

私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数
えきれず、死に直面したこともしばしばでした。ユダヤ人から三十九のむちを受けたこと
が五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、
一昼夜、海上を漂ったこともあります。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受
ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労
し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、
裸でいたこともあります。このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるす
べての教会への心づかいがあります。

(Ⅱコリント11・23-28)

ここでパウロは、「今の時」という言葉を使っていますが、「今」とは永遠に続くものではなく、
限界のあることを意味しています。苦しみにははっきりとした目的があり、またどこかへ至る道
であり、手段です。

パウロは自分の肉体が弱いということを知っていました。パウロは病気がちであり、たいいていつもどこかが悪い状態であったようです。

パウロは、外にも内にも重荷を負っていました。外面的には迫害を受けていましたし、内面的には教会に対する心づかいがありました。

パウロは、滅びゆく物に束縛されて、悩みが絶えなかったのです。

ところがパウロは、来たるべき栄光を待ち望んでいましたから、今の時の苦しみと将来啓示されようとしている栄光とを比較してみて、この苦しみが栄光に比べれば、取るに足りないものであるということを証ししたのです。もしパウロが、自分の苦しみを、啓示される栄光と比べることをしなかったなら、彼はこの苦しみに押しつぶされてしまい、喜びも平和も力もうせてしまったことでしょう。悪魔は私たちを疑惑に陥れることをたくらんでいます。パウロもまた、そのことを知っていました。それゆえ、彼は18節で苦しみと栄光とを計りにかけて、今の現実的な苦しみは将来の栄光に比べれば取るに足りないことを確信したのです。私たちは信者として、もうすでに将来の栄光に部分的にあずかっているのです。

またわたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。(ヨハネ17・22)

この栄光とはいったい何でしょうか。次の言葉がこの栄光について説明しています。

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおれた人は。幸いなことよ。

主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。

(詩篇32・1、2)

信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。

(ローマ5・1)

私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。

(Iヨハネ1・3)

これらの御言葉は、私たち信じるものが今日すでに持っている栄光について述べています。しかしながら、完全な栄光のすべてを私たちが自分のものとしているわけではありません。今日の私たちの状態をパウロは19節で「切実な思いで待ち望んでいる」と表現しています。ここでいう被造物とは、信者も、未信者もまた造られたすべての生物をも含みます。今日私たちが直面している困難や苦しみの原因は罪です。この罪によって、被造物は呪いのもとにあるのです。神を知らない人々は、自分の人生を運命であるとあきらめて、未来に対して不安を持ちながら生活しています。信者は、いまの苦しみがつかの間のものであり、将来主イエスの栄光にあずかるものとされる、ということを確認しています。捕虜にされた人は、近い将来自分の家族に再会することができると思えば、捕われの身であっても力がわいてきます。生ける望みを持っていない人は、悲惨です。生ける望みは、喜びと力とを与えてくれます。21節に書いてあるように、私たちには栄光の自由が約束されています。神から自由になること、つまり神の御手から逃れることは人間

にはできないことです、私たちは神のために人と世から解放され、自由になることができます。神なしに、人は自分勝手な道を歩むことはできませんが、その結末は滅びと死です。22節には「産みの苦しみ」という表現が使われています。産みの苦しみとは望みのない死に対する戦いです。長いあいだ闇のなかにいた者が、生まれることによって光のもとに出されます。苦しみは栄光に至る途上にある、ということのしるしです。栄光にあずかるものとして約束された信者もまた、この苦しみを忍んでいます。彼らはその弱い肉体を悩んでいます、栄光の御霊がもうすでに彼らの上にとどまってくださり、力を与えてくださいます。栄光の御霊は、この苦しみによって、彼らを栄光の内に導き入れます。産みの苦しみとは、実際に主イエスの御跡に従おうとする者の体験することです。つまり、信者もまた悩み、苦しみ、切実な思いで待ち望む状態にあるということです。完全な解放は、将来において行なわれます。

キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。
(ピリピ3・21)

Ⅱ 本当の解放を求める祈り

生ける望みとは、内に住みたまう御霊の実です。生ける望みとは、栄光の御霊の結実です。24節までは、御霊がどのような働きをするか、ということについて書いてあります。26節では、信する者がいかに弱く、力のない状態にあるかということについて述べています。「弱い私たち」、また「私たちはわからない」という表現が出てきます。ここでは、信者の祈りではなく、信者の

内に住みたまう聖霊の祈りについて書かれています。ハドソン・テラーという人は、神によって非常に用いられたしもべでしたが、彼は「私には聖書を読む力もない、祈る力もない、ただ私のなしうることは、イエス様によりすごることだけだ」と証しました。御霊の力に拠り頼まない信者は、全く役に立たないものです。もし私たちが、自分自身を御霊にゆだね、御霊の導きに従うならば、御霊はいったい何を私たちになさるのでしょうか。

第一に、御霊は、私たちに確信を与えます。「私たちが神の子どもであり、この栄光の御霊によって「私たちが栄光にあずかる者とされる」という二つの確信を与えてくれます。

第二に、聖霊は、私たちに力を与えます。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます（26節）」。

私たちは、しばしば弱く、力なく、どうしたらよいかわからず、知恵を持たない状態に陥ります。しかしそのとき、御霊は私たちを助けてくださいます。

第三に、27節から聖霊の権威について学ぶことができます。「御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださる」。

私たちがしようと欲してもできないことを、御霊はなしてくださいます。これがローマ人への手紙8章の中心テーマです。

信者は、しばしば八方ふさがりの状態に陥りますが、信者がどのような状態になろうとも、信者の内に住みたまう御霊は、力に満ち、確信に満ちています。たとえ私たちが今絶望したとしても、御霊ご自身が私たちのためにとりなしをして、私たちを助けてくださいます。こうして、私

たちの弱さは祝福されたものとなるのです。私たちが、自分自身が求めることを追求するのではなく、御霊ご自身に自分を明け渡すことができれば本当に幸いです。

Ⅲ 神に選ばれた者

28-30節は、私たちが神によって選ばれた存在である、ということを述べています。生ける望みとは、自分が神によって選ばれた者である、という確信に基づいています。29、30節には、三つのことがらが述べられています。

第一に、永遠の昔から神はイエス・キリストにあつて選ばれた人々をあらかじめ知っておられ、またあらかじめ定めておられました。

第二に、神は現在、あらかじめ定められた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認めてくださいました。

第三に、神は将来において、義と認めた人々をさらに栄光にあずかる者としてくださいます。

この節は、過去においてしばしば誤って解釈された節です。ある人達は、人間はあらかじめ信者と未信者に定められており、未信者に定められている人はいくら求めても神を見い出すことができないと主張します。このことはとんでもない間違いです。主イエスは「わたしのもとに来る者を、決して拒まない」とおっしゃってくださいました。聖書は、主イエスがすべての人のために死なれたこと、そして、すべての人がイエス・キリストにあつて生きるために主は死なれたと言っています。それではいったい、この節をどのように理解したらよいのでしょうか。

神は、永遠の昔から主イエスを受けいれるようになる人々をご存じであられ、主イエスの血潮によつてきよめられ、義とされるようになる人々をご存じでした。

神は、私たち人間に自由意志をお与えになり、私たちが恵みを受けるか、それとも恵みを拒むものになるかを私たちにお任せになりました。

神は、恵みを受ける人々を、すなわち、救われる人々をあらかじめご存じでしたが、その人々を定めておられたではありません。神が定めておられたのは、自由意志をもって主イエスを受け入れた人々が御子に似る者となることでした。いわゆる予定説というのは、信仰、すなわち救われる人々に対することではなく、救われた人が後になって間違いなく栄光にあずかるものとされる、ということを立てているのです。義と認められた人々は、必ず栄光にあずかるものとされます。救いに関しては、すべての人々が救われるようになることが神のみことである、と、聖書にははっきりと語っています。

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。

(Ⅰテモテ2・4)

主は、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

(Ⅱペテロ3・9)

神様は、すべての人がただへりくだる心を持って恵みを受け入れれば、恵みを与えてくださる

と約束しておられます。

パウロ・フンベルグは、非常に祝福されたドイツの伝道者でしたが、彼は最後の審判の情景を次のように夢に見ました。最後の審判の日に、羊と山羊を分けるようにすべての国々の民が主イエスの御前に集められ、主イエスはご自分の右におられる人々に「祝福された人たち。御国を受け継ぎなさい」と言われ、左にいる人達に「のろわれた者ども。私から離れて、永遠の火に入れ」と言われました。のろわれた者ども、と言われた人々は、主イエスの御声を聞いていちもくさんに逃げだしましたが、そのうちの三人が恐ろしさで足がすくみ、縮みあがってしまい、逃げることができなくなり、その場に立ちすくんでしまいました。そして、その人たちは主イエスの左手にある釘のあとを見たのです。彼らは、互いに語りあいました。

「おい、イエス様の手の釘のあとを見たか。イエス様は私たち滅びる者の罪のためにもいのちを捨ててくださったのだ」「そうだ、私の滅びの責任は私たち自身にある」「どうして私たちは、イエス様を受け入れずに拒んだのだろうか」。

人生において最も大切なことは、主イエスを救い主として受け入れることです。死んでからの後悔は役に立ちません。恵みによって信仰に導き入れられた人々は、御子の姿に似たものに変えられます。この確固とした確信によって生ける望みが生まれます。28節には「私たちは知っています」とあります。この確信は、信者にとって非常に大切なものです。神の御計画を成就するために、すべてが働きます。悪魔は私たちを主イエスから引き離し、私たちの確信をぐらつかせようとチャンスをねらっています。しかしながら、悪魔でさえも、神の目的を成就するための道具

にすぎません。主イエスは私たちの手をしっかりと握っておられ、私たちが離そうとしてもイエスの方でその手を離されません。

「だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」（ヨハネ 10・28）

私たちはすべてのことを理解し尽すことはできませんし、私たちの目は完全に曇りのないものとされていませんが、それでも私たちの直面している問題や悩みの背後には主イエスがおられ、すべてご存じであられるということに私たちは確信を持っています。すべてのことを働かせて益としてくださるためには一つの条件があります。その条件とは、神を愛するということです。神を愛する愛は、無条件の愛でなければなりません。神の愛を受け入れる人は、神を心から愛するようになります。

最後に二つの節を比較してみましよう。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ 3・16）

なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの子弟たちの中で長子となられるためです。

（ローマ 8・29）

初めに引用した節では、主イエスは神のひとり子と書かれています。次の節には、主イエスは長子となられると書いてあります。この二つの言葉の違いはいったい何でしょうか。神のひとり子は、彼に続いて他の兄弟たちが生まれることによって長子となります。神のご目的は、一つの家族をつくること、主イエスと他の多くの兄弟たちとの家族をつくることです。主イエスを救い主として受け入れる人は、新しく生まれる人です。新しく生まれた人は、御子の姿に似たものになる、ということを経験が定めてくださいました。神が定めてくださったことは必ず成就します。私たちもまた主イエスに似たものと変えられるのです。これこそ私たちの確信であり、私たちの生ける望みです。

愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。

(Iヨハネ3・2、3)

18 至上の頌栄

ローマ人への手紙

8章31節から39節まで

I 三つの非常に困難な問題

1 私たちを訴える原因

2 私たちを罪に定める原因

3 私たちを引き離す原因

II 三つの非常に大切な質問

1 訴える者は誰か

2 罪に定めるのは誰か

3 神から引き離すのは誰か

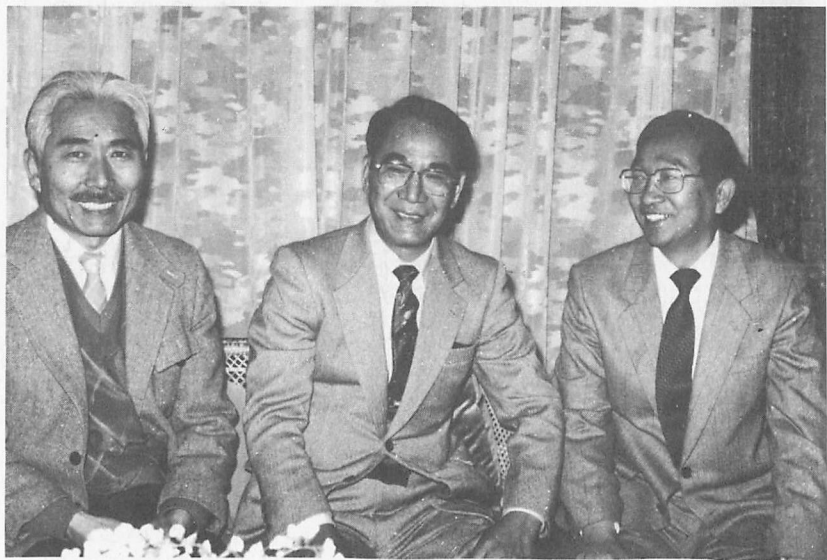
III 三つのすばらしい事実

1 神は私たちの味方であられる

2 キリストは私たちのために

生きていてくださる

3 私たちは圧倒的な勝利者である



キリストの愛が私たちを取り囲んでいる……(IIコリント5:14)
野口広氏(早稲田大学教授) 伊志嶺朝次氏(琉球大学教授)
大塚二郎氏(東京工大助教授)

今日のお話の準備をしながら、ローマ人への手紙8章31〜39節は非常に難しい箇所だということに改めて気付かされたしいです。この箇所は、ただ理解するだけならば、そんなに難しいとは言えませんが、ここは感謝と歓喜に満ちており、それゆえに人間的な言葉で説明することが困難なところからです。

二、三日前に、ソ連のクリスチャンが書いた手紙を読みました。シベリアのある村で、ある晩幾人かのクリスチャンが集っていたそうです。そこへ、非常に遠くからやってきた機関車の運転手が部屋の中に飛び込んできました。彼が十五冊の聖書と注解書を鞆の中から出して机の上に置いて見せると、人々はその宝物のような聖書を前にして、感謝のあまりその場にひざまずいてしまいました。彼らにとつては、聖書はそれほどまでに貴重なものだったからです。約二十分間の静寂の後、一人の兄弟が感謝のために祈りはじめました。すると他の人々もそれに続いて次々と賛美をはじめ、その祝福の集いは夜が明けるまで続いたということです。

私たちが今日学ぶ箇所を読むときにも、私たちは御前にひざまずき、沈黙せざるをえなくなります。その後で私たちにできることは、ただ主の前に礼拝することだけです。

では、これらのことからどう言えるでしょう。³¹神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。³²私たちはすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。³³神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。³⁴罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえ

られた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていただくのです。

私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。

³⁶「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。

私たちは、ほふられる羊とみなされた。」

と書いてあるとおりです。³⁷しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあつても、圧倒的な勝利者となるのです。

私は³⁸こう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

(ローマ 8・31-39)

この箇所は非常に力に満ちた箇所であり、私たちの言葉をもつては語り尽くすことの不可能なほど豊かな内容を持っています。この箇所の主題を「至上の頌栄」とつけることができるでしょう。三つのことがらをこのテキストを通して考えてみたいと思います。

I 三つの非常に困難な問題

II 三つの非常に大切な質問

Ⅲ 三つの非常にすばらしい事実

Ⅰ 三つの非常に困難な問題

私たちにとって、非常に困難な三つの問題とは、次のものです。

1 私たちを訴える原因

2 私たちを罪に定める原因

3 私たちを引き離す原因

もし、私たちに罪があるなら、それは訴えられる原因となります。問題の原因は罪であるということ、人はだれでも知っています。多くの人々は自分の犯した罪の罪悪感に苦しめられます。この人々はノイローゼになって精神科医を訪れますが、そこで彼らが受けるアドバイスは「あなたが今ある状態をそのままで認めたらどうですか。そんな罪悪感なんてたいしたものじゃありませんよ」というものでしょう。このアドバイスの従うことによって、問題は本当に解決されるでしょうか。多くの悲観論者は、そんなことはない、と言うでしょう。私たちが罪を犯せば、私たちは罪に定められます。こうして人は、喜びも生きるための力も無くしてしまいます。罪の問題が解決されないうちは、人は罪に定められたままであり、生きておられる神との交わりを持つことができません。罪を犯し、罪に定められ、神から離れる、この三つのことは連鎖反応のように起こることです。あなたの罪の問題は、解決されているでしょうか。罪の問題が解決されていなければ、罪の重荷があなたの上に重くのしかかってくるのであなたには喜びがありません。もし、

罪の意識が解決されなければ、あなたは絶望に追いやられます。罪の問題を解決するということは、罪を過小評価するということでは決してありません。人間的な慰めも、努力も、罪の問題を解決することにはなりません。主イエスのみが、この罪の問題に十分な解決をお与えになることができるのです。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

(ローマ8・1)

イエスを救い主として受け入れた人は、イエスの内にあり、もはや罪に定められることはありません。過去においても、現在においても、未来にあっても罪に定められることはありません。あなたはキリスト・イエスにある者ですか。あなたは主のもとに行かれ、主は決してあなたを拒まなかった、ということを経験されましたでしょうか。罪の赦しを持っておられますか。ローマ人への手紙8章1節は、人間の考え出したことではなく、神からのよき音信であり、動かすべからざる事実です。覚えておいていただきたいことは、

私たちを訴える原因がある

私たちを罪に定める原因がある

私たちを神から引き離す原因がある

ということです。生けるいのちの泉であり、とこしえの喜びの源である神から離れてしまうという可能性があるので。もし、私たちがイエスを主として受け入れ、罪に定める原因を取り除い

ていただくなら、永遠に滅びゆくことから私たちは免れます。主を信じるようになった人々は、自分の罪のゆえに訴えられる原因はもうなくなってしまうた、罪に定められることはもはやない、我らの交わりは父と御子との交わりである、ということをご告白したのです。

Ⅱ 三つの非常に大切な質問

三つの大切な質問とは、次のものです。

1 訴える者は誰か

2 罪に定めるのは誰か

3 神から引き離すものは誰か

第一の、訴える者については、私たちの心と、悪魔と、そして神ご自身が私たちに訴えることができます。私たちの心については、次のように書かれています。

たとい自分の心が責めてもです。なぜなら、神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じだからです。

(Iヨハネ3・20)

私たちは、自分の心を責めるものがあることをしばしば経験します。もし、私たちが主イエスに属する者であるなら、私たちは自分の考えや、自分の感情ではなく、御言葉を大切にすべきです。神は、誰をも罪にはお定めになりません。罪は主イエスにあつて、いっさい解決されているからです。十字架にかけられたときの主イエスの御言葉は「すべてが終った」というものでし

たが、これは、いつさいの罪が解決されたということを示しています。なぜなら、主イエスは、私たちの罪のゆえに懲らしめをお受けになり、主イエスの流された血潮によって、私たちの罪はいつさいきよめられており、私たちが罪に定める原因は、もはや存在しないからです。主イエスの復活によって、神は、主イエスの救いの完全さをお認めになったのです。「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです（33節）」。

信仰によって、主イエスを受け入れる人は、誰でも神によって義と認められるのです。このことが、クリスチャンの喜びです。義とされるということは、罪の赦しをはるかに越えて、素晴らしいことです。罪が赦されるということは、犯した罪がつぐなわれるということを意味するにすぎませんが、義とされるということは、その人が、イエス・キリストのゆえに今まで一度も罪を犯したことがなかった者のようになる、ということです。主イエスの義は、信じて受け入れたその人自身のものになるのです。

私たちが訴えることができるのは、誰でしょうか。それは第一に、今学びましたように、私たちの心ですが、第二番目に、悪魔が私たちを訴えます。

「今や、私たちの神の救いと力と国と、また、神のキリストの權威が現われた。私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。」

（黙示 12・10）

今日、悪魔が信者を神の御前で訴えているのです。悪魔は、私たちを疑惑に陥れ、私たちの信

仰の力を失わせようと策略を尽くしています。非常に大切なことは、主イエスが十字架についてくださり、復活してくださることによって、悪魔の力を砕いてくださったということです。主イエスは、この世を支配する者に対して完全な勝利をおさめられたのです。主イエスのものとされた人はもはや罪に定められることがなく、死からいのちに移されており、悪魔に対して、悪魔よ退け、と言ひ、主イエスの血潮に感謝することができます。

私たちを訴えるもの、その第三にあげることができるのは、神です。全人類は、神の告発のもとにあつたのです。すべての人類は、罪に定められており、呪いのもとにあり、神から引き離されていました。けれども神は、そのひとり子である主イエスを世に送ってください、イエスに苦しみをお与えになり、十字架につけることによって、私たちが訴えられることからの逃がれ道を開いてくださったのです。それゆえに、私たちを訴える原因は、もはや永遠に存在しないのです。何というすばらしい真理でしょうか。この真理を受け入れ感謝した人は、この真理がもたらす自由を体験したのです。神は私たちを訴える権利をお持ちです。しかしながら、神はここでは審判者ではなく、私たちを義と認めてくださる方なのです。

第二の質問は、私たちを罪に定めることができるものは誰か、でした。主イエスが私たちを罪に定めることがおできになります。なぜなら、主イエスは神のお定めになった審判者だからです。

父はだれをもさばかず、すべての裁きを子にゆだねられました。

父は裁きを行なう権を子に与えられました。子は人の子だからです。(ヨハネ5・22、27)

神の裁きは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことを裁かれる日に、行なわれるのです。

(ローマ 2・16)

神は、お立てになったひとりの人により義をもつてこの世界を裁くため、日を決めておられるからです。

(使徒 17・31)

イエスは私たちに命じて、このイエスこそ生きている者と死んだ者との裁き主として、神によって定められた方であることを人々に宣べ伝え、そのあかしをするように、言われたのです。

(使徒 10・42)

主イエスは、神によって定められた裁き主です。ところが、その裁き主を自分の救い主として受け入れることによって、裁き主ご自身が私たちの罪の刑罰を担ってください、もはや私たちが永遠に罪に定められることはないのです。主イエスは、すべてご自分の救いを拒んだ人を罪にお定めになります。人間は、その罪のゆえに罪に定められるのではなく、救いを拒むことによって罪に定められるのです。

第三の質問は、誰が私たちを神から引き離すことができるだろうか、でした。パウロは、ここ

で十七の苦難を挙げています。これらのことがらは、いずれも一時的な苦難です。つまり、永続的なものではありません。パウロはすでに8章18節で、今の時の苦しみは将来の栄光に比べればとるに足りないものである、と証ししています。パウロは自分の身にふりかかってきた現実のこととがらを一つ一つ挙げて言っていたのです。彼は悪魔の使いが自分を打つ、ということも体験しました。

そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。

(Ⅱコリント12・7)

筆舌に尽くしがたい苦しみをパウロは体験していました。

私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、勞し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。

(Ⅱコリント11・23～28)

しかしながらパウロは、これらの苦難に動揺することが決してありませんでした。たとえ犬が月に向って何時間もほえ続けたとしても、月は犬のほえ声に動揺するようなことがあるでしょうか。「我、関せず」です。これと同様に、パウロも常にこの世から聖別されており、この世的な苦難はパウロに対して何の影響も与えることができなかったのです。それゆえパウロは、私たちをキリストの愛から引き離すのは誰ですか、と語ったのです。つまり、引き離すのは「誰」であるか、と言っているものであって、「何」ですか、とは言っていないのです。結婚式で誓約が交されるとき「神が合わせられたものを、人は離してはならない」という御言葉が引用されますが、それと同様なことがここでも言われています。私たちをキリストの愛から引き離すのは、人間でもなければ、その人の境遇でもありません。私たちを引き離すことができるようなものは誰ひとりとして存在しません。主イエスは「私の手から誰も奪いさることのできるものはいない」とおっしゃいました。主イエスによって神と合わせられた者は、永久に主イエスと一つです。

Ⅲ 三つの非常にすばらしい事実

最後に、三つのすばらしい事実について考えてみたいと思います。

- 1 神は私たちの味方であられる
- 2 キリスト・イエスは私たちのために生きていくださる
- 3 私たちは圧倒的な勝利者である

全知全能の神は私たちの味方であられます。そのことは、私たちの人間的な知能では理解できない事実です。それゆえパウロは「これらのことからどう言えるでしょう」と言ったのです。パウロはこのことに対して、適当な言葉を見いだすことができずに、ただ賛美と感謝をすることができたのみでした。神が味方であるなら、誰も私たちに敵対することができません。神はご自分が味方である、ということをご自分の御子を死に渡すことによって証明してくださいました。そしてそのことは、主イエスと一緒にすべてのものを私たちに恵んでくださったということを意味しています。私たちを怒りの裁きから守り、私たちを神の栄光にあずかせてくださるために、神は、御子を十字架におつけになったのです。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネ3・16)

私たちの過去に関して、誰が私たちを訴えることができようか、という質問をしてみましょう。その答えは、誰ひとりとして私たちを訴えることはできないということです。なぜなら、神ご自身が私たちの味方であられるからです。

現在について言えば、つまり、誰が私たちを罪に定めることができるのか、という質問に対して、私たちは次のように答えることができます。誰も私たちを罪に定めることはできない。というのは、主イエス・キリストが私たちの為に死んでくださり、また、私たちのために生きてくださるからです。主イエスは裁き主であられます。しかし、主は信者をお裁きになること

はありません。信者に対しては、主はとりなしていただくさるのです。

将来に対する次のような質問があります。誰が我々を主から引き離すことができるであろうか。これに対して私たちは、誰もできない、と言うことができます。なぜなら、復活された主を通して、私たちは圧倒的な勝利者であり、すべてのことに打ち勝つて余りがあるのですから。

苦難や迫害を通して、主に属していないものは離れていくようになります。しかし一方、イエスに属する者たちは、苦難や迫害を通してこそ主イエスをよりよく知るようになるのです。36節には、私たちは「ほふられる羊とみなされた」と書いてありますが、このことは私たちが苦難に会うということをあらかじめ預言しているのです。

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。

(Ⅰペテロ4・12-14)

このような苦難の中にあっても、動揺する者がひとりもないようにするためでした。あなたがた自身が知っているとおり、私たちはこのような苦難に会うように定められているのです。あなたがたのところにいたとき、私たちは苦難に会うようになる、と前もって言っ

ておいたのですが、それが、ご承知のとおり、はたして事実となったのです。

(Ⅰテサロニケ3・3―4)

確かに、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。

(Ⅱテモテ3・12)

苦難の目的は三つあります。

1 信者を靈的に成長させるため、つまり、信仰を精錬するためです。

2 神に栄光を帰するためです。

3 そして、未信者が救われるためです。

パウロはステパノの殉教に感じて、心につきささるものがあり、そのことによつて後になつて救われるようになりました。

私たちはすでに28節において「神がすべてのことを働かせて益としてくださる」ということを学びました。苦難の最終的な目的は、信者がイエスに似たものとされることです。信者が苦難に会うということは、疑いもなく定められていることです。しかし、他ならぬその苦難の中にあつて、圧倒的な勝利者となることもまた約束されているのです。その勝利とは、はかることのできないほどの勝利です。昔、ローマ帝国のある皇帝が、部下の將軍に次のように言いました。「私たちの勝利は、ひとえに神によるものだった。もし、私たちが同じような戦いをもう一度するこ

とになったら、それは、勝利をおさめたとしても、負けたも同然であろう。」

聖書で述べている勝利とは、このようなわずかな勝利ではなく、言葉で言い表わすことができないほどの絶大な勝利なのです。

私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。(ピリピ 4・13)

神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。
(Ⅱコリント 2・14)

二つのことがらを通して、私たちは圧倒的な勝利者となることができます。それは、神の御霊が私たちの内に住んでくださることによって、また、神の右に座しておられるイエスが私たちのためにとりなしてくださることによってです。このような事実によってパウロに確信が生まれたのです。「私はこう確信しています(38節)」。

主イエスは復活なさることによって悪魔に打ち勝たれました。悪魔が力をふるうことができるのは、私たちが不信仰に陥っているとき、または、不従順に陥っているときです。私たちが完全に主イエスにお委ねし、主に従えば、悪魔は私たちに対して何ひとつすることはできません。

主イエスが啓示してくださった生ける神の愛から、いかなるものも私たちを引き離すことはできません。永遠に私たちは主イエスと結ばれた者です。それゆえ、私たちは主イエスに私たちの愛と礼拝を捧げるのです。主イエスは復活なさいました。そして、この主イエスが絶対的な主な

のです。この主イエスが、私たちのために生きておられます。このことが、私たちの喜びの源なのです。

（上巻終り）

基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくのです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えつつ読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださるでしょう。

一 みことばの大切さ

ヨハネ 17・17 エレミヤ 15・16 Iヨハネ 5・13 Iペテロ 1・23 詩篇 119・105、160、162

二 悔い改めと信仰

Iヨハネ 1・9 箴言 28・13 詩篇 32・1、5 イザヤ 55・6、7 ヨハネ 6・37

三 私たちの身代わりとなられたイエス

イザヤ 53・4、6 Iペテロ 2・24 IIコリント 5・21

四 血潮の価値

イザヤ 1・18 ローマ 3・24 } 25 Iヨハネ 1・7 エペソ 1・7 Iペテロ 1・18 } 19
黙示 12・11

五 確信の根拠

イザヤ 43・1、25 イザヤ 44・22 ルカ 7・48 ヘブル 8・12 ヘブル 10・17
詩篇 103・12 ヘブル 13・5 } 6

六 思いわずらうな

マタイ 13・22 マタイ 6・25 } 32 ピリピ 4・6 } 7 Iペテロ 5・7 } 9 詩篇 55・22

七 試練の時

ヤコブ 1・12 ヤコブ 4・7 } 8 Iコリント 10・13 Iペテロ 5・8 } 10
Iペテロ 1・5 } 7 IIコリント 12・9 } 10 ローマ 5・3 } 5 ローマ 8・28
イザヤ 40・29 } 31

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデのおすすめ

早稲田大学教授 野口 広記

いま健康にあふれ、幸せなあなたが、突然医師に「実はあなたは急性のがんにむしばまれていきます。長くとも後半年の生命です」と宣告されたとしましよう。その時あなたは、何を思いどんなことをするでしょうか。

リンデの両親のゴットホルド・ベック夫妻は、一九五三年に、日本へ、イエス・キリストの福音を宣べ伝えるためにやってきました。そして七年後の一九六〇年、最初のドイツへの里帰りの時、リンデは夫妻の四女として、ドイツのラウフェンで生まれました。数ヵ月後には夫妻とともに日本へ来て以来日本に住み、成長し、一九七九年からはドイツのある看護学校に入學し、勉強していたのでした。そして長女ハイデの結婚のため、一九八〇年六月にベック夫妻は西ドイツへ帰り、リンデと再会しました。

その翌日にリンデは、姉のウスラに、「私はがんだと思う」と告げたのです。想像外の事件がこのようにリンデの身に降りかかっていたのです。七月二十四日に手術を受けたのですが、すでに手遅れで、腹部は開けたものの、がんが全体に広がっていたので、そのまま閉じざるをえませんでした。リンデはその事実を知らされた時、「それなら、私はまもなくイエスさまのみもとに行くことを喜んでいきます。ただ私が、主のために少ししか実を結べなかったことが、とても残念です」とのべたのです。聖書のみことばが、リンデを力づけました。

私の心の思いが神のみこころにかないますように。私自身は、主を喜びましょう。

(詩篇 104・34)

激しい苦痛、呼吸困難にもかかわらず、八月二十日の最後の日まで、神の平安は、リンデから一度も離れませんでした。

実を結ぶ命

がんにうち勝った
ドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック 著



実を結ぶ命

がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック 編著

価 三三〇円

お読みになりたい方は、代価と郵送料（二冊まで二五〇円）を、郵便振替東京〇〇56116 吉祥寺キリスト集会あてお振り込みください。
（一〇冊以上は単価二五〇円・送料別）韓国語版、病床の方用の朗読テープもあります。

二十歳そこそこの乙女が、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇跡でなくてはなりません。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。」

それゆえ、わたしはいつくしみをもってあなたを引き寄せた」

（エレミヤ 31・3）

リンデの、主に従い通す態度は、吉祥寺キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起し、この証しの本に見られるように多くの人々が自分の支配権をイエスさまに明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ依り頼む者へと変えられています。

なおこの本は韓国語訳が出版されました。さらに病床にあつて本の読めない方がたのために、PBAのアナウンサー渡辺康子さんが朗読したテープ（8本1組）があります。

光よあれ第1集(既刊) 私たちは主のもの 25人の証しシリーズのおすすめ 古川一夫記

「光よあれ」第1集を読んだのがきっかけで、新しいクリスチャンがたくさん誕生しました。私もその中の一人ですが、まるで吸いこまれるように一気に読んだあの時の感激を忘れることはできません。二十五人の証しに感動し、あとがきのベックさんの言葉に衝撃を受け、気がついてみたらクリスチャンになっていました。まさに「光よあれ」です。それは、あつという間のことでした。



光よあれ 第1集 吉祥寺キリスト教会編

私たちは主のもの 25人の証しシリーズ

価三三〇円

お読みになりたい方は、代価と郵送料(二冊まで二五〇円)を、郵便振替東京〇〇56116吉祥寺キリスト教会あてお振り込みください。また、伝道用に一〇冊以上ご利用の方は、特別価格でご協力いたしますので一報ください。

「光よあれ」を読んでいると、二十五人の証しをされた方の喜びが、そのまま伝わってくるので、私は不思議な感じを受けました。本を読んで、なるほど、と思うことはよくあることです。

いつの場合でも著者と自分の間には、はっきり一線があるものです。それは、人間対人間ですから当然のことだと思えます。私が、二十五人の証しに心を打たれたのは、その人々を通して、不思議な力が働いていることを、肌で感じたからです。

証しを読んで感動した私は、今度はあとがきのベックさんの言葉に衝撃を受けました。それは第1集の二〇八頁にある次の言葉です。

「人生において、本当に大切なものは、死の直前の三十分前において、なおも重要な意味を持ち続けているものだけである」。

私は、自分の人生をこの言葉に照らしてみたとき、あまりの虚しさに愕然^{がくぜん}としてしまいました。ほとんどが、どうでもよいことだったのです。以来、人生観が一変しました。それまでは自分勝手に、自分は何歳ぐらいまでは生きられるだろうとして、自分の都合をいっぱい背負った息のつまらぬような生き方でした。しかし、今は違います。自分が現在やっていることは、イエス様のもとにいくのにはたして必要なことなのか、という人生観です。そして、イエス様のみもとへ行く栄光は、この世のどんなこととも比較のしようがないほど尊いものだからです。それこそ、比較などという言葉を使うのさえ恐れ多いことであり、人生においてこれほど大事なことはない、とはっきり分かったからです。

人生は、死の三十分前にのぞんだ時が肝心であります。

私は自分の一生を考えたとき、もしあのまま真実の救いに出会うことができなかつたら、と思うと慄然^{りうれん}とします。どうかこの「光よあれ」第1集もお読みになることをおすすめいたします。

光よあれ第2集 (既刊) 私たちは主のもの 25人の証しシリーズ のおすすすめ

アルコール依存症との凄惨な闘いの中から主の恵みによって新生を体験し、「受洗して二ヵ月後に、私たち家族は、また共に生活できるようになりました。わが家の新築祝いをかねて、はじめての家庭集会を持てました。血の親族からもドロップアウトしていた、見放されていた私にとって、それは喜びでした。主の祝福に感謝しつつ、声高らかに賛美しました」と力強く証しする染野茂夫さんの「駆けのほりし、主の道」。

花嫁修業に大奮闘をし、愛するご主人と結ばれたものの、あらゆる偶像崇拜に疲れ切って、あ



光よあれ 第2集 吉祥寺キリスト集会編
私たちは主のもの 25人の証しシリーズ

価五〇〇円

お読みになりたい方は、代価と郵送料（二冊まで二五〇円）を、郵便振替東京〇〇56116 吉祥寺キリスト集会あてお振り込みください。また、伝道用に一〇冊以上ご利用の方は、特別価格でご協力いたしますので一報ください。

る日家庭集会に出席し、はじめて生けるまことの神様と出会ってご主人に「清枝、本物の神を見つけたね。清枝は天国に行かれていいなあ……」とうらやましがられたユーモラスな宮田清枝さんの「偶像から解放されて」。

安宅産業崩壊の渦中であって、仕事と信仰について多くの試みを越え、「私の母や兄弟たち、そしてこの証しを読まれる方々が聖書を真剣に読んでくださり、主イエス様をご自分の人生に迎え入れてくださること、これが今の私の一番大きな願いです」と信仰を披瀝する松見敬三さんの「曙からお昼過ぎまで」。

愛する一人娘を失い、「古くて新しい重要な問題、それは医師の病人に対する態度、姿勢、とくに人間の魂、霊に対する姿勢です」と改めて医の倫理の問題を提起される東海大医学部教授の重田定義さんの「主の御名はほむべきかな」。

光よあれ第2集には、このような多くの方々の卒直で飾らない真実の証しが満ち満ちています。また巻末には、無限の宇宙の中で訳が分らなくなった人間、その人間の理性ではなく、神の啓示こそが神を知る鍵である、と神の愛を説き新しい人生の出發をすすめたゴットホルド・ベックさんの「無限の宇宙にある神」ほか、すばらしいメッセージが採録されています。

多くの未信者にショックを与え、聖書のみことばを通して真の救いへと導く器となったこの第2集を、ぜひ本書と併せてお読みになることを、心からおすすめいたします。

神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。

(使徒 17・27、28)

光よあれ第3集（既刊） 私たちは主のもの 42人の証しシリーズ のおすすめ

聖書の福音に接して、救いを受け入れる方々がどんどん増えてきています。そのため、この第3集からは証しをする方々を42人と増やし、カラー刷りを倍の16ページに増ページしました。内容は、反発しながらも少しずつ聖書の福音に目覚めてゆく過程を詳細に描いた尾崎英昭さんの「すべては光の中へ」、大学紛争のさ中、酒枝先生を通して聖書と出会い、救いを受け入れた蘇畑卓郎さんの「とこしえの磐」、またご夫婦それぞれの立場から信仰に至る道と深い体験を述べられた3組の夫婦による証しなど、充実した内容になっています。また巻末には、ベックさんのメッセージ、「みこころが地でも行なわれますように」が納められています。第1、2集と併せて、ぜひお読みください。



光よあれ 第3集 吉祥寺キリスト教会編
私たちは主のもの 42人の証しシリーズ

価三三〇円

お読みになりたい方は、代価と郵送料（二冊まで二五〇円）を、郵便振替東京0156116吉祥寺キリスト教会あてお振り込みください。また、伝道用に一〇冊以上ご利用の方は、特別価格でご協力いたしますので一報ください。

光よあれ第4集 私たちは主のもの 証しシリーズの予告

「光よあれ」シリーズは、福音を宣べ伝えるさやかな器として主に用いられ、今までに第3集までが出版されてきましたが、さらに今後も、年1回程度のペースで次々と刊行してゆく予定です。すでに第1、2、3集は、主の威力によって主にある兄弟姉妹がたを通して多くの未信者の方々に広められ、多くの方が福音に接し、救いを受け入れ、聖書のみことばに立つまことの信仰に導かれるきっかけとなって、反響の波が日本中に広がっております。

この証しの本を刊行する趣旨そのものも、また、聖書のみことばに立つております。

この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。

(Iコリント 1・21)

第4集も、近く刊行の予定ですので、楽しみにお待ちください。

なお、「光よあれ」の本づくりは、編集・割付け・装幀など吉祥寺集會に集う兄弟姉妹がたの主にある協同作業で作られています。印刷・製本以外はすべて手づくりというわけです。この証しの本のシリーズは、通常の本のようにかなづかいを機械的に統一することは避け、お一人お一人の筆づかいを尊重しながら編集するという方針をとっております。

また価格は、一人でも多くの方に配っていただきたいという願いをこめて、思い切った低価格でお頒けする方針でおります。

ぜひ、一人でも多くの方にお渡しいただき、主のご栄光が日本中に広まりますよう、ご協力をお願い申しあげます。

近刊「何ものも私たちを神の愛から引き離すことはできない」下巻

ゴットホルド・ベック著

本書の下巻が近く刊行されます。吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びの内、「ローマ人への手紙9から16章」を一冊にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、上巻に続いて9章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。

「ローマ人への手紙」は、聖書全体のエッセンスであり、その栄光と恵みに満ちた福音があますところなく語られています。「ローマ人への手紙」を通して主が語ろうとしておられることに注意深く心を向けるなら、私たちは主のすばらしさをさらに深く体験でき、勝利の道を歩むことができるようになるでしょう。

私たちは、私たちを愛してくださいとくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。
(ローマ 8・37)

私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たつた一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長してゆくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。

この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

なお、本書は現在編集中です。上巻とあわせ、ささやかな主の器の一つとして、一人でも多くの方々に広めていただきますことをお祈りしています。また、本書の朗読テープも用意しています。

主イエスは言われた。

**見よ。わたしは、世の終わりまで、
いつもあなた方と共にいます。**

マタイ28:20

牧師制度がありません

私たちの吉祥寺キリスト集会には、牧師制度がありません。会社員、公務員、教師、医者、経営者、芸術家、弁護士、技術者などさまざまな職業を持つ人々が集まって、自発的に責任を分かちあい、一切強制されることなく、純粹に聖書のみ言葉によりたのみ、交わりを保つものの集いです。

会員制度がありません

もちろん名簿もありません。ですから「会員」になりたくてもなれないのです。いわゆる宗教団体的な制度は一切排除して、主ご自身のみが頭となって働かれ、導かれ、主ご自身が満ち満ちておられることのみを祈り求めている集会です。

組織・会則がありません

私たちの集会には、役員会も、総会も、定例会議も、会則も存在しません。みんなが助けあって重荷を分かちあい、全てが自発的に、喜びをもってなされています。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度がなく、献金は自発的に行なわれ、無記名ですから主のみがご存じです。

日曜礼拝と家庭集会

毎日曜日10時半と夕3時に主の十字架の血潮をしのぐための礼拝があり、その後の福音集会では兄弟たちが交代でメッセージを伝えます。また、全国には50箇所以上に家庭集会があり、中には礼拝を行なっている所も増えています。

180東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11

TEL 0422-21-8450 / 22-2016

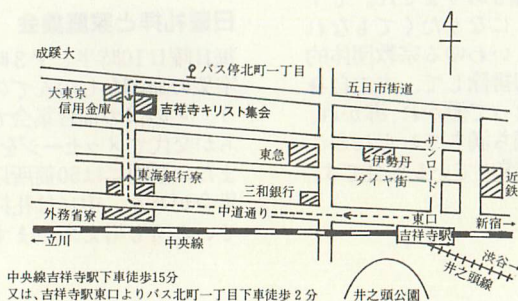
郵便振替口座番号 東京0-56116

吉祥寺キリスト集会

吉祥寺キリスト集会のご案内

吉祥寺キリスト集会は、純粋に聖書の真理だけを学び、伝える者の集いです。会員制度を持たず、出入りは自由であり、いかなる党派・組織にも属していません。この本をお読みになって聖書と福音に関心のある方は、ぜひ集会にお気軽においでください。

日曜礼拝	一〇・四五
日曜メッセージ	一一・五〇
子供日曜学校	九・〇〇
中高生日曜クラス	九・〇〇
青年日曜クラス	一四・三〇
火曜学び会	一一・〇〇
水曜学び会	一九・三〇
木曜祈り会	一九・三〇
春・夏・秋 各祝祭日午後 交わり会	軽井沢バイブルキャンプ



〒180 東京都 武蔵野市 吉祥寺本町 4-9-11
電話 0422-21-8450 (集会所) / 0422-22-2016 (バック宅)
(エホバの証者、モルモン教、カリスマ運動、統一原理とは関係ありません)

なにものも私たちを
神の愛
から引き離すことはできない
上巻

定価300円

昭和61年 8月10日初版

著 者 ゴットホルド・ベック

装 幀 飯守恪太郎
編 集 野口修・酒井千尋
ローマ写真撮影 源敏彦 (彫刻家・ローマ在住)
印 刷 新生運動

発行所 吉祥寺キリスト集会

〒180 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11
電話 0422-21-8450 (集 会 所)
0422-22-2016 (ベック宅)
振替 東京 0-56116



現在、吉祥寺キリスト集会に集う夫人たちの聖書。

私の目を開いてください。私が、あなたのおおしえのうちにある奇しいことに目を留めるようにしてください。

これこそ悩みのときの私の慰め。まことにみことばは私を生かします。

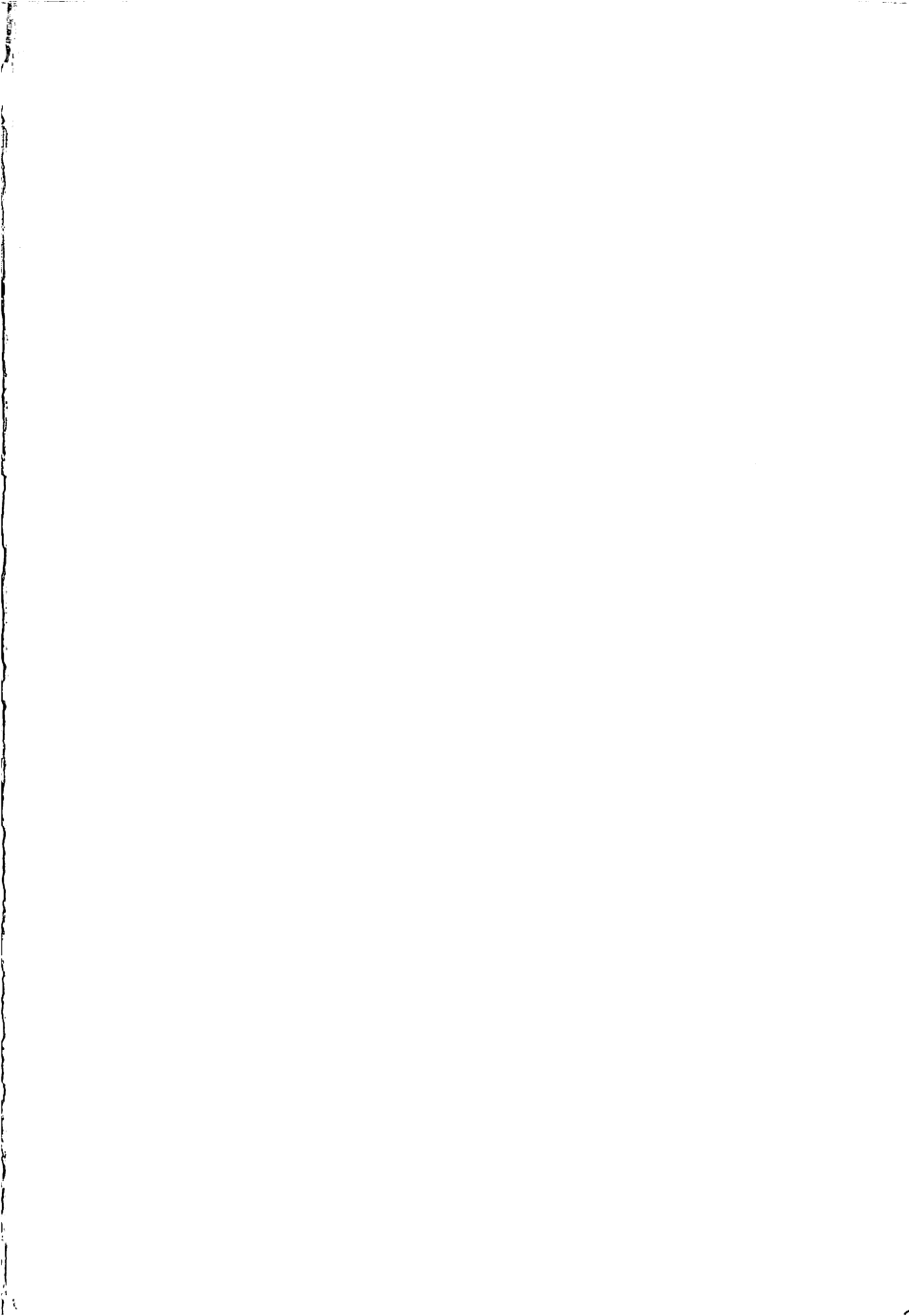
私のたましいは、あなたの救いを慕って絶え入るばかりです。

私はあなたのみことばを待ち望んでいます。

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまのない者に悟りを与えます。

(詩篇 119・18、50、81、105、130)





源 敏彦 氏撮影

ウンベルトI世橋よりローマ・サンタンジェロ城を望む。

定価 300円